

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
2	規則	02	1.01	1.01	試合の目的	野球は、囲いのある競技場で、監督が指揮する9人のプレーヤーから成る二つのチームの間で、1人ないし数人の審判員の権限のもとに、本規則に従って行なわれる競技である。
6	規則	06	1.05	1.02	試合の目的	各チームは、相手チームより多くの得点を記録して、勝つことを目的とする。
7	規則	07	1.06	1.03	試合の目的	正式試合が終わったとき、本規則によって記録した得点の多い方が、その試合の勝者となる。
9	規則	02	2.01	1.04	競技場の設定	<p>競技場は、次に示す要領により、巻頭1、2、3図のように設定する。</p> <p>まず、本塁の位置を決め、その地点から二塁を設けたい方向に、鋼鉄製巻尺で、127<sup>2</sup>/<sub>16</sub>3<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ(38.795<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)の距離を測って二塁の位置を定める。次に本塁と二塁を基点にしてそれぞれ90<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(27.431<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)を測り、本塁から向かって右側の交点を一塁とし、本塁から向かって左側の交点を三塁とする。したがって、一塁から三塁までの距離は127<sup>2</sup>/<sub>16</sub>3<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチとなる。</p> <p>本塁からの距離は、すべて一塁線と三塁線との交点を基点として測る。</p> <p>本塁から投手板を経て二塁に向かう線は、東北東に向かっていることを理想とする。</p> <p>90<sup>2</sup>/<sub>16</sub>平方の内野を作るには、まず各ベースライン(塁線)およびホームプレート(本塁)を同一水平面上に設け、続いて内野の中央付近に投手板をホームプレートより10<sup>4</sup>/<sub>16</sub>インチ(25.4<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ)高い場所に設け、投手板の前方6<sup>4</sup>/<sub>16</sub>インチ(15.2<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ)の地点から、本塁に向かって6<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(182.9<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ)の地点まで、1<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(30.5<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ)につき1<sup>4</sup>/<sub>16</sub>インチ(2.5<sup>3</sup>/<sub>16</sub>インチ)の傾斜をつけ、その傾斜は各競技場とも同一でなければならない。</p> <p>本塁からバックストップまでの距離、塁線からファウルグラウンドにあるフェンス、スタンドまたはプレイの妨げになる施設までの距離は、60<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(18.288<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)以上を必要とする。(1図参照)</p> <p>外野は、1図に示すように、一塁線および三塁線を延長したファウルラインの間の地域である。本塁よりフェアグラウンドにあるフェンス、スタンドまたはプレイの妨げになる施設までの距離は250<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(76.199<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)以上を必要とするが、両翼は320<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(97.534<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)以上、中堅は400<sup>2</sup>/<sub>16</sub>インチ(121.918<sup>1</sup>/<sub>16</sub>メートル)以上あることが優先して望まれる。</p> <p>境界線(ファウルラインおよびその延長として設けられたファウルポール)を含む内野および外野は、フェアグラウンドであり、その他の地域はファウルグラウンドである。</p> <p>キャッチャースボックス、バッタースボックス、コーチスボックス、スリーフット・ファーストベースラインおよびネクスト・バッタースボックスは巻頭1、2図のように描く。</p> <p>図表中のファウルラインおよび太線で示されている諸線は、塗料、または無害かつ不燃性のチョーク、その他の白い材料で描く。</p> <p>巻頭1図のグラスライン(芝生の線)および芝生の広さは、多くの競技場が用いている規格を示したものであるが、その規格は必ずしも強制されるものではなく、各クラブは任意に芝生および芝生のない地面の広さや形を定めることができる。</p>
12	規則	05	2.01【軟式注】	1.04	学童部の距離	学童部では、投手板と本塁間および各塁間の距離を次のとおりとする。 塁間の距離は23 <sup>1</sup> / <sub>16</sub> メートル。投手板と本塁との距離は16 <sup>1</sup> / <sub>16</sub> メートル。
10	規則	03	2.01【付記】a	1.04付記a	球場の距離	(a)1958年6月1日以降プロフェッショナル野球のクラブが建造する競技場は、本塁より左右両翼のフェンス、スタンドまたは左右両翼のフェアグラウンド上にあるプレイの妨げになる施設までの最短距離は325 <sup>2</sup> / <sub>16</sub> インチ(99.058 <sup>1</sup> / <sub>16</sub> メートル)、中堅のフェンスまでの最短距離は400 <sup>2</sup> / <sub>16</sub> インチ(121.918 <sup>1</sup> / <sub>16</sub> メートル)を必要とする。
11	規則	04	2.01【付記】b	1.04付記b	球場の改造	(b)1958年6月1日以降現在の競技場を改造するにあたっては、本塁より左右両翼および中堅のフェンスまでの距離を、前記の最短距離以下に短縮することはできない。
13	規則	06	2.02	1.05	本塁	本塁は五角形の白色のゴム板で表示する。この五角形を作るには、まず1辺が17 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(43.2 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)の正方形を描き、17 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチの1辺を決めてこれに隣り合った両側の辺を8 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(21.6 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)とする。それぞれの点から各12 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(30.5 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)の2辺を作る。12 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチの2辺が交わった個所を本塁一塁線、本塁三塁線の交点に置き、17 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチの辺が投手板に面し、二つの12 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチの辺が一塁線および三塁線に一致し、その表面が地面と水平になるように固定する。(巻頭2図参照)
14	規則	07	2.03	1.06	塁	一塁、二塁、三塁は、白色のキャンバスまたはゴムで被覆されたバッグで表示し、巻頭2図に示すように地面に正しく固定する。 一塁と三塁のバッグは、完全に内野の内に入るように設置し、二塁のバッグは、図表の二塁の地点にその中心がくるように設置する。 キャンバスバッグはその中に柔らかい材料を詰めて作り、その大きさは15 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(38.1 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)平方、厚さは3 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(7.6 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)ないし5 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(12.7 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)である。
15	規則	08	2.04	1.07	投手板	投手板は横24 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(61.0 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)縦6 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(15.2 <sup>3</sup> / <sub>16</sub> インチ)の長方形の白色ゴムの平板で作る。投手板は巻頭1、2、3図に示す個所の地面に固定し、その前縁の中央から本塁(五角形の先端)までの距離は60 <sup>2</sup> / <sub>16</sub> 6 <sup>4</sup> / <sub>16</sub> インチ(18.44 <sup>1</sup> / <sub>16</sub> メートル)とする。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容																		
16	規則	09	2.05	1.08	ベンチ	ホームクラブは、各ベースラインから最短25フィート(7.62メートル)離れた場所に、ホームチーム用およびビジティングチーム用として、各1個のプレーヤースペンを設け、これには左右後方の三方に囲いをめぐらし、屋根を設けることが必要である。																		
18	規則	02	3.01	1.09	ボール	ボールはコルク、ゴムまたはこれに類する材料の小さい芯に糸を巻きつけ、白色の馬皮または牛皮2片でこれを包み、頑丈に縫い合わせて作る。重量は5オンスないし5¼オンス(141.7グラム～148.8グラム)、周囲は9インチないし9¼インチ(22.9センチ～23.5センチ)とする。																		
19	規則	03	3.01【注1】	1.09	使用皮	我が国では牛皮のものをを用いる。																		
20	規則	04	3.01【軟式注】	1.09	軟式ボール大きさ・重さ	軟式野球ボールは、外周はゴム製で、A号、B号、C号、D号、H号の5種類がある。A号は一般用、B、C、D号は少年用のいずれも中空ボールで、H号は一般用の充填物の入ったボールである。 ボールの標準は次のとおりである。(反発は150センチの高さから大理石板に落として測る) <table border="1"> <thead> <tr> <th>直径</th> <th>重量</th> <th>反発</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A号 71.5ミリ～72.5ミリ</td> <td>134.2グラム～137.8グラム</td> <td>85.0センチ～105.0センチ</td> </tr> <tr> <td>B号 69.5ミリ～70.5ミリ</td> <td>133.2グラム～136.8グラム</td> <td>80.0センチ～100.0センチ</td> </tr> <tr> <td>C号 67.5ミリ～68.5ミリ</td> <td>126.2グラム～129.8グラム</td> <td>65.0センチ～85.0センチ</td> </tr> <tr> <td>D号 64.0ミリ～65.0ミリ</td> <td>105.0グラム～110.0グラム</td> <td>65.0センチ～85.0センチ</td> </tr> <tr> <td>H号 71.5ミリ～72.5ミリ</td> <td>141.2グラム～144.8グラム</td> <td>50.0センチ～70.0センチ</td> </tr> </tbody> </table>	直径	重量	反発	A号 71.5ミリ～72.5ミリ	134.2グラム～137.8グラム	85.0センチ～105.0センチ	B号 69.5ミリ～70.5ミリ	133.2グラム～136.8グラム	80.0センチ～100.0センチ	C号 67.5ミリ～68.5ミリ	126.2グラム～129.8グラム	65.0センチ～85.0センチ	D号 64.0ミリ～65.0ミリ	105.0グラム～110.0グラム	65.0センチ～85.0センチ	H号 71.5ミリ～72.5ミリ	141.2グラム～144.8グラム	50.0センチ～70.0センチ
直径	重量	反発																						
A号 71.5ミリ～72.5ミリ	134.2グラム～137.8グラム	85.0センチ～105.0センチ																						
B号 69.5ミリ～70.5ミリ	133.2グラム～136.8グラム	80.0センチ～100.0センチ																						
C号 67.5ミリ～68.5ミリ	126.2グラム～129.8グラム	65.0センチ～85.0センチ																						
D号 64.0ミリ～65.0ミリ	105.0グラム～110.0グラム	65.0センチ～85.0センチ																						
H号 71.5ミリ～72.5ミリ	141.2グラム～144.8グラム	50.0センチ～70.0センチ																						
24	規則	08	3.02	1.10	バット																			
25	規則	09	3.02a	1.10a	太さと長さ	バットはなめらかな円い棒であり、太さはその最も太い部分の直径が2.61インチ(6.6センチ)以下、長さは42インチ(106.7センチ)以下であることが必要である。バットは1本の木材で作られるべきである。																		
27	規則	11	3.02a【注1】	1.10a注1	プロ野球の制約	我が国のプロ野球では、金属製バット、木片の接合バットおよび竹の接合バットは、コミッショナーの許可があるまで使用できない																		
26	規則	10	3.02a【付記】	1.10a付記	接合バット他	接合バットまたは試作中のバットは、製造業者がその製造の意図と方法とについて、規則委員会の承認を得るまで、プロフェッショナル野球(公式試合および非公式試合)では使用できない。																		
28	規則	12	3.02a【注2】	1.10a注2	アマ各連盟の公認	アマチュア野球では、各連盟が公認すれば、金属製バット、木片の接合バットおよび竹の接合バットの使用を認める。ただし、接合バットについては、バット内部を加工したものは認めない。(6.03a4参照)																		
29	規則	13	3.02a【注3】	1.10a注3	アマ金属製バットの規定	アマチュア野球では、金属製バットを次のとおり規定する。 ① 最大径の制限 — バットの最大直径は、67ミリ未満とする。 ② 質量の制限 — バットの質量は、900グラム以上とする。なお、金属製バットの質量とは完成品であり、ヘッドキャップ(一体成形等により、ヘッドキャップを用いていないものにあつては、それと同等の部位)、グリップエンドノブ、グリップテープを除いた本体の質量は、810グラム±10グラム以上とする。 ③ 形状の制限 — 金属製バットの形状は、先端からグリップ部までは、なだらかな傾斜でなければならない。なお、なだらかな傾斜とは、打球部からグリップ部までの外径の収縮率(全体傾斜率)が、10%を超えないことをいう。また、テーパ部の任意の個所においても、50ミリの間での外径収縮率(最大傾斜率)は、20%を超えないことをいう。																		
31	規則	15	3.02b	1.10b	カップバット	バットの先端をえぐるときには、深さ1¼インチ(3.2センチ)以内、直径1インチ以上2インチ(5.1センチ)以内で、しかもそのくぼみの断面は、碗状にカーブしていなければならない。なお、この際、直角にえぐったり、異物を付着させてはならない。																		
32	規則	16	3.02c	1.10c	バットの握り部分	バットの握りの部分(端から18インチ(45.7センチ))には、何らかの物質を付着したり、ザラザラにして握りやすくすることは許されるが、18インチの制限を超えてまで細工したバットを試合に使用することは禁じられる。																		
35	規則	19	3.02d	1.10d	着色バット	プロフェッショナル野球では、規則委員会の認可がなければ、着色バットは使用できない。																		
36	規則	20	3.02d【注1】	1.10d注1	プロ別規定	我が国のプロ野球では、着色バットの色については別に定める規定に従う。																		
37	規則	21	3.02d【注2】	1.10d注2	アマ別規定	アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。																		

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
34	規則	18	3.02c【原注】	1.10原注	パインターール	パインターールが18 <sup>インチ</sup> の制限を超えて付着していた場合には、審判員は、自らの判断や相手チームからの異議があれば、バットの交換を命じる。制限を超えた部分のパインターールが取り除かれた場合だけ、打者は以後その試合でそのバットを使用することができる。バットの使用以前に指摘がなければ、本項に適合していないバットによるプレイはすべて有効であり、また、そのプレイについて提訴は認められない。
30	規則	14	3.02a【軟式注】	1.10軟式注	軟式適用せず	軟式野球では、この規定を適用しない。
33	規則	17	3.02c【付記】	1.10付記	使用バットの不適合	審判員は、打者の使用したバットが、打者の打撃中または打撃終了後に、本項に適合していないことを発見しても、打者にアウトを宣告したり、打者を試合から除いたりする理由としてはならない。
38	規則	22	3.03	1.11	ユニフォーム	
84	規則	68	【3.03～3.09原注】	1.11～1.17原注	規則違反の処置	審判員は各項に対する規則違反を認めた場合には、これを是正するように命じる。審判員の判断で、適宜な時間がたっても是正されない場合には、違反者を試合から除くことができる。
39	規則	23	3.03a	1.11a1	背番号	同一チームの各プレーヤーは、同色、同形、同意匠のユニフォームを着用し、そのユニフォームには6 <sup>インチ</sup> (15.2 <sup>センチ</sup> )以上の大きさの背番号をつけなければならない。
40	規則	24	3.03b	1.11a2	アンダーシャツ	アンダーシャツの外から見える部分は、同一チームの各プレーヤー全員が同じ色でなければならない。投手以外の各プレーヤーは、アンダーシャツの袖に番号・文字・記章などをつけることができる。
41	規則	25	3.03c	1.11a3	異なるユニフォーム	自チームの他のプレーヤーと異なるユニフォームを着たプレーヤーは試合には参加できない。
44	規則	28	3.03d2	1.11b	ユニフォームの規定	各チームは、ホームゲーム用として白色、ロードゲーム用として色物の生地を用いて作った2組のユニフォームを用意しなければならない。
43	規則	27	3.03d1	1.11b1	ユニフォームの規定	各チームは、常に独自のユニフォームを着なければならない。
45	規則	29	3.03d2【注】	1.11b注	アマ野球規定	アマチュア野球では、必ずしもホームチームのときは白色、ビジティングチームのときは色物のユニフォームを着なくてもよい。
46	規則	30	3.03e	1.11c	ユニフォームの袖の長さ	各プレーヤーのユニフォームの袖の長さは、各人によって異なってもよいが、各自の両袖の長さは、ほぼ同一にしなければならない。各プレーヤーは、その袖がボロボロになったり、切れたり、裂けたりしたユニフォームおよびアンダーシャツを着てはならない。
47	規則	31	3.03f	1.11d	ユニフォームに付けれない	各プレーヤーは、そのユニフォームの色と異なった色のテープまたはその他のものを、ユニフォームにつけることはできない。
48	規則	32	3.03g	1.11e	ユニフォームに付けれない	ユニフォームには、野球用ボールをかたどったり、連想させるような模様をつけてはならない。
49	規則	33	3.03h	1.11f	ユニフォームに付けれない	ガラスのボタンやピカピカした金属を、ユニフォームにつけることはできない。
50	規則	34	3.03i	1.11g	スパイク	靴のかかとやつま先には、普通使われている部品以外のものをつけてはならない。ゴルフシューズ、または陸上競技用シューズに使われているスパイクに類似した、先のとがったスパイクをつけたシューズは使用できない。
42	規則	26	3.03c【注】	1.11g注	コートを着ての競技参加	各プレーヤーはコートを着て競技にたずさわることにはできない。ただし、ベースコーチと走者となった投手を除く。
51	規則	35	3.03j	1.11h	ユニフォームに付けれない	ユニフォームのいかなる部分にも、宣伝、広告に類する布切れまたは図案をつけてはならない。
52	規則	36	3.03j【注1】	1.11h注1	プロ規定	我が国のプロ野球では、本項を適用しない。
53	規則	37	3.03j【注2】	1.11h注2	アマ規定	アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。
54	規則	38	3.03k	1.11i	プレーヤーの名前	リーグは、所属するチームのユニフォームの背中にプレーヤーの名前をつけるように規定することができる。プレーヤーの姓以外の他の名前をつける場合は、リーグ会長の承認を必要とする。名前をつけることが決定した場合は、チーム全員のユニフォームにつけなければならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
55	規則	39	3.03k【注】	1.11i注	アマ規定	アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。
56	規則	40	3.04	1.12	捕手のミット	捕手の皮製ミットの重量には制限がない。その大きさは、しめひも、皮のバンドまたはミットの外縁につけられているふちどりも含めて外周で38 $\frac{1}{2}$ インチ(96.5 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、ミットの先端から下端までは15 $\frac{1}{2}$ インチ(39.4 $\frac{1}{2}$ センチ)以下でなければならない。ミットの親指の部分と人さし指の部分との間隔は、その先端で6 $\frac{1}{2}$ インチ(15.2 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、親指の又状の部分で4 $\frac{1}{2}$ インチ(10.2 $\frac{1}{2}$ センチ)以下でなければならない。 親指と人さし指との間にある網は、両指の先端をつなぐ部分の長さは7 $\frac{1}{2}$ インチ(17.8 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、先端から親指の又状の部分までの長さは6 $\frac{1}{2}$ インチ以下で作る。網はひもで編んだものでも、皮革で被覆したひもで編んだものでも、または、手のひらの部分の延長となるように皮革をひもでミットに結びつけたものでもよいが、前記の寸法を超えてはならない。
57	規則	41	3.05	1.13	一塁手のミット	一塁手の皮製グラブまたはミットの重量には制限がない。その大きさは、縦が先端から下端まで12 $\frac{1}{2}$ インチ(30.5 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、親指の又状の部分からミットの 外縁まで測った手のひらの幅が8 $\frac{1}{2}$ インチ(20.3 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、ミットの親指の部分と人さし指の部分との間隔は、ミットの先端で4 $\frac{1}{2}$ インチ(10.2 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、親指の又状の 部分で3 $\frac{1}{2}$ インチ(8.9 $\frac{1}{2}$ センチ)以下でなければならない。この間隔は一定に保ち、皮以外のものを用いたり、特殊な方法で間隔を大きくしたり、伸ばしたり広げ たり、深くすることは許されない。 親指と人さし指との間にある網は、その先端から親指の又状の部分まで長さが5 $\frac{1}{2}$ インチ(12.7 $\frac{1}{2}$ センチ)以下になるように作る。網はひもで編んだものでも、皮革 で被覆したひもで編んだものでも、または、手のひらの部分の延長となるような皮革をひもでミットに結びつけたものでもよいが、前記の寸法を超え てはならない。しかし、網のひもに皮以外のものを巻きつけたり、ひもを皮以外のもので包んだり、または網を深くしてわな(トラップ)のようなあみ形 にすることは許されない。
58	規則	42	3.05【注】新			<新>我が国では、縦の大きさを先端から下端まで13 $\frac{1}{2}$ インチ(33.0 $\frac{1}{2}$ センチ)以下とする。
59	規則	43	3.06	1.14	野手のグラブ	捕手以外の野手の皮製グラブの重量には制限がない。グラブの寸法を測るには、計測具または巻尺をグラブの前面またはボールをつかむ側に接 触させ、外形をたどるようにする。その大きさは、縦が4本の指の各先端から、ボールが入る個所を通してグラブの下端まで12 $\frac{1}{2}$ インチ(30.5 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、手の ひらの幅は、人さし指の下端の内側の縫い目から、各指の下端を通して小指外側の縁まで7 $\frac{1}{2}$ インチ(19.7 $\frac{1}{2}$ センチ)以下である。 親指と人さし指との間、いわゆる又状の部分(クロッチ)に皮の網または壁形の皮製品を取りつけてもよい。網はクロッチをぴったりふさぐように2枚の 普通の皮を重ね合わせて作っても、トンネル型の皮や長方形の皮をつなぎ合わせて作っても、または皮ひもを編んだもので作ってもよいが、わな(ト ラップ)のようなあみ形にするために皮以外のものを巻きつけたり、皮以外のもので包むことは許されない。 網がクロッチをきっちりふさいだとき、網は柔軟性があってもさしつかえない。数個の部品をつなぎ合わせて網を作るにあたって、それぞれをぴった りとくっつけなければならない。しかし、部品をわん曲させてくぼみを大きくさせてはならない。網はクロッチの大きさを常に制御できるように作らな ければならない。 クロッチの大きさは、その先端の幅が4 $\frac{1}{2}$ インチ(11.4 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、深さが5 $\frac{1}{2}$ インチ(14.6 $\frac{1}{2}$ センチ)以下、下端の幅が3 $\frac{1}{2}$ インチ(8.9 $\frac{1}{2}$ センチ)以下である。網はクロッチの上下左右どの 部分にでも、きっちり取りつけられていなければならない。皮のしめひもで結びつけられたものは、しっかりとつなぎ合わされ、伸びたりゆるんだり したときには、正常の状態に戻さなければならない。
60	規則	44	3.06【注】新			<新>我が国では、縦の大きさを先端から下端まで13 $\frac{1}{2}$ インチ(33.0 $\frac{1}{2}$ センチ)以下とする。
61	規則	45	3.07	1.15	投手のグラブ	
65	規則	49	3.07c	1.15	投手用グラブの取替	球審は、自らの判断または他の審判員の助言があれば、あるいは相手チームの監督からの異議に球審が同意すれば、本条(a)または(b)項に違反 しているグラブを取り替えさせる。
62	規則	46	3.07a	1.15a	投手用グラブの色	投手用のグラブは縫い目、しめひも、網を含む全体が1色であることが必要で、しかもその色は、白色、灰色以外のものでなければならない。 守備位置に関係なく、野手はPANTONE®の色基準14番よりうすい色のグラブを使用することはできない。
63	規則	47	3.07a【注】	1.15a注	アマ規定	アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。
64	規則	48	3.07b	1.15b	投手用グラブにつけれない	投手は、そのグラブの色と異なった色のものを、グラブにつけることはできない。
66	規則	50	3.08	1.16	ヘルメット	プロフェッショナルリーグでは、ヘルメットの使用について、次のような規則を採用しなければならない。
67	規則	51	3.08a	1.16a	ヘルメットの着用	プレーヤーは、打撃時間中および走者として塁に出ているときは、必ず野球用ヘルメットをかぶらなければならない。
68	規則	52	3.08b	1.16b	両耳ヘルメットの着用	マイナーリーグのプレーヤーは、打撃に際して両耳フラップヘルメットを着用しなければならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
69	規則	53	3.08c	1.16c	片耳ヘルメットの着用	メジャーリーグのプレーヤーは、片耳フラップヘルメット(プレーヤーが両耳フラップヘルメットを選んでもよい)を着用しなければならない。
70	規則	54	3.08c【注】	1.16c	アマ規定	アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。
71	規則	55	3.08d新	1.16d	捕手のヘルメットの着用	捕手が《投球を受けるとき》は、捕手の防護用のヘルメット《およびフェイスマスク》を着用しなければならない。
72	規則	56	3.08e	1.16e	ベースコーチのヘルメット着用	ベースコーチは、コーチボックスにいるときには、防護用のヘルメットを着用しなければならない。
73	規則	57	3.08f	1.16f	バットボーイ等のヘルメット着用	バットボーイ、ボールボーイまたはバットガール、ボールガールは、その仕事にたずさわっているときは、防護用の両耳フラップヘルメットを着用しなければならない。
74	規則	58	3.09	1.17	商業的宣伝	ベース、投手板、ボール、バット、ユニフォーム、ミット、グラブ、ヘルメットその他本規則の各条項に規定された競技用具には、それらの製品のための不適当かつ過度な商業的宣伝が含まれてはならない。 製造業者によって、これらの用具にしるされる意匠、図案、商標、記号活字および用具の商品名などは、その大きさおよび内容において妥当とされる範囲のものでなければならない。 本条は、プロフェッショナルリーグだけに適用される。
76	規則	60	3.09【注1】	1.17注1	販売業者	製造業者には、販売業者を含む。
77	規則	61	3.09【注2】	1.17注2	製造業者以外の宣伝	製造業者(販売業者を含む)以外のものの宣伝は、いずれの競技用具にも一切つけてはならない。
78	規則	62	3.09【注3】①	1.17注3①	バットの商標	バットの表面の焼印などの内容およびサイズなどは後記の範囲内にとどめなければならない バットの先端部分には、バットモデルと、バットの品名、品番、材種のみを表示するものとし、マーク類は表示できない。 なお、これらの表示については、レーザー照射による文字入れを認める。 これらの表示は、バットの長さに沿って、縦5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下・横9.5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下の範囲内におさめ、文字の大きさは、それぞれ縦2 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下、横2 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下でなければならない。 握りに近い部分には、製造業者または製造委託者の名称を含む商標を表示するものとし、これらの表示は、バットの長さに沿って、縦6.5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下、横12.5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下の範囲内におさめなければならない。 前記商標などは、すべてバットの同一面に表示しなければならない。
79	規則	63	3.09【注3】②	1.17注3②	ユニホーム等の商標	ユニフォーム(帽子、ストッキングを含む)、ベルト、ソックス、アンダーシャツ、ウィンドブレイカー、ジャンパー、ヘルメットの表面のいかなる部分にも商標などの表示をすることはできない。
80	規則	64	3.09【注3】③	1.17注3③	ミットの商標	ミットまたはグラブに表示する商標は、布片、刺繍または野球規則委員会の承認を受けた樹脂製の成型物によるものとし、これを表示する個所は背帯あるいは背帯に近い部分、または親指のつけ根の部分のうちいずれか1カ所に限定し、その大きさは縦4 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下、横7 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下でなければならない。 マーク類を布片、刺繍または樹脂製の成型物によって表示する場合(エナメル素材のように光る素材での表示は認められない)は、親指のつけ根に近い個所に限定し、その大きさは、縦3.5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下、横3.5 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下でなければならない。 投手用グラブに商標およびマーク類を布片または刺繍によって表示する場合、その色は、文字の部分を含み、すべて白色または灰色以外の色でなければならない。ただし、野球規則委員会が特に認めた場合は、この限りではない。 品名、品番、マーク類などをスタンプによって表示する場合の色は、黒色または焼印の自然色でなければならない。
81	規則	65	3.09【注3】④	1.17注3④	手袋・リストバンドの商標	手袋およびリストバンドに商標などを表示する場合は、1カ所に限定し、その大きさは、14平方 <sup>9</sup> / <sub>16</sub> 以下でなければならない。
82	規則	66	3.09【注3】⑤	1.17注3⑤	その他用具の適否	以上の用具以外の用具のコマーシャリゼーションについては、本条の趣旨に従い、野球規則委員会がその都度、その適否を判断する。
83	規則	67	3.09【注4】	1.17注4	アマ規定	本条は、アマチュア野球でも適用することとし、所属する連盟、協会の規定に従う。
75	規則	59	3.09【付記】	1.17付記	プロの用具変更同意	製造業者が、プロフェッショナルリーグ用の競技用具に、きわだった新しい変更を企図するときには、その製造に先立ちプロ野球規則委員会にその変更を提示して同意を求めなければならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
183	規則	44	5.05a1【原注】	2.04原注	地面に触れた後の打球	投球が地面に触れた後、打者がこれを打ってバットに当たった場合には、インフライトの投球を打ったときと同様に扱う。
186	規則	47	5.05a3	2.04原注	次の場合、打者は走者となる (ヒットバイピッチ)	投球が地面に触れた後、ストライクゾーンを通過してもボールであり、そのバウンドした投球が打者に触れた場合は、球審の裁定で打者に一塁を与える。 ただし、2ストライク後打者が打ったがバットに当たらなかったときは、捕手がそのままつかんでも“捕球、したものとはみなされない。 (5.05b2、5.09a3)
312	規則	173	5.09a1	2.15	打者アウト(捕球の定義)	捕球とは、野手が、インフライトの打球、投球または送球を、手またはグラブでしっかりと受け止め、かつそれを確実につかむ行為であって、帽子、プロテクター、あるいはユニフォームのポケットまたは他の部分で受け止めた場合は、捕球とはならない。 また、ボールに触れると同時に、あるいはその直後に、他のプレーヤーや壁と衝突したり、倒れた結果、落球した場合は“捕球、ではない。 野手が飛球に触れ、そのボールが攻撃側チームのメンバーまたは審判員に当たった後に、いずれの野手がこれを捕らえても“捕球、とはならない。 野手がボールを受け止めた後、これに続く送球動作に移ってからボールを落とした場合は、“捕球、と判定される。 要するに、野手がボールを手にした後、ボールを確実につかみ、かつ意識してボールを手放したことが明らかであれば、これを落とした場合でも“捕球、と判定される。
313	規則	174	5.09a1【原注2】	2.15原注	打者アウト(捕球の定義)	野手がボールを地面に触れる前に捕らえれば、正規の捕球となる。その間、ジャグリングしたり、あるいは他の野手に触れることがあってもさしつかえない。 走者は、最初の野手が飛球に触れた瞬間から、塁を離れてさしつかえない。 野手はフェンス、手すり、ロープなど、グラウンドと観覧席との境界線を越えた上空へ、身体を伸ばして飛球を捕らえることは許される。また野手は、手すりの頂上やファウルグラウンドに置いてあるキャンパスの上に飛び乗って飛球を捕らえることも許される。しかし野手が、フェンス、手すり、ロープなどを越えた上空やスタンドへ、身体を伸ばして飛球を捕らえようとする場合は、危険を承知で行なうプレイだから、たとえ観客にその捕球を妨げられても、観客の妨害行為に対してはなんら規則上の効力は発生しない。 ダッグアウトの縁で飛球を捕らえようとする野手が、中へ落ち込まないように、中にいるプレーヤー(いずれのチームかを問わない)によって身体を支えられながら捕球した場合、正規の捕球となる。
314	規則	175	5.09a1【注】	2.15注	打者アウト	捕手が、身につけているマスク、プロテクターなどに触れてからはね返ったフライボールを地面に取り落とさずに捕らえれば、正規の“捕球、となる(ファウルチップについては定義34参照)。ただし、手またはミット以外のもの、たとえばプロテクターあるいはマスクを用いて捕らえたものは、正規の捕球とはならない。
506	規則	024	6.01a11ペナルティ	2.44a	打者または走者の妨害	審判員が打者、打者走者または走者に妨害によるアウトを宣告した場合には、他のすべての走者は、妨害発生の瞬間にすでに占有していたと審判員が判断する塁まで戻らなければならない。ただし、本規則で別に規定した場合を除く。
507	規則	025	6.01a11ペナルティ	2.44a原注	打者または走者の妨害	打者走者が一塁に到達しないうちに妨害が発生したときは、すべての走者は投手の投球当時占有していた塁に戻らなければならない。 ただし、0アウトまたは1アウトのとき、本塁でのプレイで走者が得点した後、打者走者がスリーフットレインの外を走って守備妨害でアウトが宣告されても、その走者はそのままセーフが認められて、得点は記録される。
508	規則	026	6.01a11ペナルティ【注】	2.44a原注	打者または走者の妨害	前記の“打者走者が一塁に到達しないうち、以下の段は、プレイが介在した後に妨害が発生した場合には適用しない。
516	規則	034	6.01b【原注】	2.44b	守備側の権利優先	守備側の妨害とは、投球を打とうとする打者を妨げたり、邪魔をする野手の行為をいう。
529	規則	047	6.01f【原注】	2.44c・2.44c原注	コーチおよび審判員の妨害	審判員の妨害は、(1)盗塁を阻止しようとしたり、塁上の走者をアウトにしようとする捕手の送球動作を、球審が邪魔したり、はばんだり、妨げた場合、(2)打球が、野手(投手を除く)を通過する前に、フェア地域で審判員に触れた場合に起こる。 捕手の送球動作には、投手への返球も含む。
100	規則	15	4.02	2.50	監督	

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
103	規則	18	4.02c	2.50	監督の代理人	監督が競技場を離れるときは、プレーヤー、またはコーチを自己の代理人として指定しなければならない。このような監督の代理人は監督としての義務、権利、責任を持つ。もし監督が競技場を離れるまでに、自己の代理人を指定しなかったり、これを拒否した場合には、球審がチームの一員を監督の代理人として指定する。
101	規則	16	4.02a	2.50a	監督の指定	クラブは試合開始予定時刻30分前までに、リーグ会長、または当該試合の球審に対して監督を指定しなければならない。
102	規則	17	4.02b	2.50b	監督の責任	監督は、プレーヤーまたはコーチにリーグの規約に基づく特別な任務を任せたとを、球審に通告することができる。この通告があれば本野球規則は、この指名された代理人を公式のものとして認める。監督は自チームの行動、野球規則の遵守、審判員への服従に関しては、全責任を持つ。
87	規則	02	4.01	3.01	審判員の任務	審判員は、試合開始前に、次のことをしなければならない。
88	規則	03	4.01a	3.01a	用具・装具の監視	競技に使用される用具、およびプレーヤーの装具が、すべて規則にかなっているかどうかを厳重に監視する。
89	規則	04	4.01b	3.01b	競技場の諸線	塗料、チョーク、その他の白色材料で引かれた競技場の諸線(図表1、2の太線)が、地面または芝生からはっきりと見分けがつくようにできあがっているかどうかを確かめる。
90	規則	05	4.01c	3.01c	正規のボールの準備・適否	正規のボール(リーグ会長がホームクラブに対して、その個数および製品について証明済みのもの)を、ホームクラブから受け取る。審判員はボールを検査し、ボールの光沢を消すため特殊な砂を用いて適度にこねられていることを確認する。審判員は、その単独判断でボールの適否を決定する。
91	規則	06	4.01c【注】	3.01c注	アマ野球のボールの供給	アマチュア野球では、ボールはホームチームまたは主催者が供給する。
92	規則	07	4.01d	3.01d	正規のボールの準備	正規のボールを少なくとも1ダース、必要に応じてただちに使用できるように、ホームクラブが準備しているかどうかを確かめる。
93	規則	08	4.01e	3.01e	ボールの予備	少なくとも2個のボールを予備に持ち、試合中、必要に応じてその都度、予備のボールの補充を要求する。これらのボールを、次の場合に使用する。
94	規則	09	4.01e1	3.01e	ボールの予備	ボールがプレイングフィールドの外へ出た場合。
95	規則	10	4.01e2	3.01e	ボールの予備	ボールが汚れた場合、あるいはボールがなんらかの理由で使えなくなった場合。
96	規則	11	4.01e3	3.01e	ボールの予備	投手がボールの交換を求めた場合。
97	規則	12	4.01e【原注】	3.01e原注	ボールの予備を渡す時期	球審は、ボールデッドとなりすべてのプレイが終わるまで投手にボールを手渡してはならない。フェアの打球または野手の送球がプレイングフィールドの外へ出た場合は、走者および打者が与えられた塁に達するまで、予備のボールを渡してプレイを再開してはならない。また、打者がプレイングフィールドの外へ本塁打を打ったときは、その打者が本塁を踏み終わるまで球審は、新しいボールを投手または、捕手に手渡してはならない。
98	規則	13	4.01f	3.01f	公認ロジンバッグ	試合開始前に公認ロジンバッグが投手板の後方に置かれていることを確認する。
21	規則	05	3.01	3.02	ボールを故意に汚す	プレーヤーが、土、ロジン、パラフィン、甘草、サンドペーパー、エメリーペーパー、その他のもので、ボールを故意に汚すことは禁じられる。ペナルティ 審判員は、そのボールの返還を求め、反則した者を試合から除く。さらに、反則者は自動的に以後10試合の出場停止となる。ボールを傷つけた投手に関しては6.02(c)(2)~(6)、6.02(d)参照。
22	規則	06	3.01【注2】	3.02注	アマ適用せず	アマチュア野球では、このペナルティを適用せず・審判員が・その反則者に注意して、そのボールの返還を求めるにとどめるが、その後も、故意に同様の行為を繰り返した場合には、試合から除く。
422	規則	283	5.10d【原注】	3.03原注	プレーヤーの交代	同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手域外の守備位置に移ることもできない。投手以外の負傷退場した野手に代わって出場したプレーヤーには、5球を限度としてウォームアップが許される。(投手については、5.07bに規定がある)

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
416	規則	277	5.10a	3.03第1節	プレーヤーの交代	プレーヤーの交代は、試合中ボールデッドのときなら、いつでも許される。代わって出場したプレーヤーは、そのチームの打撃順に従って、退いたプレーヤーの順番を受け継いで打つ。
423	規則	284	5.10d【注】	3.03注	プレーヤーの交代	アマチュア野球では、試合から退いたプレーヤーが、ベースコーチとなることを認めることもある。
421	規則	282	5.10d	3.03第1・2節	プレーヤーの交代 5.10b原注と1部ダブっている	いったん試合から退いたプレーヤーは、その試合には再び出場することはできないが、プレーヤー兼監督に限って、控えのプレーヤーと代わってラインアップから退いても、それ以後コーチスボックスに出て指揮することは許される。 守備側チームのプレーヤーが2人以上同時に交代する場合、監督はその代わって出場したプレーヤーが守備位置につく前に、速やかにそれぞれの打撃順に示し、球審はこれを公式記録員に通告しなければならない。 球審にただちに通知がなされなかったときは、球審が代わって出場したプレーヤーの打撃順を指定する権限を持つ。
418	規則	279	5.10b【原注】	3.03第2・3節 3.06原注	プレーヤーの交代	守備側チームのプレーヤーが2人以上同時に代わって出場したときは、その代わって出場したプレーヤーが守備位置につく前に、監督はただちにそのプレーヤーの打撃順を球審に示し、球審はこれを公式記録員に通告する。 この通告がなかったときは、球審は、代わって出場したプレーヤーの打撃順を指定する権限を持つ。 ダブルスイッチ(投手交代と同時に野手も交代させて、打撃順を入れ替える)の場合、監督はファウルラインを越える前に、まず球審に複数の交代と入れ替わる打撃順を通告しなければならない。監督またはコーチがファウルラインを越えたら、それ以後ダブルスイッチはできない。 試合から退いたプレーヤーは、ベンチに入って、そのチームとともに残ることはできる。また、投手のウォームアップの相手をすることもできる。プレーヤー兼監督が控えのプレーヤーと代わって退いた場合、ベンチまたはコーチスボックスから指揮を続けることはできる。 審判員は、試合から退いてベンチに残ることを許されたプレーヤーが相手チームのプレーヤー、監督または審判員に対して、やじをとばすことは許さない。
424	規則	285	5.10e	3.04	プレーヤーの交代	打順表に記載されているプレーヤーは、他のプレーヤーの代走をすることは許されない。
425	規則	286	5.10e【原注】	3.04原注	プレーヤーの交代	この規則は「コーティシーランナー、(相手の好意で適宜に許される代走者)の禁止を意味している。試合に出場しているプレーヤーは、他のプレーヤーのために、コーティシーランナーになることを許されず、いったん試合から退いたプレーヤーも同様である。打順表に記載されていないプレーヤーでも、一度走者として出たならば、代わって出場したプレーヤーと同様にみなす。
426	規則	287	5.10f	3.05a	プレーヤーの交代(先発投手の義務)	4.03(a)、同(b)の手続きによって球審に手渡された打順表に記載されている投手は、第1打者またはその代打者がアウトになるかあるいは一塁に達するまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、投球が不可能になったと球審が認めた場合を除く。
427	規則	288	5.10g	3.05b	プレーヤーの交代(救援投手の義務)	ある投手に代わって救援に出た投手は、そのときの打者または代打者がアウトになるか一塁に達するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、それ以後投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。
428	規則	289	5.10h	3.05c	プレーヤーの交代(先発投手および救援投手の義務)	規則で代わることが許されていない投手に代わって他のプレーヤーが出場した場合には、審判員は、規則を正しく適用するために、正規の投手に試合に戻ることを命じなければならない。 万一、誤って出場した投手が、指摘されないまま打者へ1球を投げるか、または塁上の走者がアウトになった場合には、その投手は正当化されて、以後のプレイはすべて有効となる。
429	規則	290	5.10h【原注】	3.05c原注	プレーヤーの交代	監督が規則に違反して投手を退かせようとしたときには、審判員はその監督に不可能である旨を通告しなければならない。たまたま、球審が看過して規則で許されていない投手の出場を発表してしまった場合でも、その投手が投球する前なら正しい状態に戻すことができる。万一、誤って出場した投手が1球を投じてしまえば、その投手は正規の投手となる。
430	規則	291	5.10i	3.05d	プレーヤーの交代	すでに試合に出場している投手がインニングの初めにファウルラインを越えてしまえば、その投手は、第1打者がアウトになるかあるいは一塁に達するまで、投球する義務がある。ただし、その打者に代打者が出た場合、またはその投手が負傷または病気のために、投球が不可能になったと球審が認めた場合を除く。 また、投手が塁上にいるとき、または投手の打席で前のインニングが終了して、投手がダッグアウトに戻らずにマウンドに向かった場合は、その投手は、準備投球のために投手板を踏まない限り、そのインニングの第1打者に投球する義務はない。
417	規則	278	5.10b	3.06	プレーヤーの交代	監督は、プレーヤーの交代があった場合には、ただちにその旨を球審に通告し、あわせて打撃順のどこに入るかを明示しなければならない。



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
419	規則	280	5.10b【注】	3.06注	プレーヤーの交代	我が国では、本項〔原注〕の“ダブルスイッチ”、以下の段については、所属する団体の規定に従う。
420	規則	281	5.10c	3.07	プレーヤーの交代	交代通告を受けた球審は、ただちにその旨を自ら発表するか、または発表させる義務がある。
431	規則	292	5.10j	3.08	プレーヤーの交代	交代発表のなかったプレーヤーの取り扱い 代わって出場したプレーヤーは、たとえその発表がなくても、次のときから、試合に出場したものとみなされる。 (1) 投手ならば、投手板上に位置したとき。 (2) 打者ならば、バッタースボックスに位置したとき。 (3) 野手ならば、退いた野手の普通の守備位置についてプレイが始まったとき。 (4) 走者ならば、退いた走者が占有していた塁に立ったとき。 本項で出場したものと認められたプレーヤーが行なったプレイ、およびそのプレーヤーに対して行なわれたプレイは、すべて正規のものとなる。
118	規則	33	4.06	3.09	ユニフォーム着用者の禁止事項	ユニフォーム着用者は、次のことが禁じられる。
649	規則	167	6.04b	3.09	ユニフォーム着用者の禁止事項	ユニフォーム着用者は、次のことが禁じられる。 (1) プレーヤーが、試合前、試合中、または試合終了後を問わず、観衆に話しかけたり、席を同じくしたり、スタンドに座ること。 (2) 監督、コーチまたはプレーヤーが、試合前、試合中を問わず、いかなるときでも観衆に話しかけたり、または相手チームのプレーヤーと親睦的態度をとること。
119	規則	34	4.06(1)	3.09(1)	プレーヤーの禁止事項	プレーヤーが、試合前、試合中、または試合終了後を問わず、観衆に話しかけたり、席を同じくしたり、スタンドに座ること。
120	規則	35	4.06(2)	3.09(2)	監督、コーチ、プレーヤーの禁止事項	監督、コーチまたはプレーヤーが、試合前、試合中を問わず、いかなるときでも観衆に話しかけたり、または相手チームのプレーヤーと親睦的態度をとること。
121	規則	36	4.06【注】	3.09注	アマ規定	アマチュア野球では、次の試合に出場するプレーヤーがスタンドで観戦することを特に許す場合もある。
650	規則	168	6.04b【注】	3.09注	ユニフォーム着用者の禁止事項	アマチュア野球では、次の試合に出場するプレーヤーがスタンドで観戦することを特に許す場合もある。
112	規則	27	4.04	3.10	競技場の適否の決定権	
113	規則	28	4.04a	3.10a	ホームチームの決定権	ホームチームだけが、天候、競技場の状態が試合を開始するのに適しているかどうかを決定する権限を持っている。ただし、ダブルヘッダーの第2試合の場合を除く。
114	規則	29	4.04a【例外】	3.10a例外	リーグ会長に権限付与	全日程が消化できず、そのリーグの最終順位が、実際の勝敗の結果によらずに決まることがないようにするために、最終の数週間、そのリーグに限って、本条の適用を中止する権限を、そのリーグの会長に全面的に付与することができる。たとえば、選手権試合の終期の節において、いずれか2チーム間の試合を延期したり、または挙行しなかったことが、リーグの最終順位に影響を及ぼすおそれのある場合には、そのリーグ所属チームの要請によって、本条によるホームチームに付与されている権限を、リーグ会長が持つことができる。
116	規則	31	4.04b	3.10b	ダブルヘッダーの決定権限	ダブルヘッダーの第1試合の球審だけが、天候、競技場の状態がダブルヘッダーの第2試合を開始するのに適しているかどうかを決定する権限を持っている。
115	規則	30	4.04a【注】	3.10注	アマ規定	アマチュア野球では、本項を適用しない。
138	規則	53	4.08g	3.11	ダブルヘッダー	ダブルヘッダーの第1試合と第2試合の間、または試合が競技場使用不適のために停止されている場合、競技場をプレイに適するようにするために、球審は球場管理人およびその助手を指図することができる。
139	規則	54	4.08gペナルティ	3.11ペナルティ	ダブルヘッダー	球場管理人およびその助手が球審の指図に従わなかった場合には、球審は、フォーフィッテッドゲームを宣告して、ビジティングチームに勝ちを与えることが許される。(7.03c)
467	規則	328	5.12a	3.12	“タイム”の宣告	審判員が試合を停止するときは“タイム”を宣告する。球審が“プレイ”を宣告したときに停止状態は終わり、競技は再開される。タイムの宣告からプレイの宣告までの間、試合は停止される。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
117	規則	32	4.05	3.13	特別グラウンドルール	観衆が競技場内にあふれ出ている場合、ホームチームの監督は、打球、送球が観衆内に入ったときはもちろん、不測の事態が生じた場合など、あらゆる点を考慮して、広範囲に及ぶグラウンドルールを作って、球審ならびに相手チームの監督に指示して承諾を求める。相手チームの監督がこれを承諾すれば、そのグラウンドルールは正規のものとなるが、万一承諾しないときは、球審は、プレイに関する規則に抵触しない範囲内で、競技場の状態から推測して必要と思われる特別グラウンドルールを作成して、これを実行させる。
85	規則	69	3.10	3.14	競技場内からの用具の除去	攻撃側プレーヤーは、自チームの攻撃中には、グラブ、その他の用具を競技場内からダッグアウトに持ち帰らなければならない。フェア地域とファウル地域とを問わず、競技場内には何物も残しておいてはならない。
524	規則	042	6.01d【原注】	3.15	競技場内に入ることを公認された人の妨害	本項で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については6.0l(b)参照。審判員による妨害については5.06(c)(2)、同(6)および5.05(b)(4)、走者による妨害については5.09(b)(3)参照 妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。 たとえば、バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールをけったり、拾い上げたり、押し戻した場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害とみなされる。
123	規則	38	4.07a	3.15第1節	競技場に入れる人	試合中は、ユニフォームを着たプレーヤーおよびコーチ、監督、ホームチームによって公認されている報道写真班、審判員、制服を着た警官、ならびにホームチームの警備員、その他の従業員のほかは、競技場内に入ってはならない。
523	規則	041	6.01d	3.15第2節	競技場内に入ることを公認された人の妨害	競技場内に入ることを公認された人の妨害 競技場内に入ることを公認された人(試合に参加している攻撃側メンバーまたはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く)が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。(4.07a参照)
525	規則	043	6.01e	3.16	観衆の妨害	観衆の妨害 打球または送球に対して観衆の妨害があったときは、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。
527	規則	045	6.01e【原注】	3.16原注	観衆の妨害	打球または送球がスタンドに入って観衆に触れたら、たとえ競技場内にはね返ってきてもボールデッドとなる場合と、観衆が競技場内に入ったり、境界線から乗り出すか、その下またはあいだをくぐり抜けてインプレイのボールに触れるか、あるいはプレーヤーに触れたり、その他の方法で妨げた場合とは事情が異なる。後者の場合は故意の妨害として取り扱われる。打者と走者は、その妨害がなかったら競技はどのような状態になったかと審判員が判断した場所におかれる。 野手がフェンス、手すり、ロープから乗り出したり、スタンドの中へ手を差し伸べて捕球するのを妨げられても妨害とは認められない。野手は危険を承知でプレイしている。しかし、観衆が競技場に入ったり、身体を競技場の方へ乗り出して野手の捕球を明らかに妨害した場合は、打者は観衆の妨害によってアウトが宣告される。 例 一 1アウト走者三塁、打者が外野深く飛球(フェアかファウルかを問わない)を打った。観衆がそれを捕球しようとする外野手を明らかに妨害した。審判員は観衆の妨害によるアウトを宣告した。その宣告と同時にボールデッドとなり、審判員は、打球が深かったので、妨害されずに野手が捕球しても捕球後三塁走者は得点できたと判断して、三塁走者の得点を認める。本塁からの距離が近いほんの浅いフライに対しては、妨害があっても、このような処置をとるべきではない。
526	規則	044	6.01e【規則説明】	3.16付記	観衆の妨害	観衆が飛球を捕らえようとする野手を明らかに妨害した場合には、審判員は打者に対してアウトを宣告する。
432	規則	293	5.10k	3.17	プレーヤーの交代	両チームのプレーヤーおよび控えのプレーヤーは、実際に競技にたずさわっているか、競技に出る準備をしているか、あるいは一塁または三塁のベースコーチに出ている場合を除いて、そのチームのベンチに入っていないなければならない。 試合中は、プレーヤー、控えのプレーヤー、監督、コーチ、トレーナー、バットボーイのほかは、いかなる人もベンチに入ることは許されない。
434	規則	295	5.10k【注1】	3.17注1	プレーヤーの交代	次打者席には、次打者またはその代打者以外入ってはならない。
435	規則	296	5.10k【注2】	3.17注2	プレーヤーの交代	ベンチあるいはダッグアウトに入ることでできる者に関しては、プロ野球では各リーグの規約によって定め、アマチュア野球では協会、連盟ならびに大会などの規約に基づいて定めている。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
433	規則	294	5.10kペナルティ	3.17ペナルティ	プレーヤーの交代	本項に違反したときは、審判員は、警告を発した後、その反則者を競技場から除くことができる。
126	規則	41	4.07【注1】	3.18注1	適宜な時間	ここにいう“適宜な時間”とは、球審の判断に基づく適宜な時間を意味する。 フォーフィッテッドゲームは、同僚との協議の末、球審がとる最後の手段であって、すべての手段が尽き果てた後に、初めてこれを宣告するもので、料金を払って試合を見にきているファンを失望させることは極力避けなければならない。
127	規則	42	4.07【注2】	3.18注2	アマ規定	アマチュア野球では、ホームチームに代わって大会主催者、連盟などがその責にあたる。
125	規則	40	4.07bペナルティ	3.18ペナルティ	プレイの拒否	ビジティングチームがプレイを行なうことを拒否してから、15分を経過した後、なお適宜な時間をかけても競技場からそれらの人々が退去させられなかった場合には、球審はフォーフィッテッドゲームを宣告してビジティングチームの勝ちとすることができる。
124	規則	39	4.07b	3.18第1節	ホームチームの秩序維持	ホームチームは、秩序を維持するのに十分な警察の保護を要請する備えをしておく義務がある。1人もしくは2人以上の人が試合中に競技場内に入り、どんな方法でもプレイを妨害した場合には、ビジティングチームは、競技場からそれらの人々が退去させられるまで、プレイを行なうことを拒否することができる。
104	規則	19	4.03	4.01	打順表の交換	ホームクラブが試合の延期または試合開始の遅延をあらかじめ申し出た場合を除いて、1人ないし数人の審判員は、試合開始予定時刻の5分前に競技場内に入り、ただちに本塁に進み、両チームの監督に迎えられる。
105	規則	20	4.03a	4.01a	打順表の手渡し	まず、ホームチームの監督、または監督が指名した者が、球審に2通の打順表を手渡す。
106	規則	21	4.03b	4.01b	打順表の手渡し	次に、ビジティングチームの監督、または監督が指名した者が、球審に2通の打順表を手渡す。
107	規則	22	4.03c	4.01c	打順表の記載	球審に手渡される打順表には、各プレーヤーの守備位置も記載されなければならない。指名打者を使用する場合は、どの打者が指名打者であるのかを打順表に明記しなければならない。
108	規則	23	4.03d	4.01d	打順表の確定	球審は、受領した打順表の正本が副本と同一であるかどうかを照会した後、相手チームの監督にそれぞれ打順表の副本を手交する。球審の手元にあるものが正式の打順表となる。球審による打順表の手交は、それぞれの打順表の確定を意味する。したがって、それ以後、監督がプレーヤーを交代させるには規則に基づいて行なわなければならない。
109	規則	24	4.03e	4.01e	球場の全責任は審判員に託される	ホームチームの打順表が球審に手渡されると同時に、競技場の全責任は、各審判員に託される。そして、その時を期して、球審は天候、競技場の状態などに応じて、試合打ち切りの宣告、試合の一時停止あるいは試合再開などに関する唯一の決定者となる。 球審はプレイを中断した後、少なくとも30分を経過するまでは、打ち切りを命じてはならない。また球審はプレイ再開の可能性があると確信すれば、一時停止の状態を延長してもさしつかえない。
110	規則	25	4.03e原注	4.01原注	打順表の誤記	球審は、試合開始の“プレイ”を宣告する前に、打順表における明らか な誤記を見つけた場合、まず誤記をしたチームの監督またはキャプテンに注意し、それを訂正させることができる。たとえば、監督が不注意にも打順表に8人しか記載しなかったり、同姓の2人を区別する頭文字をつけないで記載した場合、球審がこれらの誤記を試合開始前に見つけたら、訂正させなければならない。明らかな不注意や試合開始前に訂正できる誤りのために、試合が始まってからチームが束縛されるべきではない。
111	規則	26	4.03e原注	4.01原注	試合の完了努力	球審は、いかなる場合でも、試合を完了するように努力しなければならない。試合完了の確信があれば、球審は、その権限において、30分にわたる“一時停止”を何度繰り返しても、あくまで試合を続行するように努め、試合の打ち切りを命じるのは、その試合を完了させる可能性がないと思われる場合だけである。
142	規則	03	5.01a	4.02・5.01	プレイの宣告	ホームチームの各プレーヤーが、それぞれの守備位置につき、ビジティングチームの第1打者が、バッタースボックス内に位置したとき、球審は“プレイ”を宣告し、試合が開始される。
145	規則	06	5.02	4.03	守備位置	試合開始のとき、または試合中ボールインプレイとなるときは、捕手を除くすべての野手はフェア地域にいないなければならない。
146	規則	07	5.02a	4.03a	捕手の位置	捕手は、ホームプレートの直後に位置しなければならない。 故意の四球が企図された場合は、ボールが投手の手を離れるまで、捕手はその両足をキャッチャースボックス内に置いていなければならないが、その他の場合は、捕球またはプレイのためならいつでもその位置を離れてもよい。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
147	規則	08	5.02aペナルティ	4.03aペナルティ	ペナルティ	ボークとなる。(6.02a12参照)
148	規則	09	5.02b	4.03b	正規の投球姿勢	投手は、打者に投球するにあたって、正規の投球姿勢をとらなければならない。
149	規則	10	5.02c	4.03c	野手の位置	投手と捕手を除く各野手は、フェア地域ならば、どこに位置してもさしつかえない。
150	規則	11	5.02c【注】	4.03c注	野手の位置	投手が打者に投球する前に、捕手以外の野手がファウル地域に位置を占めることは、本条で禁止されているが、これに違反した場合のペナルティはない。 審判員がこのような事態を発見した場合には、速やかに警告してフェア地域に戻させた上、競技を続行しなければならないが、もし警告の余裕がなく、そのままプレイが行なわれた場合でも、この反則行為があったからといってすべての行為を無効としないで、その反則行為によって守備側が利益を得たと認められたときだけ、そのプレイは無効とする。
162	規則	23	5.04a2	4.04	打撃順の変更	試合中、打撃順の変更は認められない。しかし、打順表に記載されているプレーヤーが控えのプレーヤーと代わることは許される。ただし、その控えのプレーヤーは退いたプレーヤーの打撃順を受け継がなければならない。
151	規則	12	5.03	4.05	ベースコーチ	
152	規則	13	5.03a	4.05a	ベースコーチの配置	攻撃側チームは、攻撃期間中、2人のベースコーチ --- 1人は一塁近く、他は三塁近く --- を所定の位置につかせなければならない。
153	規則	14	5.03b	4.05b	ベースコーチは指定された2人	ベースコーチは、各チーム特に指定された2人に限られ、次のことを守らなければならない。 (1) そのチームのユニフォームを着ること。 (2) 常にコーチスボックス内にとどまること。
154	規則	15	5.03bペナルティ	4.05bペナルティ	ペナルティ	審判員は本項に違反したものを試合から除き、競技場から退かせる。
155	規則	16	【5.03原注】	4.05原注	コーチスボックス	ここ数年、ほとんどのコーチが片足をコーチスボックスの外に出したり、ラインをまたいで立ったり、コーチスボックスのラインの外側に僅かに出ていることは、ありふれたことになっているが、コーチは、打球が自分を通過するまで、コーチスボックスを出て本塁寄りおよびフェア地域寄りに立ってはいならない。ただし、相手チームの監督が異議を申し出ない限り、コーチスボックスの外に出ているものとはみなされない。しかし、相手チーム監督の異議申し出があったら、審判員は、規則を厳しく適用し、両チームのコーチがすべて常にコーチスボックス内にとどまることを要求しなければならない。 コーチが、プレーヤーに「滑れ」「進め」「戻れ」とシグナルを送るために、コーチスボックスを離れて、自分の受け持ちのベースで指図することもありふれたことになっている。このような行為はプレイを妨げない限り許される。 ベースコーチは、用具の交換を除き、走者の身体に触れてはならない。
156	規則	17	5.03【注1】	4.05注1	監督はベースコーチ可能	監督が指定されたコーチに代わって、ベースコーチとなることはさしつかえない。
157	規則	18	5.03【注2】	4.05注2	アマ規定	アマチュア野球では、ベースコーチを必ずしも特定の2人に限る必要はない。
158	規則	19	5.03【注3】	4.05注3	コーチの行動範囲	コーチがプレイの妨げにならない範囲で、コーチスボックスを離れて指図することは許されるが、たとえば、三塁コーチが本塁付近にまで来て、得点しようとする走者に対して、「滑れ」とシグナルを送るようなことは許されない。
647	規則	165	6.04	4.06	競技中のプレーヤーの禁止事項	
648	規則	166	6.04a	4.06a	競技中のプレーヤーの禁止事項	監督、プレーヤー、控えのプレーヤー、コーチ、トレーナーおよびバットボーイは、どんなときでも、ベンチ、コーチスボックス、その他競技場のどの場所からも、次のことをしてはならない。 (1) 言葉、サインを用いて、観衆を騒ぎたたせるようにあおったり、あおろうとすること。 (2) どんな方法であろうとも、相手チームのプレーヤー、審判員または観衆に対して、悪口をいったりまたは暴言を吐くこと。 (3) ボールインプレイのときに「タイム」と叫ぶか、他の言葉または動作で明らかに投手にボークを行なわせようとする。企てること。 (4) どんな形であろうとも、審判員に故意に接触すること。(審判員の身体に触れることはもちろん、審判員に話しかけたり、なれなれしい態度をとること)
651	規則	169	6.04c	4.06b	故意に打者を惑わす	野手は、打者の目のつくところに位置して、スポーツ精神に反する意図で故意に打者を惑わしてはならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
652	規則	170	6.04cペナルティ	4.06ペナルティ	故意に打者を惑わす	審判員は反則者を試合から除き、競技場から退かせる。なお投手がボークをしても無効とする。
653	規則	171	6.04d	4.07	監督、プレーヤー等が試合から除かれた場合	監督、プレーヤー、コーチまたはトレーナーは、試合から除かれた場合、ただちに競技場を去り、以後その試合にたずさわってはならない。試合から除かれた者はクラブハウス内にとどまっているか、ユニフォームを脱いで野球場構内から去るか、あるいはスタンドに座る場合には、自チームのベンチまたはブルペンから離れたところに席をとらなければならない。
654	規則	172	6.04d【原注】	4.07原注	監督、プレーヤー等が試合から除かれた場合	出場停止処分中の監督、コーチ、プレーヤーは、試合中ダッグアウト、クラブハウス、新聞記者席に入ることはできない。
655	規則	173	6.04e	4.08	審判への不満な態度	ベンチにいる者が、審判員の判定に対して激しい不満の態度を示した場合は、審判員は、まず警告を発し、この警告にもかかわらず、このような行為が継続された場合には、次のペナルティを適用する。
656	規則	174	6.04eペナルティ	4.08ペナルティ	審判への不満な態度	審判員は、反則者にベンチを退いてクラブハウスに行くことを命じる。もし、審判員が反則者を指摘することができなければ、控えのプレーヤーを全部ベンチから去らせる。しかし、この場合そのチームの監督には、試合に出場しているプレーヤーと代えるために必要な者だけを競技場に呼び戻す特典が与えられる。
294	規則	155	5.08	4.09	得点の記録	
295	規則	156	5.08a	4.09a	得点の記録	3人アウトになってそのイニングが終了する前に、走者が正規に一塁、二塁、三塁、本塁に進み、かつこれに触れた場合には、その都度、1点が記録される。
304	規則	165	【5.08原注】規則説明	4.09a原注規則説明第1節	得点の記録(第3アウトがフォースアウト)	打者走者のアウトが一塁に触れる前のアウトの形をとり、それが第3アウトにあたったときは、たとえ他の走者がそのアウトの成立前か、あるいはそのアウトが成立するまでのプレイ中に本塁に触れていても得点は記録されない。 [例1]1アウト走者二・三塁のとき打者が安打したので、三塁走者は容易に本塁に達したが、二塁走者は本塁への送球でアウトにされて2アウトとなった。この間、打者走者は二進していたが、途中一塁を踏んでいなかったので一塁でアピールされて打者はアウトになり、3アウトとなった。――三塁走者は「打者走者が一塁に触れる前のアウトで、しかも第3アウトにあたる場合、」のプレイ中に本塁に触れたのであるから、その得点は記録されない。 [例2]2アウト満塁のとき、打者はフェンス越えの本塁打を打って4人とも本塁を踏んだが、打者は一塁を踏まなかったのでアピールされてアウトになった。――この場合、打者のアウトは一塁に触れる前の第3アウトの形をとるから、無得点である。
305	規則	166	【5.08原注】規則説明	4.09a原注規則説明第2節	得点の記録(前位走者の触塁の失敗)	前位の走者が塁に触れ損ねたためにアウトにされた場合、正しい走塁を行なった後位の走者に関しては、そのアウトが2アウトまたは1アウトにあたる時と、3アウトにあたる時とは事情が違う。 [例1]1アウト走者一・二塁のとき、打者は場内本塁打を打った。二塁走者は本塁へ達する間に三塁を空過した。一塁走者と打者は正しく塁を踏んで本塁に達した。守備側は三塁に送球してアピールしたので、審判員は二塁走者に対してアウトを宣告して、2アウトとなった。――一塁走者と打者の得点は認められる。 [例2]2アウト走者二塁のとき、打者が場内本塁打を打ち、2人とも本塁を踏んだが、二塁走者は三塁を空過したので、アピールによってアウトにされ、3アウトとなった。――打者は正しく本塁を踏んではいるが、得点には数えられない。
306	規則	167	【5.08原注】規則説明	4.09a原注規則説明第3節	得点の記録(前位走者の触塁・リタッチの失敗)	前位の走者が塁に触れ損ねるか、飛球が捕らえられたときにリタッチを果たさなかったために、第3アウトとなった場合、後位の走者は正しい走塁を行なっても得点とはならない。 [例]1アウト走者二・三塁のとき、打者が中堅飛球を打ってアウトになり、2アウトとなった。三塁走者はそのフライアウトを利用して本塁に触れ、二塁走者も本塁への悪送球によって得点した。このとき三塁走者に対してアピールがあり、捕球前に三塁を離れたものと判定されて、3アウトとなった。――無得点である。
307	規則	168	【5.08原注】規則説明	4.09a原注規則説明第4節	得点の記録(前位走者の触塁・リタッチの失敗)	塁を踏み損ねた走者または飛球が捕らえられたときにリタッチを果たさなかった走者に対して、守備側がアピールした場合、審判員がそれを認めたときにその走者はアウトになる。 [例]1アウト走者一・三塁のとき、打者の右翼飛球で2アウトとなった。三塁走者は捕球後三塁にリタッチして本塁を踏んだが、一塁走者は二塁へ向かっていたので一塁に帰塁しようと試みたが、右翼手の送球でアウトになった。三塁走者はそのアウトより早く本塁を踏んでいた。一塁走者のアウトはフォースアウトでないから、その第3アウトより早く本塁を踏んだ三塁走者の得点は記録される。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
296	規則	157	5.08a【例外】	4.09a付記	得点の記録(第3アウトとの関係)	第3アウトが次のような場合には、そのアウトにいたるプレイ中に、走者(1、2にあたる場合は全走者、3にあたる場合は後位の走者)が本塁に進んでも、得点は記録されない。 (1) 打者走者が一塁に触れる前にアウトにされたとき。(5.09a、6.03a参照) (2) 走者がフォースアウトされたとき。(5.09b6参照) (3) 前位の走者が塁に触れ損ねてアウトにされたとき。(5.09c1・2、同d参照)
301	規則	162	5.08b【原注】	4.09b原注	得点の記録(最終回裏の決勝点例外)	本項は、記述されているとおりに取り扱われるべきである。例外として観衆が競技場になだれこんで、走者が本塁に触れようとするのを、または打者が一塁に触れようとするのを肉体的に妨げた場合には、審判員は観衆のオブストラクションとして走者の得点または進塁を認める。
300	規則	161	5.08b	4.09b前段	得点の記録(最終回裏の決勝点)	正式試合の最終回の裏、または延長回の裏、満塁で、打者が四球、死球、その他のプレイで一塁を与えられたために走者となったので、三塁走者が本塁に進まねばならなくなり、得点すれば勝利を決する1点となる場合には、球審はその走者が本塁に触れるとともに、打者が一塁に触れるまで、試合の終了を宣告してはならない。
303	規則	164	5.08b【注】	4.09b注	得点の記録(最終回裏の決勝点の義務)	たとえば、最終回の裏、満塁で、打者が四球を得たので決勝点が記録されるような場合、次塁に進んで触れる義務を負うのは、三塁走者と打者走者だけである。 三塁走者または打者走者が適宜な時間がたっても、その義務を果たそうとしなかった場合に限って、審判員は、守備側のアピールを待つことなくアウトの宣告を下す。 打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合も、適宜な時間がたっても触れようとしなかったときに限って、審判員は、守備側のアピールを待つことなく、アウトの宣告を下す。
302	規則	163	5.08bペナルティ	4.09bペナルティ	得点の記録(最終回裏の決勝点の違反)	前記の場合、三塁走者が、適宜な時間がたっても、あえて本塁に進もうとせず、かつこれに触れようとしなかった場合には、球審は、その得点を認めず、規則に違反したプレーヤーにアウトを宣告して、試合の続行を命じなければならない。 また、2アウト後、打者走者があえて一塁に進もうとせず、かつこれに触れようとしなかった場合には、その得点は認めず、規則に違反したプレーヤーにアウトを宣告して、試合続行を命じなければならない。 0アウトまたは1アウトのとき、打者走者があえて一塁に進もうとせず、かつこれに触れようとしなかった場合には、その得点は記録されるが、打者走者はアウトを宣告される。
298	規則	159	5.08a【注1】	4.09注1	得点の記録(本塁到達の明示)	第3アウトがフォースアウト以外のアウトで、そのプレイ中に他の走者が本塁に達した場合、審判員は、その走者にアピールプレイが残っているか否かに関係なく、本塁到達の方が第3アウトより早かったか否かを明示しなければならない。
299	規則	160	5.08a【注2】	4.09注2	得点の記録(安全進塁権のときも適用)	本項は打者および塁上の走者に安全進塁権が与えられたときも適用される。 たとえば、2アウト後ある走者が他の走者に先んじたためにアウトになったときは、そのアウトになった走者よりも後位の打者または走者の得点が認められないことはもちろんであるが、たとえアウトになった走者より前位の走者でも第3アウトが成立するまでに本塁を踏まなければ得点は認められない。 ただし、2アウト満塁で、打者が四球を得たとき、他のいずれかの走者がいったん次塁を踏んだ後にアウトになったときだけ、その第3アウトが成立した後に三塁走者が本塁を踏んでも、得点と認められる。(5.06b3B【原注】参照)
658	規則	002	7.01	4.10	正式試合	
659	規則	003	7.01a	4.10a	正式試合	正式試合は、通常9イニングから成るが、次の例外がある。 すなわち同点のために試合が延長された場合、あるいは試合が次の理由によって短縮された場合 --- (1) ホームチームが9回裏の攻撃の全部、または一部を必要としない場合。 (2) 球審がコールドゲームを宣告した場合。
660	規則	004	7.01a【例外】	4.10a例外	正式試合	マイナーリーグは、ダブルヘッダーのうちの1試合またはその2試合を7回に短縮する規定を採用することが許される。 この際、本規則で9回とあるのを7回と置きかえるほかは、すべて本規則に従うべきである。
661	規則	005	7.01b	4.10b	正式試合	両チームが9回の攻撃を完了してなお得点が等しいときは、さらに回数を重ねていき、 (1) 延長回の表裏を終わって、ビジティングチームの得点がホームチームの得点より多い場合 (2) ホームチームが延長回の裏の攻撃中に決勝点を記録した場合に試合は終了する。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
662	規則	006	7.01c	4.10c	正式試合	球審によって打ち切りを命じられた試合(コールドゲーム)が次に該当する場合、正式試合となる。 (1) 5回の表裏を完了した後に、打ち切りを命じられた試合。(両チームの得点の数には関係がない) (2) 5回表を終わった際、または5回裏の途中で打ち切りを命じられた試合で、ホームチームの得点がビジティングチームの得点より多いとき。 (3) 5回裏の攻撃中にホームチームが得点して、ビジティングチームの得点と等しくなっているときに打ち切りを命じられた試合。
663	規則	007	7.01d	4.10d	正式試合	正式試合が両チームの得点が等しいまま終了した場合、その試合はサスペンデッドゲームとなる。7.02参照。
664	規則	008	7.01d【注】	4.10d注	正式試合	我が国では、所属する団体の規定に従う。
665	規則	009	7.01e	4.10e	正式試合	正式試合となる前に、球審が試合の打ち切りを命じた場合には、「ノーゲーム」を宣告しなければならない。
666	規則	010	7.01f	4.10f	正式試合	正式試合または本条(c)項に規定された時点まで進行したサスペンデッドゲームには、雨天引換券を発行しない。
667	規則	011	7.01g	4.11	正式試合	正式試合においては、試合終了時の両チームの総得点をもって、その試合の勝敗を決する。
668	規則	012	7.01g1	4.11a	正式試合	ビジティングチームが9回表の攻撃を終わったとき、ホームチームの得点が相手より多いときには、ホームチームの勝ちとなる。
669	規則	013	7.01g2	4.11b	正式試合	両チームが9回の攻守を終わったとき、ビジティングチームの得点が相手より多いときにはビジティングチームの勝ちとなる。
670	規則	014	7.01g3	4.11c	正式試合	ホームチームの9回裏または延長回の裏の攻撃中に、勝ち越し点にあたる走者が得点すれば、そのときに試合は終了して、ホームチームの勝ちとなる。
673	規則	017	7.01g3【注】	4.11c注	正式試合	9回の裏または延長回の裏、0アウトまたは1アウトで、打者がプレイングフィールドの外へ本塁打を打ったときに、ある走者が前位の走者に先んじたためにアウトになった場合は、打者に本塁打が認められ、試合は打者が本塁に触れたときに終了する。
671	規則	015	7.01g3【例外】	4.11c付記1	正式試合	試合の最終回の裏、打者がプレイングフィールドの外へ本塁打を打った場合、打者および塁上の各走者は、正規に各塁に触れれば得点として認められ、打者が本塁に触れたときに試合は終了し、打者および走者のあげた得点を加えて、ホームチームの勝ちとなる
672	規則	016	7.01g3【規則説明】	4.11c付記2	正式試合	9回の裏または延長回の裏に、プレイングフィールドの外へ本塁打を打った打者が、前位の走者に先んじたためにアウトになった場合は、塁上の全走者が得点するまで待たないで、勝ち越し点にあたる走者が得点したときに試合は終了する。ただし、2アウトの場合で、走者が前位の走者に先んじたときに勝ち越し点にあたる走者が本塁に達していなければ、試合は終了せず、追い越すまでの得点だけが認められる。
674	規則	018	7.01g4	4.11d	正式試合	7.02(a)によりサスペンデッドゲームにならない限り、コールドゲームは、球審が打ち切りを命じたときに終了し、その勝敗はその際の両チームの総得点により決する。
675	規則	019	7.01g4【注】	4.11d注	正式試合	我が国では、正式試合となった後のある回の途中で球審がコールドゲームを宣したとき、次に該当する場合は、サスペンデッドゲームとしないで、両チームが完了した最終均等回の総得点でその試合の勝敗を決することとする。 ① ビジティングチームがその回の表で得点してホームチームの得点と等しくなったが、表の攻撃が終わらないうち、または裏の攻撃が始まらないうち、あるいは裏の攻撃が始まってもホームチームが得点しないうちにコールドゲームが宣せられた場合。 ② ビジティングチームがその回の表でリードを奪う得点を記録したが、表の攻撃が終わらないうち、または裏の攻撃が始まらないうち、あるいは裏の攻撃が始まってもホームチームが同点またはリードを奪い返す得点を記録しないうちにコールドゲームが宣せられた場合
676	規則	020	7.02	4.12	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	
677	規則	021	7.02a	4.12a	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	試合が、次の理由のどれかによって打ち切られた場合、後日これを完了することを条件としたサスペンデッドゲームとなる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
684	規則	028	7.02a	4.12a	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	本項の(1)(2)(5)(6)によって終了となった試合については、7.01の規程による正式な試合となりうる回数が行われていない限りこれをサスペンデッドゲームとすることはできない。 本項の(3)または(4)の理由で打ち切りが命じられたときは、行なわれた回数には関係なく、これをサスペンデッドゲームとすることができる。
678	規則	022	7.02a1	4.12a1	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	法律による娯楽制限。
679	規則	023	7.02a2	4.12a2	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	リーグ規約による時間制限。
680	規則	024	7.02a3新	4.12a3	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	照明の故障、またはホームクラブが管理している競技場の機械的な装置《たとえば開閉式屋根、自動キャンバス被覆装置などの排水設備》の故障(オペレーターの過失を含む)。
681	規則	025	7.02a4	4.12a4	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	暗くなったのに、法律によって照明の使用が許されていないため、試合続行が不可能となった場合。
682	規則	026	7.02a5	4.12a5	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	天候状態のために、正式試合のある回の途中でコールドゲームが宣せられた試合で、打ち切られた回の表にビジティングチームがリードを奪う得点を記録したが、ホームチームがリードを奪い返すことができなかった場合。
683	規則	027	7.02a6	4.12a6	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	正式試合として成立した後に、同点で打ち切られた場合。
685	規則	029	7.02a【付記】	4.12a付記	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	コールドゲームをサスペンデッドゲームとしかどうかを決定するにあたっては、天候状態およびこれに類する理由 --- 本項(1)~(5) --- が優先される。 試合が、天候状態で停止した後に、照明の故障、娯楽制限、時間制限により続行ができなくなった場合は、サスペンデッドゲームとすることはできない。試合が、照明の故障で停止した後に、天候状態や競技場の状態で再開できなくなった場合も、サスペンデッドゲームとすることはできない。本項に規定されている理由だけで打ち切られた試合がサスペンデッドゲームとなる。
686	規則	030	7.02b	4.12b	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	一時停止試合を再開して、これを完了するには、次の要項に従う。
687	規則	031	7.02b1	4.12b1	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	その球場での両クラブ間の日程の、次のシングルゲームに先立って行なう。
688	規則	032	7.02b2	4.12b2	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	その球場での両クラブ間の日程に、ダブルヘッダーしか残っていない場合には、その最初のダブルヘッダーに先立って行なう。
689	規則	033	7.02b3	4.12b3	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	その都市での両クラブ間の日程の最終日に停止された場合には、都市を移して、相手クラブの球場で、なるべく、 (A) 両クラブ間の日程の、次のシングルゲームに先立って行なう。 (B) 両クラブ間の日程にダブルヘッダーしか残っていない場合には、その最初のダブルヘッダーに先立って行なう。
690	規則	034	7.02b4	4.12b4	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	両クラブ間の最終試合までに一時停止試合が完了していなかった場合は、次のとおりコールドゲームとなる。その試合が、 (A) 正式試合となる回数が行なわれており、かついずれかのチームがリードしている場合は、リードしているチームの勝ちが宣告される。(ビジティングチームがある回の表にリードを奪う得点を記録したが、その回の裏にホームチームがリードを奪い返す得点を記録しないうちにコールドゲームが宣せられた場合は除く。この場合は、両チームが完了した最終均等回の総得点で勝敗を決する。) (B) 正式試合となる回数が行なわれており、かつ同点の場合は、“タイゲーム”が宣告される。(ビジティングチームがある回の表に得点を記録してホームチームの得点と等しくなったが、その回の裏にホームチームが得点を記録しないうちにコールドゲームが宣せられた場合は除く。この場合は、両チームが完了した最終均等回の総得点で勝敗を決する。)この場合は、リーグ優勝に影響しないという理由で再試合の必要がないとリーグ会長が判断しない限り、開始からやり直さなければならない。 (C) 正式試合となる回数が行なわれていなかった場合は、“ノーゲーム”が宣告される。この場合は、リーグ優勝に影響しないという理由で再試合の必要がないとリーグ会長が判断しない限り、開始からやり直さなければならない。



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
691	規則	035	7.02c	4.12c	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	続行試合は、元の試合の停止された個所から再開しなければならない。すなわち、停止試合を完了させるということは、一時停止された試合を継続して行なうことを意味するものであるから、両チームの出場者と打撃順は、停止されたときと全く同一にしなければならないが、規則によって認められる交代は、もちろん可能である。したがって、停止試合に出場しなかったプレーヤーならば、続行試合に代わって出場することができるが、停止試合にいったん出場して他のプレーヤーと代わって退いたプレーヤーは、続行試合には出場することはできない。停止された試合のメンバーとして登録されていなかったプレーヤーでも、続行試合のメンバーとして登録されれば、その試合には出場できる。さらに、続行試合の出場資格を失ったプレーヤー(停止試合に出場し、他のプレーヤーと代わって退いたため)の登録が抹消されて、その代わりとして登録された者でも、続行試合には出場できる。
692	規則	036	7.02c【原注】	4.12c原注	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	交代して出場すると発表された投手が、そのときの打者(代打者を含む)がアウトになるか一塁に達するか、あるいは攻守交代となるまで投球しないうちに、サスペンデッドゲームとなった場合、その投手は続行試合の先発投手として出場してもよいし、出場しなくてもよい。しかし、続行試合に出場しなかった場合には、他のプレーヤーと交代したものとみなされて、以後その試合に出場することはできない。
693	規則	037	7.02c【注】	4.12c注	サスペンデッドゲーム(一時停止試合)	我が国では、サスペンデッドゲームについては、所属する団体の規定に従う。
128	規則	43	4.08	4.13	ダブルヘッダー	
129	規則	44	4.08a(1)	4.13a1	日本選手権	選手権試合は、1日2試合まで行なうことができる。サスペンデッドゲームを完了させるために、ダブルヘッダーとともに行なっても、本項に抵触することにはならない。
130	規則	45	4.08a(2)	4.13a2	ダブルヘッダー	もし、同じ日に、一つの入場料で2試合が組まれている場合には、第1試合をその当日における正規の試合としなければならない。
131	規則	46	4.08b	4.13b	ダブルヘッダー	ダブルヘッダーの第2試合は、第1試合の完了後でなければ開始してはならない。
132	規則	47	4.08c	4.13c	ダブルヘッダー開始時間	ダブルヘッダーの第2試合は、第1試合の終了20分後に開始する。ただし、この2試合の間にこれ以上の時間(30分を超えないこと)を必要とするときは、第1試合終了時に、球審はその旨を宣告して相手チームの監督に通告しなければならない。
135	規則	50	4.08d	4.13d	ダブルヘッダー	審判員は、ダブルヘッダーの第2試合をできる限り開始し、そして競技は、グラウンドコンディション、地方時間制限、天候状態などの許す限り、続行しなければならない。
136	規則	51	4.08e	4.13e	ダブルヘッダー	正式に日程に組まれたダブルヘッダーが、降雨その他の理由で、開始が遅延した場合には、開始時間には関係なく開始されたその試合がダブルヘッダーの第1試合となる。
137	規則	52	4.08f	4.13f	ダブルヘッダー	日程の変更により、ある試合をダブルヘッダーの一つに組み入れた場合は、その試合は第2試合となり、正式にその日の日程に組まれている試合が、第1試合となる。
134	規則	49	4.08【注】	4.13注	ダブルヘッダー開始時間の例外	両チーム監督の同意を得れば、ダブルヘッダーの第2試合を、第1試合の終了後20分以内に開始してもさしつかえない。
133	規則	48	4.08【例外】	4.13例外	ダブルヘッダー開始時間の例外	ホームクラブが特別の行事のために、2試合の間を規定以上に延長したいと申し出て、リーグ会長がこれを承認した場合には、球審はこの旨を宣告して、相手チームの監督に通告しなければならない。どの場合でも、第1試合の球審は、第2試合が開始されるまでの時間を監視する任にあたる
99	規則	14	4.01g	4.14	ライトの点灯	球審は、暗くなったので、それ以後のプレイに支障をきたすと認めたときは、いつでも競技場のライトを点灯するように命じることができる。
694	規則	038	7.03	4.15	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	
695	規則	039	7.03a	4.15	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	一方のチームが次のことを行なった場合には、フォーフィッテッドゲームとして相手チームに勝ちが与えられる。
696	規則	040	7.03a1	4.15a	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	球審が試合開始時刻にプレイを宣告してから、5分を経過してもなお競技場に出ないか、あるいは競技場に出ても試合を行なうことを拒否した場合。ただし、遅延が不可避であると球審が認めた場合は、この限りではない。
697	規則	041	7.03a2	4.15b	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	試合を長引かせ、または短くするために、明らかに策を用いた場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
698	規則	042	7.03a3	4.15c	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	球審が一時停止または試合の打ち切りを宣告しないにもかかわらず、試合の続行を拒否した場合。
699	規則	043	7.03a4	4.15d	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	一時停止された試合を再開するために、球審がプレイを宣告してから、1分以内に競技を再開しなかった場合。
700	規則	044	7.03a5	4.15e	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	審判員が警告を発したにもかかわらず、故意に、また執拗に反則行為を繰り返した場合。
701	規則	045	7.03a6	4.15f	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	審判員の命令で試合から除かれたプレーヤーを、適宜な時間内に、退場させなかった場合。
702	規則	046	7.03a7	4.15g	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	ダブルヘッダーの第2試合の際、第1試合終了後20分以内に、競技場に現われなかった場合。ただし、第1試合の球審が第2試合開始までの時間を延長した場合は、この限りではない。
704	規則	048	7.03c新	4.16	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	球審が、試合を一時停止した後、その再開に必要な準備を球場管理人に命じたにもかかわらず、その命令が《意図的に》履行されなかったために、試合再開に支障をきたした場合は、その試合はフォーフィッテッドゲームとなり、ビジティングチームの勝ちとなる。
705	規則	049	7.03c【注】	4.16注	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	アマチュア野球では、本項を適用しない。
703	規則	047	7.03b	4.17	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	一方のチームが競技場に9人のプレーヤーを位置させることができなくなるか、またはこれを拒否した場合、その試合はフォーフィッテッドゲームとなって相手チームの勝ちとなる。
706	規則	050	7.03d	4.18	フォーフィッテッドゲーム(没収試合)	球審がフォーフィッテッドゲームを宣告したときは、宣告後24時間以内に、その旨を書面でリーグ会長に報告しなければならない。ただし、球審がこの報告をしなかったからといって、フォーフィッテッドゲームであることに変わりはない。
707	規則	051	7.04	4.19	プロテストティングゲーム(提訴試合)	審判員の裁定が本規則に違反するものとして、監督が審議を請求するときは、各リーグは試合提訴の手続きに関する規則を適用しなければならない。審判員の判断に基づく裁定については、どのような提訴も許されない。提訴試合では、リーグ会長の裁定が最終のものとなる。審判員の裁定が本規則に違反するとの結論が出た場合であっても、リーグ会長において、その違反のために提訴チームが勝つ機会を失ったものと判断しない限り、試合のやり直しが命ぜられることはない。
708	規則	052	7.04【原注】	4.19原注	プロテストティングゲーム(提訴試合)	監督が試合を提訴するには、提訴の対象となったプレイが生じたときから、投手が次の1球を投じるか、または、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てるまでに、その旨を審判員に通告していない限り、提訴は認められない。試合終了のときに生じたプレイについて提訴するときは、翌日の正午までにリーグ事務局に申し出ればよい。
709	規則	053	7.04【注】	4.19注	プロテストティングゲーム(提訴試合)	アマチュア野球では提訴試合を認めない。
143	規則	04	5.01b	5.02	ボールインプレイ	球審が“プレイ”を宣告すればボールインプレイとなり、規定によってボールデッドとなるか、または審判員が“タイム”を宣告して試合を停止しない限り、ボールインプレイの状態は続く。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
258	規則	119	5.06c2	5.02第2節以降	ボールデッド	ボールデッドとなった際は、各プレーヤーはアウトになったり、進塁したり、帰塁したり、得点することはできない。ただし、ボールインプレイ中に起きた行為(たとえば、ボーク、悪送球、インターフェア、ホームランまたはプレイングフィールドの外に出たフェアヒット)などの結果、1個またはそれ以上の進塁が認められた場合を除く。
23	規則	07	3.01【原注】	5.02原注	ボールが剥がれる	ボールが試合中、部分的にはがれた場合は、そのプレイが完了するまで、ボールインプレイの状態は続く。
144	規則	05	5.01c	5.03	投球と打撃選択	まず、投手は打者に投球する。その投球を打つか打たないかは打者が選択する。
3	規則	03	1.02	5.04	試合の目的	攻撃側は、まず打者が走者となり、走者となれば進塁して得点することに努める。
4	規則	04	1.03	5.05	試合の目的	守備側は、相手の打者が走者となることを防ぎ、走者となった場合は、その進塁を最小限にとどめるように努める。
5	規則	05	1.04	5.06	試合の目的	打者が走者となり、正規にすべての塁に触れたときは、そのチームに1点が記録される。
297	規則	158	5.08a【原注】	5.06原注	得点の記録(リタッチの有効性)	たとえば、三塁走者が、飛球が捕らえられてから、離塁して本塁を踏んだ後、離塁が早かったと誤信して、三塁に帰ろうとした場合のように、走者が正規の走塁を行なって本塁に触れたならば、その走者のそれ以後の行為によって、その得点は無効とはならない。
414	規則	275	5.09e	5.07	攻守交代	攻撃側チームは、3人のプレーヤーが正規にアウトにされると守備につき、その相手チームが攻撃に移る。
528	規則	046	6.01f	5.08	コーチおよび審判員の妨害	コーチおよび審判員の妨害 送球が偶然ベースコーチに触れたり、投球または送球が審判員に触れたときも、ボールインプレイである。しかし、ベースコーチが故意に送球を妨害した場合には、走者はアウトとなる。
252	規則	113	5.06c	5.09	ボールデッド	次の場合にはボールデッドとなり、走者は1個の進塁が許されるか、または帰塁する。その間に走者はアウトにされることはない。
253	規則	114	5.06c1	5.09a	ボールデッド(死球)	投球が、正規に位置している打者の身体、または着衣に触れた場合 --- 次塁に進むことが許された走者は進む。
254	規則	115	5.06c2	5.09b	ボールデッド(球審が捕手の送球を妨害)	球審が、盗塁を阻止しようとしたり、塁上の走者をアウトにしようとする捕手の送球動作を妨害(インターフェア)した場合 --- 各走者は戻る。
256	規則	117	5.06c2【原注】	5.09b原注	ボールデッド	捕手の送球動作に対する球審の妨害には、投手への返球も含む。
257	規則	118	5.06c2【注】	5.09b注	ボールデッド	捕手の送球によってランダウンプレイが始まろうとしたら、審判員はただちに“タイム”を宣告して、走者を元の塁に戻す。
255	規則	116	5.06c2【付記】	5.09b付記	ボールデッド	捕手の送球が走者をアウトにした場合には、妨害がなかったものとする。
259	規則	120	5.06c3	5.09c	ボールデッド	ボークの場合 --- 各走者は進む。(6.02aペナルティ参照)
260	規則	121	5.06c4	5.09d	ボールデッド	反則打球の場合 --- 各走者は戻る。
261	規則	122	5.06c5	5.09e	ボールデッド	ファウルボールが捕球されなかった場合 --- 各走者は戻る。 球審は塁上の走者が、元の塁にリタッチするまで、ボールインプレイの状態にしてはならない

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
262	規則	123	5.06c6	5.09f	ボールデッド	内野手(投手を含む)に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者または審判員に触れた場合、あるいは内野手(投手を除く)を通過していないフェアボールが、審判員に触れた場合 --- 打者が走者となったために、塁を明け渡す義務が生じた各走者は進む。 走者がフェアボールに触れても、次の場合には、審判員はアウトを宣告してはならない。なお、この際は、ボールインプレイである。 (A) いったん内野手に触れたフェアボールに触れた場合。 (B) 1人の内野手に触れないでその股間または側方を通過した打球にすぐその後方で触れても、このボールに対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかったと審判員が判断した場合。
263	規則	124	5.06c6【原注】	5.09f原注	ボールデッド	打球が投手を通過してから、内野内に位置していた審判員に触れた場合は、ボールデッドとなる。フェア地域で野手によってそらされた打球が、まだインフライトの状態のまま、走者または審判員に触れ地上に落ちるまでに、内野手によって捕球されても、捕球とはならず、ボールインプレイの状態は続く。
264	規則	125	5.06c6【注】	5.09f注	ボールデッド	フェアボールがファウル地域で審判員に触れた場合、ボールインプレイである。
265	規則	126	5.06c7	5.09g	ボールデッド	投球が、球審か捕手のマスク、または用具に挟まって止まった場合 --- 各走者は進む。
266	規則	127	5.06c7【原注】	5.09g原注	ボールデッド	チップした打球が、球審に当たってはね返ったのを、野手が捕らえても、ボールデッドとなって、打者はアウトにはならない。チップした打球が、球審のマスクや用具に挟まって止まっても、同様である。 第3ストライクと宣告された投球が、捕手を通過して球審に当たったときは、ボールインプレイである。球審に当たってはね返ったボールが、地上に落ちる前に捕球されても、打者はただちにアウトにはならないボールインプレイであり、打者は一塁に触れる前に、その身体または一塁に触球されて、初めてアウトになる。 第3ストライクと宣告された投球または四球目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に挟まって止まった場合、打者には一塁が与えられ、塁上の走者には1個の進塁が許される。
267	規則	128	5.06c8	5.09h	ボールデッド	正規の投球が、得点しようとしている走者に触れた場合 --- 各走者は進む。
468	規則	329	5.12b	5.10	"タイム、の宣告	審判員が "タイム、を宣告すれば、ボールデッドとなる。 次の場合、球審は "タイム、を宣告しなければならない。
469	規則	330	5.12b1	5.10a	"タイム、の宣告	天候、暗さのためなどで、これ以上試合を続行するのは不可能であると球審が認めた場合。
470	規則	331	5.12b2	5.10b	"タイム、の宣告	ライトの故障のために、審判員がプレイを見るのに困難となるか不可能となった場合。
472	規則	333	5.12b【注1】	5.10b注1	"タイム、の宣告	プレイの進行中にライトの故障が生じたとき、その瞬間完了されていないプレイは無効とする。ダブルプレイおよびトリプルプレイが行なわれている間に、ライトの故障が生じた場合には、たとえ最初のアウトが成立した後であっても、そのプレイは完成されたものとはみなされない。 ライトが復旧したときには、ライトの故障のために無効とされたプレイが始まる前の状態から再開しなければならない。
473	規則	334	5.12b【注2】	5.10b注2	"タイム、の宣告	打球、投手の投送球または野手の送球が5.06(b)(4)に規定される状態となったとき、および四球、死球、ボーク、捕手またはその他の野手の妨害、走塁妨害などで、走者が安全に進塁できる状態となったときにライトが消えた場合に限って、たとえ各走者の走塁が完了していなくても、そのプレイは有効とする。
474	規則	335	5.12b【注3】	5.10b注3	"タイム、の宣告	プレイが行なわれているとき、一部のライトが消えた場合(たとえば電圧が急に低下した場合とか、1、2基が故障を起こした場合)などには、ただちにタイムとするか、またはプレイが終了するまでボールインプレイの状態におくかは、審判員の判断で決定する。
471	規則	332	5.12b【付記】	5.10b付記	"タイム、の宣告	各リーグは、ライトの故障により試合が中断された場合の特別規則を、独自に設けてもよい。
475	規則	336	5.12b3	5.10c・付記	"タイム、の宣告	突発事故により、プレーヤーがプレイできなくなるか、あるいは審判員がその職務を果たせなくなった場合。 プレイングフィールドの外への本塁打、または死球の場合のように、1個またはそれ以上の安全進塁権が認められた場合、走者が不慮の事故のために、その安全進塁権を行使することができなくなったときは、その場から控えのプレーヤーに代走させることができる。
476	規則	337	5.12b4	5.10d	"タイム、の宣告	監督がプレーヤーを交代させるため、またはプレーヤーと協議するために "タイム、を要求した場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
477	規則	338	5.12b4【注】	5.10d注	“タイム”の宣告	監督は、プレイが行なわれていないときに、“タイム”を要求しなければならない。投手が投球動作に入ったときとか、走者が走っている場合などのように、プレイが始まろうとしているとき、またはプレイが行なわれているときには、“タイム”を要求してはならない。もし、このような要求があっても、審判員は“タイム”を宣告してはならない。なお“タイム”が発効するのは、“タイム”が要求されたときではなく、審判員が“タイム”を宣告した瞬間からである。
478	規則	339	5.12b5	5.10e	“タイム”の宣告	審判員がボールを検査する必要を認めるか、監督と打ち合わせをするためか、またはこれに準ずる理由のある場合。
479	規則	340	5.12b6	5.10f	“タイム”の宣告	野手が飛球を捕らえた後、ベンチ、またはスタンド内に倒れ込んだり、ロープを越えて観衆内(観衆が競技場内まで入っているとき)に倒れ込んだ場合。走者に関しては5.06(b)(3)(C)の規定が適用される。野手が捕球後ベンチに踏み込んで、倒れ込まなかったときは、ボールインプレイであるから、各走者はアウトを賭して進塁することができる。
480	規則	341	5.12b7	5.10g	“タイム”の宣告	審判員がプレーヤーまたはその他の人に、競技場から去ることを命じた場合。
481	規則	342	5.12b8	5.10h	“タイム”の宣告	審判員はプレイの進行中に、“タイム”を宣告してはならない。ただし、(2)項、または(3)項後段に該当するときは、この限りではない。
482	規則	343	5.12	5.11	“タイム”の宣告	ボールデッドになった後、投手が新しいボールか、元のボールを持って正規に投手板に位置して、球審がプレイを宣告したときに、競技は再開される。投手がボールを手にして投手板に位置したら、球審はただちにプレイを宣告しなければならない。
159	規則	20	5.04	6.00	打者	
160	規則	21	5.04a	6.01	打撃の順序	
161	規則	22	5.04a1	6.01a	打撃の順序	攻撃側の各プレーヤーはそのチームの打順表に記載されている順序に従って打たなければならない。
163	規則	24	5.04a3	6.01b	各回の第1者	第2回以後の各回の第1打者は、前回正規に打撃(タイムアウトバット)を完了した打者の次の打順のものである。
164	規則	25	5.04b	6.02	打者の義務	
165	規則	26	5.04b1	6.02a	打撃姿勢	打者は自分の打順がきたら、速やかにバッタースボックスに入って、打撃姿勢をとらなければならない。
166	規則	27	5.04b2	6.02b	打撃姿勢をやめる	打者は、投手がセットポジションをとるか、またはwindアップを始めた場合には、バッタースボックスの外に出たり、打撃姿勢をやめることは許されない。
168	規則	29	5.04b2【原注】	6.02b原注	バッタースボックスの出入	打者は、思うままにバッタースボックスを出入りする自由は与えられていないから、打者が“タイム”を要求しないで、バッタースボックスを外したときに、ストライクゾーンに投球されれば、ストライクを宣告されてもやむを得ない。 打者が打撃姿勢をとった後、ロジンバッグやパインタールバッグを使用するために、打者席から外に出ることは許されない。ただし、試合の進行が遅滞しているとか、天候上やむを得ないと球審が認めたときは除く。 審判員は、投手がwindアップを始めるか、セットポジションをとったならば、打者または攻撃側チームのメンバーのいかなる要求があっても“タイム”を宣告してはならない。たとえ、打者が“目にごみが入った”、“眼鏡がくもった”、“サインが見えなかった”など、その他どんな理由があっても、同様である。球審は、打者が打者席に入ってからでも“タイム”を要求することを許してもよいが、理由なくして打者席から離れることを許してはならない。球審が寛大にしなければいけないほど、打者は打者席の中にいるのであり、投球されるまでそこにとどまっていなければならないということがわかるだろう(5.04b4参照) 《以下はメジャーリーグだけで適用される[原注]の追加事項である。》打者が打者席に入ったのに、投手が正当な理由もなくぐずぐずしていると球審が判断したときには、打者がほんの僅かの間、打者席を離れることを許してもよい。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者が打者席から出たり、打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たさなかった場合、審判員はバークを宣告してはならない。投手と打者との両者が規則違反をしているので、審判員はタイムを宣告して、投手も打者もあらためて“出発点”からやり直させる。 《以下はマイナーリーグで適用される[原注]の追加事項である。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者が打者席から出たり、打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たさなかった場合、審判員はバークを宣告してはならない。5.04(b)(4)(A)に抵触する場合、審判員は自動的にストライクを宣告する。》
167	規則	28	5.04b2ペナルティ	6.02bペナルティ	打撃姿勢をやめる	打者が本項に違反した際、投手が投球すれば、球審はその投球によってボールまたはストライクを宣告する。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
169	規則	30	5.04b3	6.02c	打撃姿勢をとらない	打者が、バッテースボックス内で打撃姿勢をとろうとしなかった場合、球審はストライクを宣告する。この場合はボールデッドとなり、いずれの走者も進塁できない。 このペナルティの後、打者が正しい打撃姿勢をとれば、その後の投球は、その投球によってボールまたはストライクがカウントされる。打者が、このようなストライクを3回宣告されるまでに、打撃姿勢をとらなかったときは、アウトが宣告される。
170	規則	31	5.04b3【原注】	6.02c原注	打撃姿勢をとるための時間	球審は、本項により打者にストライクを宣告した後、再びストライクを宣告するまでに、打者が正しい打撃姿勢をとるための適宜な時間を認める。
171	規則	32	5.04b4	6.02d	バッテースボックスルール	
172	規則	33	5.04b4A	6.02d1	バッテースボックスルール	打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッテースボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッテースボックスを離れてもよいが、“ホームプレート”を囲む土の部分、を出てはならない。 (i) 打者が投球に対してバットを振った場合。 (ii) 打者が投球を避けてバッテースボックスの外に出ざるを得なかった場合。 (iii) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。 (iv) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。 (v) 打者がバントをするふりをした場合。 (vi) 暴投または捕逸が発生した場合。 (vii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分から離れた場合。 (viii) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。
173	規則	34	5.04b4A新	6.02d1	バッテースボックスルール	打者が意図的にバッテースボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ前記(i)～(viii)の例外規定に該当しない場合、《当該試合におけるその打者の最初の違反に対しては球審が警告を与え、その後違反が繰り返されたときにはリーグ会長が然るべき制裁を科す。》
175	規則	36	5.04b4B	6.02d2	バッテースボックスルール	打者は、次の目的で“タイム”が宣告されたときは、バッテースボックスおよび“ホームプレート”を囲む土の部分、を離れることができる。 (i) プレーヤーの交代 (ii) いずれかのチームの協議
176	規則	37	5.04b4B【原注】	6.02d2原注	バッテースボックスルール	審判員は、前の打者が塁に出るかまたはアウトになれば、速やかにバッテースボックスに入るよう次打者に促さねばならない。
177	規則	38	5.04b5	6.03	バッテースボックス内に両足を置く	打者は、正規の打撃姿勢をとるためには、バッテースボックスの内にその両足を置くことが必要である。
178	規則	39	5.04b5【規則説明】	6.03付記	バッテースボックスのライン	バッテースボックスのラインは、バッテースボックスの一部である。
179	規則	40	5.04c	6.04	打撃の完了	打者は、アウトになるか、走者となったときに、打撃を完了したことになる。
309	規則	170	5.09a	6.05	打者アウト	打者は、次の場合、アウトとなる。
311	規則	172	5.09a1【原注1】	6.05	打者アウト(野手の捕球)	野手は捕球するためにダッグアウトの中に手を差し伸べることはできるが、足を踏み込むことはできない。野手がボールを確補すれば、それは正規の捕球となる。ダッグアウトまたはボールデッドの個所(たとえばスタンド)に近づいてファウル飛球を捕らえるためには、野手はグラウンド(ダッグアウトの縁を含む)上または上方に片足または両足を置いておかなければならず、またいずれの足もダッグアウトの中またはボールデッドの個所の中に置いてはならない。正規の捕球の後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの個所に倒れ込まない限り、ボールインプレイである。走者については5.06(b)(3)(C)[原注]参照。
310	規則	171	5.09a1	6.05a	打者アウト	フェア飛球またはファウル飛球(ファウルチップを除く)が、野手に正規に捕らえられた場合。
315	規則	176	5.09a2	6.05b	第3ストライクを捕手が正規に捕球	第3ストライクと宣告された投球を、捕手が正規に捕球した場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
316	規則	177	5.09a2【原注】	6.05b原注	第3ストライクを捕手が正規に捕球	“正規の捕球、”ということは、まだ地面に触れていないボールが、捕手のミットの中に入っているという意味である。ボールが、捕手の着衣または用具に止まった場合は、正規の捕球ではない。また、球審に触れてはね返ったボールを捕らえた場合も同様である。チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに触れてから、身体または用具に当たってはね返ったのを、捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、ストライクであり、第3ストライクにあたるときには、打者はアウトである。また、チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに当たっておれば、捕手が身体または用具に手またはミットをかぶせるように捕球することも許される。
317	規則	178	5.09a3	6.05c	第3ストライクの宣告	0アウトまたは1アウトで一塁に走者がいるとき、第3ストライクが宣告された場合。
318	規則	179	5.09a3【注】	6.05c注	第3ストライクの宣告	0アウトまたは1アウトで一塁(一・二塁、一・三塁、一・二・三塁のときも同様)に走者がいた場合には、第3ストライクと宣告された投球を捕手が後逸したり、またはその投球が球審か捕手のマスクなどに入り込んだ場合でも、本項が適用されて打者はアウトになる。
319	規則	180	5.09a4	6.05d	打者アウト	2ストライク後の投球をバントしてファウルボールになった場合。
320	規則	181	5.09a5	6.05e	打者アウト	インフィールドフライが宣告された場合。(定義40参照)
321	規則	182	5.09a6	6.05f	打者アウト	2ストライク後、打者が打った(バントの場合も含む)が、投球がバットに触れないで、打者の身体に触れた場合。
322	規則	183	5.09a7	6.05g	打者アウト	野手(投手を含む)に触れていないフェアボールが、打者走者に触れた場合。 ただし、打者がバッタースボックス内において、打球の進路を妨害しようとする意図がなかったと審判員が判断すれば、打者に当たった打球はファウルボールとなる。
323	規則	184	5.09a8	6.05h	バントの打球が、フェア地域内でバットに当たる	打者が打つか、バントしたフェアの打球に、フェア地域内でバットが再び当たった場合。 ボールデッドとなって、走者の進塁は認められない。 これに反して、フェアの打球が転がってきて、打者が落としたバットにフェア地域内で触れた場合は、ボールインプレイである。ただし、打者が打球の進路を妨害するためにバットを置いたのではないと審判員が判断したときに限られる。 打者がバッタースボックス内において、打球の進路を妨害しようとする意図がなかったと審判員が判断すれば、打者の所持するバットに再び当たった打球はファウルボールとなる。
324	規則	185	5.09a8【原注】	6.05h原注	バントの打球が、フェア地域内でバットに当たる1	バットの折れた部分がフェア地域に飛び、これに打球が当たったとき、またはバットの折れた部分が走者または野手に当たったときは、プレイはそのまま続けられ、妨害は宣告されない。打球がバットの折れた部分で当たったときは、ファウルボールである。 バット全体がフェア地域またはファウル地域に飛んで、プレイを企てている野手(打球を処理しようとしている野手だけでなく、送球を受けようとしている野手も含む)を妨害したときには、故意であったか否かの区別なく、妨害が宣告される。 打撃用ヘルメットに、偶然、打球がフェア地域で当たるか、または送球が当たったときは、ボールインプレイの状態が続く。 打球が、ファウル地域で打撃用ヘルメット、地面以外の異物に触れたときは、ファウルボールとなり、ボールデッドとなる。 走者がヘルメットを落としたり、ボールに投げつけて打球または送球を妨害しようとする意図があったと審判員が判断したときには、その走者はアウトとなり、ボールデッドとなって、他の走者は、打球に対してのときは投手の投球当時占有していた塁、送球に対してのときは妨害発生の瞬間に占有していた塁に帰らなければならない。
325	規則	186	5.09a8【注】	6.05h注	バントの打球が、フェア地域内でバットに当たる	本項前段を適用するにあたっては、打者がバットを所持していたかどうかを問わない。
326	規則	187	5.09a9	6.05i	打球の進路を故意に狂わせる	打者が、打つか、バントした後、一塁に走るにあたって、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも故意に狂わせた場合。 ボールデッドとなって、走者の進塁は認められない。
327	規則	188	5.09a10	6.05j	一塁に触れる前に身体または塁に触球	打者が第3ストライクの宣告を受けた後、またはフェアボールを打った後、一塁に触れる前に、その身体または一塁に触球された場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
328	規則	189	5.09a10【注】	6.05j注	触球と確実なボール保持	触球するに際しては、まずボールを保持して触れることが必要なことはもちろん、触球後においても確実にボールを保持していなければならない。また、野手がボールを手にしていても、そのボールをグラブの中でジャグリングしたり、両腕と胸とでボールを抱き止めたりしている間は、確実に捕らえたとはいえないから、たとえ打者が一塁に触れる前に野手が塁に触れながらボールを手にしていても、確捕したのが打者が一塁に触れた後であればその打者はアウトにならない。
329	規則	190	5.09a11	6.05k	一塁に対する守備妨害	一塁に対する守備が行なわれているとき、本塁一塁間の後半を走るに際して、打者がスリーフットラインの外側(向かって右側)またはファウルラインの内側(向かって左側)を走って、一塁への送球を捕らえようとする野手の動作を妨げたと審判員が認めた場合。この際は、ボールデッドとなる。ただし、打球を処理する野手を避けるために、スリーフットラインの外側(向かって右側)またはファウルラインの内側(向かって左側)を走るとはさしつかえない。
330	規則	191	5.09a11【原注】	6.05k原注	一塁に対する守備妨害	スリーフットラインを示すラインはそのレーンの一部であり、打者走者は両足をスリーフットレーンの中もしくはスリーフットレーンのライン上に置かなければならない。
331	規則	192	5.09a12	6.05l	故意落球	0アウトまたは1アウトで、走者一塁、一・二塁、一・三塁または一・二・三塁のとき、内野手がフェアの飛球またはライナーを故意に落とした場合。ボールデッドとなって、走者の進塁は認められない。
333	規則	194	5.09a12【注1】	6.05l注1	故意落球	本項は、容易に捕球できるはずの飛球またはライナーを、内野手が地面に触れる前に片手または両手で現実にボールに触れて、故意に落とした場合に適用される。
334	規則	195	5.09a12【注2】	6.05l注2	故意落球	投手、捕手および外野手が、内野で守備した場合は、本項の内野手と同様に扱う。また、あらかじめ外野に位置していた内野手は除く。
332	規則	193	5.09a12【規則説明】	6.05l付記	故意落球	内野手が打球に触れないでこれを地上に落としたときには、打者はアウトにならない。ただし、インフィールドフライの規則が適用された場合は、この限りではない。
335	規則	196	5.09a13	6.05m	前位の走者の妨害	野手が、あるプレイをなし遂げるために、送球を捕らえようとしているか、または送球しようとしているのを前位の走者が故意に妨害したと審判員が認めた場合。
336	規則	197	5.09a13【原注】	6.05m原注	前位の走者の妨害	この規則は攻撃側プレーヤーによる許しがたい非スポーツマン的な行為に対するペナルティとして定められたものであって、走者が塁を得ようとして、併殺プレイのピボットマン(併殺の際、ボールを継送するプレーヤー。すなわち遊撃手 - 二塁手 - 一塁手とわたる併殺ならば二塁手、二塁手 - 遊撃手 - 一塁手の併殺ならば遊撃手がピボットマンである)を妨害する目的で、明らかにベースラインから外れて走るといった場合に適用されるものである。
337	規則	198	5.09a13【注】	6.05m注	前位の走者の妨害	まだアウトにならない前位の走者の妨害行為に対する処置は、本項では定めていないように見えるが、5.09(b)(3)に規定してあるとおり、このような妨害行為に対しては、その走者はもちろん打者とともにアウトにする規則であって、このような粗暴な行為を禁止するために規定された条項である。すでにアウトになった走者または得点したばかりの走者の妨害行為に対しては、6.01(a)(5)に規定されている。
338	規則	199	5.09a14	6.05n	本盗時にストライクの投球に触れる	2アウト、2ストライク後本盗を企てた三塁走者が、打者への正規の投球にストライクゾーンで触れた場合。この際、打者は“第3ストライク、”の宣告を受けてアウトとなり、その走者の得点は認められない。しかし0アウトまたは1アウトであれば、打者は“第3ストライク、”の宣告を受けてアウトとなり、ボールデッドになるが、その得点は認められる。
339	規則	200	5.09a14【注】	6.05n注	本盗時にストライクの投球に触れる	0アウトまたは1アウトの場合には、他の塁の走者にも、次塁への走塁行為があったかどうかに関係なく、1個の進塁が許される。(5.06c8参照)
340	規則	201	5.09a15	6.05o	攻撃側メンバーが野手を守備妨害	走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合。(6.01b参照。走者による妨害については5.09b3参照)
611	規則	129	6.03a	6.06	打者の反則行為によるアウト	次の場合、打者は反則行為でアウトになる。
612	規則	130	6.03a1	6.06a	打者の反則行為によるアウト	打者が片足または両足を完全にバッタースボックスの外に置いて打った場合。



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
613	規則	131	6.03a1【原注】	6.06a原注	打者の反則行為によるアウト	本項は、打者が打者席の外に出てバットにボールを当てた(フェアかファウルを問わない)とき、アウトを宣告されることを述べている。球審は、故意四球が企てられているとき、投球を打とうとする打者の足の位置に特に注意を払わなければならない。打者は打者席から跳び出したり、踏み出して投球を打つことは許されない。
614	規則	132	6.03a2	6.06b	打者の反則行為によるアウト	投手が投球姿勢にはいったとき、打者が一方のバッタースボックスから他方のバッタースボックスに移った場合。
615	規則	133	6.03a2【注】	6.06b注	打者の反則行為によるアウト	投手が投手板に触れて捕手からのサインを見ているとき、打者が一方から他方のバッタースボックスに移った場合、本項を適用して打者をアウトとする。
616	規則	134	6.03a3	6.06c	打者の反則行為によるアウト	打者がバッタースボックスの外に出るか、あるいはなんらかの動作によって、本塁での捕手のプレイおよび捕手の守備または送球を妨害した場合。しかし例外として、進塁しようとしていた走者がアウトになった場合、および得点しようとした走者が打者の妨害によってアウトの宣告を受けた場合は、打者はアウトにはならない。
617	規則	135	6.03a3【原注】	6.06c原注	打者の反則行為によるアウト	打者が捕手を妨害したとき、球審は妨害を宣告しなければならない。打者はアウトになり、ボールデッドとなる。妨害があったとき、走者は進塁できず、妨害発生の瞬間に占有していたと審判員が判断した塁に帰らなければならない。しかし、妨害されながらも捕手がプレイをして、アウトにしようとした走者がアウトになった場合には、現実には妨害がなかったものと考えられるべきで、その走者がアウトとなり、打者はアウトにはならない。その際、他の走者は、走者がアウトにされたら妨害はなかったものとするという規則によって、進塁も可能である。このような場合、規則違反が宣告されなかったようにプレイは続けられる。 打者が空振りし、スイングの余勢で、その所持するバットが、捕手または投球に当たり、審判員が故意ではないと判断した場合は、打者の妨害とはしないが、ボールデッドとして走者の進塁を許さない。打者については、第1ストライク、第2ストライクにあたるときは、ただストライクを宣告し、第3ストライクにあたるときに打者をアウトにする。(2ストライク後の「ファウルチップ」も含む)
618	規則	136	6.03a3【注1】	6.06c注1	打者の反則行為によるアウト	打者が空振りしなかったとき、投手の投球を捕手がそらし、そのボールがバッタースボックス内にいる打者の所持するバットに触れた際はボールインプレイである。
619	規則	137	6.03a3【注2】	6.06c注2	打者の反則行為によるアウト	本項は、捕手以外の野手の本塁でのプレイを打者が妨害した場合も含む。 打者に妨害行為があっても、走者を現実的にアウトにすることができたときには、打者をそのままとして、その走者のアウトを認め、妨害と関係なくプレイは続けられる。しかしアウトの機会があっても、野手の失策で走者を生かした場合には、現実的にアウトが成立していないから、本項の前段を適用して打者をアウトにする。 なお、捕手からの送球によってランダウプレイが始まろうとしたら、審判員はただちに「タイム」を宣告して打者を妨害によるアウトにし、走者を元の塁に戻す。
620	規則	138	6.03a4新	6.06d	打者の反則行為によるアウト	打者が、いかなる方法であろうとも、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるように改造、加工したと審判員が判断するバットを使用したり、使用しようとした場合。 このようなバットには、詰めものをしたり、表面を平らにしたり、釘を打ちつけたり、中をうつろにしたり、溝をつけたり、パラフィン、ワックスなどでおおって、ボールの飛距離を伸ばしたり、異常な反発力を生じさせるようにしたものを含める。 打者がこのようなバットを使用したために起きた進塁は認められない(《バットの使用に起因しない進塁、たとえば盗塁、ポーク、暴投、捕逸を除く》)が、アウトは認められる。 打者はアウトを宣告され、試合から除かれ、後日リーグ会長によってペナルティが科せられる。
621	規則	139	6.03a4【原注】	6.06d原注	打者の反則行為によるアウト	打者がこのようなバットを持ってバッタースボックスに入れば、打者は規則違反のバットを使用した、あるいは使用しようとしたとみなされる。
622	規則	140	6.03a4【注】	6.06d注	打者の反則行為によるアウト	アマチュア野球では、このようなバットを使用した場合、打者にはアウトを宣告するにとどめる。
623	規則	141	6.03b	6.07	打順の誤り	打順の誤り
625	規則	143	6.03b2	6.07a後段	打順の誤り	不正位打者の打撃完了前ならば、正位打者は、不正位打者の得たストライクおよびボールのカウントを受け継いで、これに代わって打撃につくことはさしつかえない。
624	規則	142	6.03b1	6.07a前段	打順の誤り	打順表に記載されている打者が、その番のときに打たないで、番でない打者(不正位打者)が打撃を完了した(走者となるか、アウトとなった)後、相手方がこの誤りを発見してアピールすれば、正位打者はアウトを宣告される。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
626	規則	144	6.03b3	6.07b	打順の誤り	不正位打者が打撃を完了したときに、守備側チームが“投手の投球、前に球審にアピールすれば、球審は、 (A) 正位打者にアウトを宣告する。 (B) 不正位打者の打球によるものか、または不正位打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に進んだことに起因した、すべての進塁および得点を無効とする。
627	規則	145	6.03b3【注1】	6.07b注1	打順の誤り	(3)(5)(7)項でいう“投手の投球、とは、投手が次に面した打者(いずれのチームの打者かを問わない)へ1球を投じた場合はもちろん、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てた場合も含まれる。 ただし、アピールのための送球などは、ここでいう“プレイ、に含まれない。
628	規則	146	6.03b3【注2】	6.07b注2	打順の誤り	不正位打者の打球によるものか、不正位打者が一塁に進んだことに起因した、すべての進塁および得点を無効とするがあるが、進塁だけに限らず、不正位打者の打撃行為によるすべてのプレイを無効とする。すなわち、不正位打者の二ゴロで一塁走者が二塁でフォースアウトにされた後、アピールによって正位打者がアウトの宣告を受ければ、一塁走者のフォースアウトは取り消される。
629	規則	147	6.03b4	6.07b付記	打順の誤り	走者が、不正位打者の打撃中に盗塁、ボーク、暴投、捕逸などで進塁することは、正規の進塁とみなされる。
630	規則	148	6.03b5	6.07c	打順の誤り	不正位打者が打撃を完了した後、“投手の投球、前にアピールがなかった場合には、不正位打者は正位打者として認められ、試合はそのまま続けられる。
631	規則	149	6.03b6	6.07d1	打順の誤り	正位打者が、打撃順の誤りを発見されてアウトの宣告を受けた場合には、その正位打者の次の打順の打者が正規の次打者となる。
632	規則	150	6.03b7	6.07d2	打順の誤り	不正位打者が“投手の投球、前にアピールがなかったために、正位打者と認められた場合には、この正位化された不正位打者の次に位する打者が正規の次打者となる。不正位打者の打撃行為が正当化されれば、ただちに、打順はその正位化された不正位打者の次の打者に回ってくる。
634	規則	152	6.03b【規則説明】	6.07d規則説明	打順の誤り	打順を次のように仮定して、打順の誤りによって生じる種々の状態を例証する。 打順……123456789 打者……ABCDEFGHI
633	規則	151	【6.03b原注】	6.07d原注	打順の誤り	審判員は、不正位打者がバッタースボックスに立っても、何人にも注意を喚起してはならない。各チームの監督、プレーヤーの不断の注意があつて、初めて本項の適用が可能となる。
635	規則	153	6.03b【例題1】	6.07例題1	打順の誤り	Aの打順にBがバッタースボックスに入って、投球カウントが2-1となったとき、 (a) 攻撃側が打順の誤りに気づいた。 (b) 守備側はアピールした。
636	規則	154	6.03b【例題1解答】	6.07例題1解答	打順の誤り	どちらの場合も、Aはカウント2-1を受け継いでBと代わる。この際アウトはない。
637	規則	155	6.03b【例題2】	6.07例題2	打順の誤り	Aの打順にBが打ち、二塁打を放った。この場合、 (a) 守備側はただちにアピールした。 (b) 守備側はCに1球が投じられた後、アピールした。
638	規則	156	6.03b【例題2解答】	6.07例題2解答	打順の誤り	(a) 正位打者Aはアウトの宣告を受け、Bが正規の次打者となる。 (b) Bはそのまま二塁にとどまり、Cが正規の次打者となる。
639	規則	157	6.03b【例題3】	6.07例題3	打順の誤り	A、Bともに四球、Cはゴロを打ってBをフォースアウトとして、Aを三塁へ進めた後、Dの打順にEがバッタースボックスに入った。その打撃中に暴投があつて、Aは得点し、Cは二塁へ進んだ。Eがゴロを打ってアウトとなり、Cを三塁に進めた。この場合、 (a) 守備側はただちにアピールした。 (b) 守備側は、次にバッタースボックスに入ったDへの1球が投じられた後、アピールした。
640	規則	158	6.03b【例題3解答】	6.07例題3解答	打順の誤り	(a) 正位打者Dがアウトの宣告を受け、Eの打撃行為のために三塁に進んだCは二塁へ戻されるが、暴投によるAの得点およびCの二塁への進塁は、Eの打撃行為とは関係なく行なわれた進塁だから有効となる。Eは次打者となって再び打たなければならない。 (b) Aの得点は認められ、Cは三塁にとどまる。正位化したEの次のFが正規の次打者となる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
641	規則	159	6.03b【例題4】	6.07例題4	打順の誤り	2アウト満塁で、Fの打順にHが出て三塁打し、全走者を得点させた。 この場合、 (a) 守備側はただちにアピールした。 (b) 守備側はGに1球が投げられた後、アピールした。
642	規則	160	6.03b【例題4解答】	6.07例題4解答	打順の誤り	(a) 正位のFはアウトの宣告を受け、得点は全部認められない。Gが次の第1打者となる。 (b) Hは三塁にとどまり、3点が記録される。Iが正規の次打者となる。
643	規則	161	6.03b【例題5】	6.07例題5	打順の誤り	2アウト満塁で、Fの打順にHが出て三塁打し、全走者を得点させ3点を記録し、続いてバッタースボックスに入ったGへの1球が投げられた後、 (a) Hは三塁で投手の送球によりアウトになり、攻守交代となった。 (b) Gが飛球を打ってアウトとなり攻守交代したが、アピールがなく、相手チームが攻撃に移った。 この二つの場合では誰が次の第1打者となるか。
644	規則	162	6.03b【例題5解答】	6.07例題5解答	打順の誤り	(a) Iである。Gへの1球が投げられたのでHの三塁打は正当化され、Iが正規の次打者となる。 (b) Hである相手チームの第1打者への1球が投げられるまでにアピールがなかったため、Gの打撃行為は正当化されるから、Hが正規の次打者となる。
645	規則	163	6.03b【例題6】	6.07例題6	打順の誤り	Aの打順にDが出て四球を得た後、Aがバッタースボックスについて、1球が投げられた。その際、Aへの投球前にアピールがあれば、正位打者のAがアウトの宣告を受けて、Dの四球は取り消され、Bが正規の次打者となるが、すでにAIに1球が投げられたために、Dの四球は正当化され、Eが正規の次打者となる。ところが、不正位のAはそのまま打撃を続けてフライアウトとなり、Bがバッタースボックスについてしまった。この際も、BIに1球が投げられるまでにアピールがあれば、正位打者のEがアウトの宣告を受けて、Fが正規の次打者となるはずだが、またしてもアピールがなく、BIに1球が投げられたので、こんどはAの打撃行為が正当化されて、Bが正規の次打者となった。そのBが四球を得てDを二塁へ進め、次打者のCは飛球を打ってアウトとなった。Dが正規の次打者であるはずだが、二塁走者となっている。この際、だれが正規の次打者となるか。
646	規則	164	6.03b【例題6解答】	6.07例題6解答	打順の誤り	Dは打順を誤っているが、すでに正当化され、しかも塁上にいるから、Dを抜かして、Eを正規の次打者とする。
195	規則	56	5.05b	6.08	一塁への安全進塁権	打者は、次の場合走者となり、アウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられる。(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする)
196	規則	57	5.05b1	6.08a	一塁への安全進塁権	審判員が“四球、”を宣告した場合。
197	規則	58	5.05b1【原注】	6.08a原注	一塁への安全進塁権	ボール4個を得て一塁への安全進塁権を得た打者は、一塁へ進んでかつこれに触れなければならない義務を負う。これによって、塁上の走者は次塁への進塁を余儀なくされる。この考え方は、満塁のときおよび代走者を出場させるときにも適用される。 打者への“四球、”の宣告により、進塁を余儀なくされた走者が何らかのプレイがあると思込んで塁に触れずにまたは触れてからでも、その塁を滑り越してしまえば、野手に触球されるとアウトになるまた、与えられた塁に触れそくなってその塁よりも余分に進もうとした場合には、身体またはその塁に触球されればアウトになる。
198	規則	59	5.05b2	6.08b	打者が打とうとしなかった投球に触れる	打者が打とうとしなかった投球に触れた場合。 ただし、(A)バウンドしない投球が、ストライクゾーンで打者に触れたとき、(B)打者が投球を避けずにこれに触れたときは除かれる。 バウンドしない投球がストライクゾーンで打者に触れた場合には、打者がこれを避けようとしたかどうかを問わず、すべてストライクが宣告される。しかし、投球がストライクゾーンの外で打者に触れ、しかも、打者がこれを避けようとしなかった場合には、ボールが宣告される。
200	規則	61	5.05b2【注1】	6.08b注1	打者が打とうとしなかった投球に触れる	“投球がストライクゾーンで打者に触れた、”ということは、ホームプレートの上空間に限らず、これを前後に延長した空間で打者に触れた場合も含む。
201	規則	62	5.05b2【注2】	6.08b注2	打者が打とうとしなかった投球に触れる	投球が、ストライクゾーンの外で打者に触れた場合でも、その投球が、ストライクゾーンを通過していたときには、打者がこれを避けたかどうかを問わず、ストライクが宣告される。
202	規則	63	5.05b2【注3】	6.08b注3	打者が打とうとしなかった投球に触れる	打者が投球を避けようとしたかどうかは、一に球審の判断によって決定されるものであって、投球の性質上避けることができなかったと球審が判断した場合には、避けようとした場合と同様に扱われる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
203	規則	64	5.05b2【注4】	6.08b注4	打者が打とうとしなかった投球に触れる	投球がいったん地面に触れた後、これを避けようと試みた打者に触れた場合も、打者には一塁が許される。ただし、ストライクゾーンを通過してからバウンドした投球に触れた場合を除く。
199	規則	60	5.05b2【規則説明】	6.08b付記	打者が打とうとしなかった投球に触れる	打者が投球に触れたが一塁を許されなかった場合も、ボールデッドとなり、各走者は進塁できない。
204	規則	65	5.05b3	6.08c	捕手またはその他の野手が、打者を妨害	捕手またはその他の野手が、打者を妨害(インターフェア)した場合。しかし、妨害にもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側チームの監督は、そのプレイが終わってからただちに、妨害行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。ただし、妨害にもかかわらず、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときは、妨害とは関係なく、プレイは続けられる。
205	規則	66	5.05b3【原注】	6.08c原注	捕手またはその他の野手が、打者を妨害(監督の選択権)	捕手の妨害が宣告されてもプレイが続けられたときは、そのプレイが終わってからこれを生かしたいと監督が申し出るかもしれないから、球審はそのプレイを継続させる。 打者走者が一塁を空過したり、走者が次塁を空過しても、[5.06b3付記]に規定されているように、塁に到達したものとみなされる。 監督がプレイを選ぶ場合の例。 ① 1アウト走者三塁、打者が捕手に妨げられながらも外野に飛球を打ち、捕球後三塁走者が得点した。監督は、打者アウトで得点を記録するのと、走者三塁、一塁(打者が打撃妨害により出塁)とのいずれを選んでよい。 ② 0アウト走者二塁、打者は捕手に妨げられながらもバントして走者を三塁に進め、自らは一塁でアウトになった監督は、0アウト走者二塁、一塁とするよりも、走者三塁で1アウトとなる方を選んでよい。 三塁走者が盗塁またはスクイズプレイにより得点しようとした場合のペナルティは、6.0(g)に規定されている。 投手が投球する前に、捕手が打者を妨害した場合、本項でいう打者に対する妨害とは考えられるべきではない。このような場合には、審判員は“タイム”を宣告して“出発点”からやり直させる。
520	規則	038	6.01c【原注】	6.08c原注	捕手の妨害	捕手の妨害が宣告されてもプレイが続けられたときは、そのプレイが終わってからこれを生かしたいと監督が申し出るかもしれないから、球審はそのプレイを継続させる。 打者走者が一塁を空過したり、走者が次塁を空過しても、[5.06b3付記]に規定されているように、塁に到達したものとみなされる。 監督がプレイを選ぶ場合の例 ① 1アウト走者三塁、打者が捕手に妨げられながらも外野に飛球を打ち、捕球後三塁走者が得点した。監督は、打者アウトで得点を記録するのと、走者三塁、一塁(打者が打撃妨害により出塁)とのいずれを選んでよい。 ② 0アウト走者二塁、打者は捕手に妨げられながらもバントして走者を三塁に進め、自らは一塁でアウトになった。監督は、0アウト走者二塁、一塁とするよりも、走者三塁で1アウトとなる方を選んでよい。 三塁走者が盗塁またはスクイズプレイにより得点しようとした場合のペナルティは、6.0(g)に規定されている。 投手が投球する前に、捕手が打者を妨害した場合、打者に対する妨害とは考えられるべきではない。このような場合には、審判員は“タイム”を宣告して“出発点”からやり直させる。
206	規則	67	5.05b3【注1】	6.08c注1	捕手またはその他の野手が、打者を妨害(監督の選択権)	監督がプレイを生かす旨を球審に通告するにあたっては、プレイが終わったら、ただちに行なわなければならない。なお、いったん通告したら、これを取り消すことはできない。
521	規則	039	6.01c【注1】	6.08c注1	捕手の妨害	監督がプレイを生かす旨を球審に通告するにあたっては、プレイが終わったら、ただちに行なわなければならない。なお、いったん通告したら、これを取り消すことはできない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
207	規則	68	5.05b3【注2】	6.08c注2	捕手またはその他の野手が、打者を妨害(監督の選択権)	監督がペナルティの適用を望んだ場合、次のとおり解釈できる。 捕手(または他の野手)が打者を妨害した場合、打者には一塁が与えられる。三塁走者が盗塁またはスクイズプレイによって得点しようとしたときに、この妨害があった場合にはボールデッドとし、三塁走者の得点を認め、打者には一塁が与えられる。 三塁走者が盗塁またはスクイズプレイで得点しようとしていなかったときに、捕手が打者を妨害した場合にはボールデッドとし、打者に一塁が与えられ、そのために塁を明け渡すことになった走者は進塁する盗塁を企てていなかった走者と塁を明け渡さなくてもよい走者とは、妨害発生の瞬間に占有していた塁にとめおかれる。
522	規則	040	6.01c【注2】	6.08c注2	捕手の妨害	監督がペナルティの適用を望んだ場合、次のとおり解釈できる。 捕手(または他の野手)が打者を妨害した場合、打者には一塁が与えられる。三塁走者が盗塁またはスクイズプレイによって得点しようとしたときに、この妨害があった場合にはボールデッドとし、三塁走者の得点を認め、打者には一塁が与えられる。 三塁走者が盗塁またはスクイズプレイで得点しようとしていなかったときに、捕手が打者を妨害した場合にはボールデッドとし、打者に一塁が与えられ、そのために塁を明け渡すことになった走者は進塁する。盗塁を企てていなかった走者と塁を明け渡さなくてもよい走者とは、妨害発生の瞬間に占有していた塁にとめおかれる。
208	規則	69	5.05b4	6.08d	一塁への安全進塁権	野手(投手を含む)に触れていないフェアボールが、フェア地域で審判員または走者に触れた場合。 ただし、内野手(投手を除く)をいったん通過するか、または野手(投手を含む)に触れたフェアボールが審判員に触れた場合にはボールインプレイである。
519	規則	037	6.01c	6.08表文・6.08c	捕手の妨害	捕手またはその他の野手が、打者を妨害(インターフェア)した場合、打者は走者となり、アウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられる。(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする) しかし、妨害にもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側チームの監督は、そのプレイが終わってからただちに、妨害行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。 ただし、妨害にもかかわらず、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときは、妨害とは関係なく、プレイは続けられる。
180	規則	41	5.05	6.09	打者が走者となる場合	
181	規則	42	5.05a	6.09	次の場合、打者は走者となる	次の場合、打者は走者となる
182	規則	43	5.05a1	6.09a	次の場合、打者は走者となる	フェアボールを打った場合。
184	規則	45	5.05a2	6.09b	次の場合、打者は走者となる(振り逃げ)	(A)走者が一塁にいないとき、(B)走者が一塁にいても2アウトのとき、捕手が第3ストライクと宣告された投球を捕らえなかった場合。
185	規則	46	5.05a2【原注】	6.09b原注	次の場合、打者は走者となる(ダートサークルを出る)	第3ストライクと宣告されただけで、まだアウトになっていない打者が、気がつかずに、一塁に向かおうとしなかった場合、その打者は「ホームプレートを囲む土の部分、を出たらただちにアウトが宣告される。
187	規則	48	5.05a4	6.09c	次の場合、打者は走者となる(打球が当たる)	野手(投手を除く)を通過したか、または野手(投手を含む)に触れたフェアボールが、フェア地域で審判員または走者に触れた場合。
188	規則	49	5.05a5	6.09d	次の場合、打者は走者となる(ホームラン・エンタイトルツーベース)	フェア飛球が、本塁からの距離が250フィート(76.199メートル)以上あるフェンスを越えるか、スタンドに入った場合、打者がすべての塁を正規に触れれば、本塁打が与えられる。 フェア飛球が、本塁からの距離が250フィート(76.199メートル)未満のフェンスを越えるか、スタンドに入った場合は、二塁打が与えられる。
189	規則	50	5.05a6	6.09e	次の場合、打者は走者となる(エンタイトルツーベース)	フェアボールが、地面に触れた後、バウンドしてスタンドに入った場合、またはフェンス、スコアボード、灌木およびフェンス上のつる草を抜けるか、その下をくぐるか、挟まって止まった場合には、打者、走者ともに2個の進塁権が与えられる。
190	規則	51	5.05a6【注】	6.09e原注	次の場合、打者は走者となる	「地面に触れた」とあるのは、インフライトでない状態を指す。
191	規則	52	5.05a7	6.09f	次の場合、打者は走者となる(2個の進塁権)	フェアボール(地面に触れたものでも、地面に触れないものでも)が、フェンス、スコアボード、灌木およびフェンス上のつる草を抜けるか、その下をくぐった場合、フェンスまたはスコアボードの隙間を抜けた場合、あるいはフェンス、スコアボード、灌木およびフェンスのつる草に挟まって止まった場合には、打者、走者ともに2個の進塁権が与えられる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
192	規則	53	5.05a8	6.09g	次の場合、打者は走者となる(2個の進塁権)	バウンドしたフェアボールが、野手に触れて進路が変わり、フェア地域またはファウル地域のスタンドに入った場合か、フェンスを越えるか、くぐるかした場合、打者、走者ともに2個の進塁権が与えられる。
193	規則	54	5.05a9	6.09h	次の場合、打者は走者となる	フェア飛球が野手に触れて進路が変わり、 (A) ファウル地域のスタンドに入るか、またはファウル地域のフェンスを越えた場合 --- 打者に二塁が与えられる。 (B) フェア地域のスタンドに入るか、またはフェア地域のフェンスを越えた場合 --- 打者に本塁が与えられる。 ただし(B)の場合、そのスタンドまたはフェンスが、本塁から250フィート(76.199メートル)未満の距離にあるときは、打者に二塁が与えられるだけである。
194	規則	55	5.05a【注】	6.09注	次の場合、打者は走者となる	(a)項各規定で、打者、走者ともに2個の進塁権が与えられる場合は、投手の投球当時に占有していた塁を基準とする。
443	規則	304	5.11	6.10	指名打者	リーグは、指名打者ルールを使用することができる。
461	規則	322	5.11b	6.10a	指名打者	指名打者ルールを使用しているリーグに所属するチームと、これを使用していないリーグに所属するチームとが試合を行なうときには、これを使用するかどうかは次の定めによる。
462	規則	323	5.11b1	6.10a1	指名打者	ワールドシリーズまたは非公式試合では、ホームチームがこれを使用しているときには、使用する。ホームチームが使用していないときには、使用しない。
463	規則	324	5.11b2	6.10a2	指名打者	オールスターゲームでは、両チームと両リーグが同意したときだけ、使用する。
464	規則	325	5.11b【注1】	6.10a注1	指名打者	我が国のプロ野球では、(b)項(1)におけるワールドシリーズを日本シリーズと置きかえて適用する。なお、非公式試合において、(b)項(1)により指名打者ルールを使用しない試合でも、両チーム監督の合意があれば、指名打者ルールを使用することができる。
465	規則	326	5.11b【注2】	6.10a注2	指名打者	アマチュア野球では、指名打者ルールについては、各連盟の規定を適用する。
444	規則	305	5.11a	6.10b	指名打者	指名打者ルールは次のとおりである。
445	規則	306	5.11a1	6.10b1	指名打者	先発投手または救援投手が打つ番のときに他の人が代わって打っても、その投球を継続できることを条件に、これらの投手に代わって打つ打者を指名することが許される。 投手に代わって打つ指名打者は、試合開始前に選ばれ、球審に手渡す打順表に記載されなければならない。監督が打順表に10人のプレーヤーを記載したが、指名打者の特定がされておらず、球審がプレイを宣告する前に、審判員またはいずれかの監督(またはその指名する者)がその誤りに気づいたときは、球審は、監督に投手以外の9人のプレーヤーのうち誰が指名打者になるのかを特定するように命じる。
455	規則	316	5.11a10	6.10b10	指名打者	投手が指名打者に代わって打撃するかまたは走者になった場合、それ以後指名打者の役割は消滅する。試合に出場している投手は、指名打者に代わってだけ打撃または走者になることができる。
456	規則	317	5.11a11	6.10b11	指名打者	監督が打順表に10人のプレーヤーを記載したが、指名打者が特定されておらず、試合開始後に、相手チームの監督がその誤りを球審に指摘した場合は、 (A) チームが守備についた後では、投手は、守備につかなかったプレーヤーの打撃順に入る。 (B) チームがまだ守備についていないときには、投手は、そのチームの監督が指定した打撃順に入る。 いずれの場合も、投手が置きかわったプレーヤーは交代したとみなされ、試合から退き、それ以後指名打者の役割は消滅する。誤りが球審に指摘される前に起きたプレイは、6.03(b)により有効となる。
457	規則	318	5.11a12	6.10b12	指名打者	指名打者が守備位置についた場合それ以後指名打者の役割は消滅する。
458	規則	319	5.11a13	6.10b13	指名打者	指名打者に代わって出場させようとするプレーヤーは、指名打者の番がくるまで届け出る必要はない
459	規則	320	5.11a14	6.10b14	指名打者	他の守備位置についていたプレーヤーが投手になれば、それ以後指名打者の役割は消滅する
460	規則	321	5.11a15	6.10b15	指名打者	指名打者は、ブルペンで捕手を務める以外は、ブルペンに座ることはできない。
446	規則	307	5.11a1【原注】	6.10b1原注	指名打者	指名打者特定の明らかな誤りは、試合開始前であれば訂正することができる。(4.03[原注]参照)

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
447	規則	308	5.11a2	6.10b2	指名打者	試合開始前に交換された打順表に記載された指名打者は、相手チームの先発投手に対して、少なくとも1度は、打撃を完了しなければ交代できない。ただし、その先発投手が交代したときは、その必要はない。
448	規則	309	5.11a3	6.10b3	指名打者	チームは必ずしも投手に代わる指名打者を指名しなくてもよいが、試合前に指名しなかったときは、その試合で指名打者を使うことはできない。
449	規則	310	5.11a4	6.10b4	指名打者	指名打者に代えて代打者を使ってもよい。指名打者に代わった打者は、以後指名打者となる。退いた指名打者は、再び試合に出場できない。
450	規則	311	5.11a5	6.10b5	指名打者	指名打者が守備についてもよいが、自分の番のところで打撃を続けなければならない。したがって、投手は退いた守備者の打撃順を受け継ぐことになる。ただし、2人以上の交代が行なわれたときは、監督が、打撃順を指名しなければならない。
451	規則	312	5.11a6	6.10b6	指名打者	指名打者に代わって代走者が出場することができるが、その走者が以後指名打者の役割を受け継ぐ。指名打者が代走者になることはできない。
452	規則	313	5.11a7	6.10b7	指名打者	指名打者は、打順表の中でその番が固定されており、多様な交代によって指名打者の打撃の順番を変えることは許されない。
453	規則	314	5.11a8	6.10b8	指名打者	投手が一度他の守備位置についた場合、それ以後指名打者の役割は消滅する。
454	規則	315	5.11a9	6.10b9	指名打者	代打者が試合に出場してそのまま投手となった場合、それ以後指名打者の役割は消滅する。
209	規則	70	5.06	7.00	走者	
710	規則	054	補則	7.00補則	ボールデッドの際の走者の帰塁に関する処置	ボールデッドとなって各走者が帰塁する場合、ボールデッドとなった原因によって、帰るべき塁の基準がおのおの異なるので、その基準をここに一括する。
210	規則	71	5.06a	7.01	塁の占有	
211	規則	72	5.06a1	7.01	塁の占有	走者がアウトになる前に他の走者の触れていない塁に触れば、その塁を占有する権利を獲得する。その走者は、アウトになるか、または、その塁に対する正規の占有権を持っている他の走者のためにその塁を明け渡す義務が生じるまで、その権利が与えられる。
212	規則	73	5.06a1【5.06a・c原注】	7.01原注	塁の占有	走者が塁を正規に占有する権利を得て、しかも投手が投球姿勢に入った場合は、元の占有塁に戻ることは許されない。
215	規則	76	5.06b1	7.02	進塁の順序	走者は進塁するにあたり、一塁、二塁、三塁、本塁の順序に従って、各塁に触れなければならない。逆走しなければならないときも、5.06(c)の各規定のボールデッドとなっていない限り、すべての塁を逆の順序で、再度触れて行かななければならない。前記のボールデッドの際は、途中の塁を踏まないで、直接元の塁へ帰ることはさしつかえない。
216	規則	77	5.06b1【注1】	7.02注1	安全進塁権	ボールインプレイ中に起きた行為(たとえば悪送球、ホームランまたは柵外に出たフェアヒットなど)の結果、安全進塁権が認められたときでも、走者が、進塁または逆走するにあたっては、各塁を正規に触れなければならない。
217	規則	78	5.06b1【注2】	7.02注2	逆走	“逆走しなければならないとき、”というのは、 ① フライが飛んでいるうちに次塁へ進んだ走者が、捕球されたのを見て帰塁しようとする場合(5.09b5参照) ② 塁を空過した走者が、その塁を踏み直す場合(5.09c2参照) ③ 自分よりも前位の走者に先んじるおそれがある場合(5.09b9参照) を指すものであって、このようなときでも、逆の順序で各塁に触れなければならない。
213	規則	74	5.06a2	7.03a	塁の占有	2人の走者が同時に一つの塁を占有することは許されない。ボールインプレイの際、2人の走者が同一の塁に触れているときは、その塁を占有する権利は前位の走者に与えられているから、後位の走者はその塁に触れていても触球されればアウトとなる。ただし本条(b)(2)項適用の場合を除く。
218	規則	79	5.06b2	7.03b	塁の占有の権利	打者が走者となったために進塁の義務が生じ、2人の走者が後位の走者が進むべき塁に触れている場合には、その塁を占有する権利は後位の走者に与えられているので、前位の走者は触球されるか、野手がボールを保持してその走者が進むべき塁に触れればアウトになる。(5.09b6参照)

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
219	規則	80	5.06b3	7.04	1個の安全進塁権(各走者)	次の場合、打者を除く各走者は、アウトにされるおそれなく1個の塁が与えられる。 (A) ボークが宣告された場合。 (B) 打者が次の理由で走者となって一塁に進むために、その走者が塁を明け渡さなければならなくなった場合。 ① 打者がアウトにされるおそれなく、一塁に進むことが許された場合。 ② 打者の打ったフェアボールが、野手(投手を含む)に触れる前か、または野手(投手を除く)を通過する前に、フェア地域で審判員もしくは他の走者に触れた場合。
222	規則	83	5.06b3C	7.04c	1個の安全進塁権(各走者)	野手が飛球を捕らえた後、ベンチまたはスタンド内に倒れ込んだり、ロープを越えて観衆内(観衆が競技場内まで入っているとき)に倒れ込んだ場合。
223	規則	84	5.06b3C【原注】	7.04c原注	1個の安全進塁権(各走者)	野手が正規の捕球をした後、スタンド、観衆、ダッグアウト、またはその他ボールデッドの個所に倒れ込んだり、あるいは捕球した後ダッグアウトの中で倒れた場合、ボールデッドとなり、各走者は野手が倒れ込んだときの占有塁から1個の進塁が許される。
224	規則	85	5.06b3D	7.04d	1個の安全進塁権(各走者)	走者が盗塁を企てたとき、打者が捕手またはその他の野手に妨害(インターフェア)された場合。
225	規則	86	5.06b3D【注】	7.04d注	本項の適用範囲	本項は、盗塁を企てた塁に走者がいない場合とか、進もうとした塁に走者がいても、その走者もともに盗塁を企てていたために次塁への進塁が許される場合だけに適用される。しかし、進もうとした塁に走者がおり、しかもその走者が盗塁を企てていない場合には、たとえ盗塁行為があってもその走者の進塁は許されない。また単に塁を離れていた程度では本項は適用されない。
226	規則	87	5.06b3E	7.04e	1個の安全進塁権(各走者)	野手が帽子、マスク、その他着衣の一部を本来つけている個所から離して、投球に故意に触れさせた場合。 この際はボールインプレイで、ボールに触れたときの走者の位置を基準に塁が与えられる。
220	規則	81	5.06b3【原注】	7.04原注	安全進塁権以降の責任	安全進塁権を得た走者が、与えられた塁に触れた後さらに進塁することはさしつかえないが、その行為の責任はその走者自身が負うだけで、たとえ与えられた塁に触れた後にアウトになった場合でも、他の走者の安全進塁権に影響を及ぼすことはない。 したがって、2アウト後その走者が与えられた塁に触れた後にアウトになり、第3アウトが成立しても安全進塁権がある前位の走者は、そのアウトの後で本塁を踏んでも得点として認められる。 例―― 2アウト満塁、打者四球、二塁走者が勢いこんで、三塁を回って本塁の方へ向かってきたが、捕手からの送球で触球アウトとなった。たとえ2アウト後であっても、四球と同時に三塁走者が本塁に押し出されたので、すべての走者に次塁へ進んで触れる必要が生まれたという理論に基づいて得点が記録される。
221	規則	82	5.06b3【注】	7.04注	原注の適用	本項[原注]は、打者が四球を得たために、塁上の各走者に次塁への安全進塁権が与えられた場合だけに適用される。
227	規則	88	【5.06b3付記】	7.04付記	安全進塁権時の塁の空過	ボールインプレイのもとで1個の塁に対する安全進塁権を得た走者が、その塁を踏まないで次塁へ進もうとした場合、および2個以上の塁に対する安全進塁権を得た走者が、与えられた最終塁に達した後はボールインプレイになる規則のもとで、その塁を踏まないで次塁へ進もうとした場合は、いずれもその走者は安全進塁権を失ってアウトにされるおそれがある状態におかれる。したがって、その進むことが許された塁を踏み損ねた走者は、その空過した塁に帰る前に、野手によってその身体またはその塁に触球されれば、アウトとなる。
228	規則	89	【5.06b3付記】【注】	7.04付記・注	安全進塁権時の塁の空過	たとえば、打者が右中間を抜こうとするような安打を打ったとき、右翼手が止めようとしてこれにグラブを投げつけて当てたが、ボールは外野のフェンスまで転じ去った。打者は三塁を空過して本塁へ進もうとしたが、途中で気がついて三塁へ踏み直して帰ろうとしたこの際、打者はもはや三塁へ安全に帰ることは許されないから、その打者が三塁に帰る前に、野手が打者または三塁に触球してアピールすれば、打者はアウトになる。(5.06b4C参照)
229	規則	90	5.06b4	7.05	安全進塁権(打者走者含む)	次の場合、各走者(打者走者を含む)は、アウトにされるおそれなく進塁することができる。
230	規則	91	5.06b4A	7.05a	本塁が与えられる(守備行為)	本塁が与えられ得点が記録される場合 ―― フェアボールがインフライトの状態ではプレイングフィールドの外へ出て、しかも、各走者が正規に各塁に触れた場合。また、フェアボールがインフライトの状態、明らかにプレイングフィールドの外へ出ただろうと審判員が判断したとき、野手がグラブ、帽子、その他着衣の一部を投げつけて、その進路を変えた場合。



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
231	規則	92	5.06b4A【注1】	7.05a注1	本塁が与えられる(守備行為)	フェアの打球がインフライトの状態、明らかにプレイングフィールドの外へ出たろうと審判員が判断したとき、観衆や鳥などに触れた場合には、本塁が与えられる。 送球またはインフライトの打球が、鳥に触れた場合は、ボールインプレイでありインフライトの状態は続く。しかし、プレイングフィールド上(地上)の鳥または動物に触れた場合は、ボールインプレイであるが、インフライトの状態でなくなる。 また、打球が鳥に触れた場合は、ボールデッドとしてカウントしない。犬などがフェアの打球、送球または打球をくわえたりした場合には、ボールデッドとして審判員の判断によって処置する。
232	規則	93	5.06b4A【注2】	7.05a注2	本塁が与えられる(守備行為)	“その進路を変えた場合、とあるが、インフライトの状態、明らかにプレイングフィールドの外へ出たろうと審判員が判断したフェアの打球が、野手の投げつけたグラブなどに触れて、グラウンド内に落ちたときでも、本項が適用される。
233	規則	94	5.06b4B	7.05b	3個の塁が与えられる(守備行為)	3個の塁が与えられる場合 --- 野手が、帽子、マスクその他着衣の一部を、本来つけている個所から離して、フェアボールに故意に触れさせた場合。 この際はボールインプレイであるから、打者はアウトを賭して本塁に進んでもよい。
238	規則	99	5.06b4【BCDE原注】	7.05bcde原注	ペナルティ適用外(守備行為)	投げたグラブ、本来の位置から離れた帽子、マスクその他がボールに触れなければ、このペナルティは適用されない。
240	規則	101	5.06b4【BCDE注】	7.05bcde注	進塁の起点(守備行為)	野手により、各項の行為がなされた場合の走者の進塁の起点は、野手が投げたグラブ、本来の位置から離れた帽子、マスクその他が打球または送球に触れた瞬間とする。
234	規則	95	5.06b4C	7.05c	3個の塁が与えられる(守備行為)	3個の塁が与えられる場合 --- 野手が、グラブを故意に投げて、フェアボールに触れさせた場合。 この際はボールインプレイであるから、打者はアウトを賭して本塁に進んでもよい。
239	規則	100	5.06b4【CE原注】	7.05ce原注	ペナルティ適用外(守備行為)	このペナルティは、打球または送球の勢いにおされて、野手の手からグラブが脱げたとき、あるいは正しく捕らえようと明らかに努力したにもかかわらず、野手の手からグラブが脱げた場合などには、適用されない
235	規則	96	5.06b4C【注】	7.05c注	3個の塁が与えられる(守備行為)	ここにいうフェアボールとは、野手がすでに触れていたかどうかを問わない。
236	規則	97	5.06b4D	7.05d	2個の塁が与えられる(守備行為)	2個の塁が与えられる場合 --- 野手が、帽子、マスクその他着衣の一部を、本来つけている個所から離して、送球に故意に触れさせた場合。 この際はボールインプレイである。
237	規則	98	5.06b4E	7.05e	2個の塁が与えられる(守備行為)	2個の塁が与えられる場合 --- 野手が、グラブを故意に投げて、送球に触れさせた場合。 この際はボールインプレイである。
241	規則	102	5.06b4F	7.05f	2個の塁が与えられる(打球)	2個の塁が与えられる場合 --- フェアの打球が、 ① バウンドしてスタンドに入るか、または野手に触れて進路が変わって、一塁または三塁のファウル線外にあるスタンドに入った場合。 ② 競技場のフェンス、スコアボード、灌木、またはフェンスのつる草を抜けるか、その下をくぐるか、挟まって止まった場合。
242	規則	103	5.06b4G	7.05g	2個の塁が与えられる(送球)	2個の塁が与えられる場合 --- 送球が、 ① 競技場内に観衆があふれ出ていないときに、スタンドまたはベンチに入った場合。(ベンチの場合は、リバウンドして競技場に戻ったかどうかを問わない) ② 競技場のフェンスを越えるか、くぐるか、抜けた場合。 ③ バックストップの上部のつぎ目から、上方に斜めに張ってある金網に上がった場合。 ④ 観衆を保護している金網の目に挟まって止まった場合。 この際は、ボールデッドとなる。 審判員は2個の進塁を許すにあたって、次の定めに従う。すなわち、打球処理直後の内野手の最初のプレイに基づく悪送球であった場合は、投手の打球当時の各走者の位置、その他の場合は、悪送球が野手の手を離れたときの各走者の位置を基準として定める。
246	規則	107	5.06b4H	7.05h	1個の塁が与えられる(打球・投手板上からの送球)	1個の塁が与えられる場合 --- 打者に対する投手の打球、または投手板上から走者をアウトにしようと試みた送球が、スタンドまたはベンチに入った場合、競技場のフェンスまたはバックストップを越えるか、抜けた場合。 この際はボールデッドとなる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
248	規則	109	5.06b4I	7.05i	1個の塁が与えられる(球審・捕手のマスク・用具に挟まる)	四球目、三振目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に挟まって止まった場合、1個の塁が与えられる。ただし、打者の四球目、三振目の投球が(H)および(I)項規定の状態になっても、打者には一塁が与えられるにすぎない。
249	規則	110	5.06b4【原注1】	7.05i原注1	1個の塁が与えられる(義務)	走者がアウトにされることなく1個またはそれ以上の塁が与えられたときでも、与えられた塁またはその塁に至るまでの途中の塁に触れる義務を負うものである。 例――打者が内野にゴロを打ち、内野手の悪送球がスタンドに飛び込んだ。打者走者は一塁を踏まないで二塁に進んだ。打者走者は二塁を許されたわけだが、ボールインプレイになった後、一塁でアピールされればアウトになる。
250	規則	111	5.06b4【原注2】	7.05i原注2	1個の塁が与えられる(リタッチ)	飛球が捕らえられたので元の塁に帰らなければならない走者は、グラウンドルールやその他の規則によって、余分の塁が与えられたときでも投手の投球当時の占有塁のリタッチを果たさなければならない。この際、ボールデッド中にリタッチを果たしてもよい。また、与えられる塁はリタッチを果たさなければならない塁が基準となる。
251	規則	112	5.06b4【注】	7.05i注	1個の塁が与えられる(例外)	打者の四球目または三振目の投手の投球が、(H)項【規則説明】の状態になったときは、打者にも二塁が与えられる。
244	規則	105	5.06b4G【原注】	7.05原注1	2個の塁が与えられる(基準)	ときによっては、走者に2個の塁が与えられないこともある。 たとえば、走者一塁のとき、打者が浅い右翼飛球を打った。走者は一塁二塁間で立ち止まっており、打者は一塁を過ぎて走者の後ろまで来た。打球は捕らえられず、外野手は一塁に送球したが、送球はスタンドに入った。すべてボールデッドとなったときは、走者は進む権利を与えられた塁以上には進塁できないから、一塁走者は三塁へ、打者は二塁まで進む。
245	規則	106	5.06b4G【原注】規則説明	7.05原注2	2個の塁が与えられる(基準)	“悪送球がなされたとき、”という用語は、その送球が実際に野手の手を離れたときのことであって、地面にバウンドした送球がこれを捕ろうとした野手を通過したときとか、スタンドの中へ飛び込んでプレイから外れたときのことではない。 内野手による最初の送球がスタンドまたはダッグアウトに入ったが、打者が走者となっていない(三塁走者が捕逸または暴投を利用して得点しようとしたときに、アウトにしようとした捕手の送球がスタンドに入った場合など)ような場合は、その悪送球がなされたときの走者の位置を基準として2個の進塁が許される。(5.06b4Gの適用に際しては、捕手は内野手とみなされる) 例 走者一塁、打者が遊ゴロを打った。遊撃手は、二塁でフォースアウトしようとして送球したが間に合わなかった二塁手は打者が一塁を通り過ぎてから一塁手に悪送球した。――二塁に達していた走者は得点となる。(このようなプレイで、送球がなされたとき、打者走者が一塁に達していなかったときは、打者走者は二塁が許される)
243	規則	104	5.06b4G【規則説明】	7.05付記	2個の塁が与えられる(基準)	悪送球が打球処理直後の内野手の最初のプレイに基づくものであっても、打者を含む各走者が少なくとも1個の塁を進んでいた場合には、その悪送球が内野手の手を離れたときの各走者の位置を基準として定める。
247	規則	108	5.06b4H【規則説明】	7.05付記	1個の塁が与えられる(例外)	投手の投球が捕手を通過した後(捕手が触れたかどうかを問わない)さらに捕手またはその他の野手に触れて、ベンチまたはスタンドなど、ボールデッドになると規定された個所に入った場合、および投手が投手板上から走者をアウトにしようとした送球が、その塁を守る野手を通過した後(その野手が触れたかどうかを問わない)さらに野手に触れて、前記の個所に入ってボールデッドになった場合、いずれも、投手の投球当時の各走者の位置を基準として、各走者に2個の塁を与える。
535	規則	053	6.01h	7.06	オブストラクション	オブストラクションが生じたときには、審判員は“オブストラクション、”を宣告するか、またはそのシグナルをしなければならない。
536	規則	054	6.01h1	7.06a	オブストラクション	走塁を妨げられた走者に対してプレイが行なわれている場合、または打者走者が一塁に触れる前にその走塁を妨げられた場合には、ボールデッドとし、塁上の各走者はオブストラクションがなければ達したであろう審判員が推定する塁まで、アウトのおそれなく進塁することが許される。 走塁を妨げられた走者は、オブストラクション発生当時すでに占有していた塁よりも少なくとも1個先の進塁が許される。 走塁を妨げられた走者が進塁を許されたために、塁を明け渡さなければならなくなった前位の走者(走塁を妨げられた走者より)は、アウトにされるおそれなく次塁へ進むことが許される。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
538	規則	056	6.01h1【原注】	7.06a原注	オブストラクション	走塁を妨げられた走者に対してプレイが行なわれている場合には、審判員は“タイム、”を宣告するときと同じ方法で、両手を頭上にあげてオブストラクションのシグナルをしなければならない。オブストラクションのシグナルが行なわれたときは、ただちにボールデッドとなる。しかし、審判員のオブストラクションの宣告がなされる前に、野手の手を離れていたボールが悪送球となったときには、オブストラクションが発生しなければ、その悪送球によって当然許されるはずの塁がその走者に与えられるべきである。走者が二塁三塁間で挟撃され、すでに遊撃手からの送球がインフラインの状態のときに、三塁へ進もうとした走者が三塁手に走塁を妨げられたとき、その送球がダッグアウトに入った場合、その走者には本塁が与えられる。この際、他の走者に関しては、オブストラクションが宣告される以前に占有していた塁を基準として2個の塁が与えられる。
539	規則	057	6.01h1【注1】	7.06a注1	オブストラクション	内野におけるランダウンプレイ中に走者が走塁を妨げられたと審判員が判断した場合はもちろん、野手が、走者(一塁に触れた後の打者走者を含む)をアウトにしようとして、その走者が進塁を企てている塁へ直接送球していたときに、その走者が走塁を妨げられたと審判員が判断した場合も同様、本項が適用される。
540	規則	058	6.01h1【注2】	7.06a注2	オブストラクション	たとえば、走者二・三塁のとき、三塁走者が投手に追い出されて三塁本塁間で挟撃され、この間を利用して二塁走者は三塁に達していたところ、挟撃されていた走者が三塁へ帰ってきたので二塁走者は元の塁へ戻ろうとし、二塁三塁間で挟撃された。しかし、このランダウンプレイ中に二塁走者はボールを持たない二塁手と衝突したような場合、審判員が二塁手の走塁妨害を認めれば“オブストラクション、”を宣告し、ボールデッドとして、二塁走者を三塁へ、三塁走者を本塁へ進める処置をとる。
541	規則	059	6.01h1【注3】	7.06a注3	オブストラクション	たとえば、走者一塁、打者が左翼線に安打したとき、左翼手は一塁走者の三塁への進塁をはばもうとして三塁へ送球したが、一塁走者は二塁を越えたところでボールを持たない遊撃手と衝突したような場合、審判員が遊撃手の走塁妨害を認めれば、オブストラクションを宣告して、ボールデッドにし、一塁走者に三塁の占有を許す。打者については、審判員がオブストラクション発生時の状況を判断して、二塁へ達したであろうとみれば二塁の占有を許すが、二塁へ進めなかったとみれば一塁にとどめる
542	規則	060	6.01h1【注4】	7.06a注4	オブストラクション	たとえば、走者一塁、打者が一ゴロしたとき、ゴロをとった一塁手は一塁走者をフォースアウトにしようとして二塁へ送球したが、一塁へ向かっている打者と一塁へ入ろうとした投手とが一塁の手前で衝突したような場合、審判員が投手の走塁妨害を認めれば、オブストラクションを宣告して、ボールデッドにする。この際、審判員がオブストラクションよりも二塁でのフォースアウトが後に成立したと判断したときには、打者走者を一塁に、一塁走者を二塁に進める。これに反して、オブストラクションより二塁でのフォースアウトが先に成立していたと判断したときには、打者走者の一塁占有を認めるだけで、一塁走者の二塁でのフォースアウトは取り消さない。
537	規則	055	6.01h1【付記】	7.06a付記	オブストラクション	捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線(ベースライン)は走者の走路であるから、捕手は、まさに送球を捕ろうとしているか、送球が直接捕手に向かってきており、しかも十分近くにきていて、捕手がこれを受け止めるにふさわしい位置を占めなければならないとなったときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。この規定に違反したとみなされる捕手に対しては、審判員は必ずオブストラクションを宣告しなければならない。
543	規則	061	6.01h2	7.06b	オブストラクション	走塁を妨げられた走者に対してプレイが行なわれていなかった場合には、すべてのプレイが終了するまで試合は続けられる。審判員はプレイが終了したのを見届けた後に、初めて“タイム、”を宣告し、必要とあれば、その判断で走塁妨害によってうけた走者の不利益を取り除くように適宜な処置をとる。
544	規則	062	6.01h2【原注】	7.06b原注	オブストラクション	本項規定のようにオブストラクションによってボールデッドとならない場合、走塁を妨げられた走者が、オブストラクションによって与えようと審判員が判断した塁よりも余分に進んだ場合は、オブストラクションによる安全進塁権はなくなり、アウトを賭して進塁したこととなり、触球されればアウトになる。このアウトは、審判員の判断に基づく裁定である。
545	規則	063	6.01h2【注1】	7.06b注1	オブストラクション	たとえば、走者二塁のとき打者が左前安打した。左翼手は本塁をうかがった二塁走者をアウトにしようとして本塁へ送球した打者走者は一塁を越えたところで一塁手にぶつかったので、審判員は“オブストラクション、”のシグナルをした。左翼手の本塁への送球は捕手の頭上を越す悪送球となったので、二塁走者はやすやすと得点することができたオブストラクションを受けた打者走者は、ボールが転じているのを見て二塁を越え、三塁をうかがったところ、ボールを拾った投手からの送球を受けた三塁手に三塁到達前に触球されたような場合、審判員が、打者走者にはオブストラクションによって二塁しか与えることができないと判断したときには、三塁でのアウトは認められる。これに反して、打者走者が三塁手の触球をかいくぐって三塁に生きたような場合、その三塁の占有は認められる。いずれの場合も、二塁走者の得点は認められる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
546	規則	064	6.01h2【注2】	7.06b注2	オブストラクション	たとえば、打者が三塁打と思われるような長打を打ち、一塁を空過した後、二塁を経て三塁に進もうとしたとき、遊撃手に妨げられて、三塁へ進むことができなかったような場合、審判員は、この反則の走塁を考慮することなく、妨害がなければ達したと思われる三塁へ進めるべきである。もし野手が打者の一塁空過を知ってアピールすれば、その打者はアウトになる。走塁の失敗はオブストラクションとはなんら関係がないからである。
530	規則	048	6.01g	7.07	スクイズプレイまたは本盗の妨害	三塁走者が、スクイズプレイまたは盗塁によって得点しようと試みた場合、捕手またはその他の野手がボールを持たないで、本塁の上またはその前方に出るか、あるいは打者または打者のバットに触れたときには、投手にボークを課して、打者はインターフェアによって一塁が与えられる。この際はボールデッドとなる。
531	規則	049	6.01g【注1】	7.07注1	スクイズプレイまたは本盗の妨害	捕手がボールを持たないで本塁の上またはその前方に出るか、あるいは打者または打者のバットに触れた場合は、すべて捕手のインターフェアとなる。特に、捕手がボールを持たないで本塁の上またはその前方に出た場合には、打者がバッタースボックス内にいたかどうか、あるいは打とうとしたかどうかには関係なく、捕手のインターフェアとなる。また、その他の野手の妨害というのは、たとえば、一塁手などが著しく前進して、投手の投球を本塁通過前にカットしてスクイズプレイを妨げる行為などを指す。
532	規則	050	6.01g【注2】	7.07注2	スクイズプレイまたは本盗の妨害	すべての走者は、盗塁行為の有無に関係なく、ボークによって1個の塁が与えられる。
533	規則	051	6.01g【注3】	7.07注3	スクイズプレイまたは本盗の妨害	本項は、投手の投球が正規、不正規にかかわらず適用される。
534	規則	052	6.01g【注4】	7.07注4	スクイズプレイまたは本盗の妨害	投手が投手板を正規に外して走者を刺そうと送球したときには、捕手が本塁上またはその前方に出ることは、正規なプレイであって、打者がこの送球を打てば、かえって打者は守備妨害として処置される。
341	規則	202	5.09b	7.08	走者アウト	次の場合、走者はアウトとなる。
342	規則	203	5.09b1	7.08a1	走者アウト	走者が、野手の触球を避けて、走者のベースパス(走路)から3 <sup>2</sup> / <sub>4</sub> 以上離れて走った場合。ただし、走者が打球を処理している野手を妨げないための行為であれば、この限りではない。この場合の走者のベースパス(走路)とは、タッグプレイが生じたときの、走者と塁を結ぶ直線をいう。
345	規則	206	5.09b2	7.08a2	走者アウト	一塁に触れてすでに走者となったプレーヤーが、ベースパスから離れ、次の塁に進もうとする意思を明らかに放棄した場合。
346	規則	207	5.09b2【原注】	7.08a原注	走者アウト	一塁に触れてすでに走者となったプレーヤーが、もはやプレイは続けられていないと思い込んで、ベースパスを離れてダッグアウトか守備位置の方へ向かったとき、審判員がその行為を走塁する意思を放棄したとみなすことができると判断した場合、その走者はアウトを宣告される。この際、たとえばアウトが宣告されても、他の走者に関しては、ボールインプレイの状態が続けられる。この規則は、次のプレイなどに適用される。 例 --- 0アウトまたは1アウトで、同点の最終回、走者一塁のとき、打者が競技場の外へサヨナラ本塁打を打った。一塁走者は、二塁を過ぎてから、本塁打で自動的に勝利が決まったと思い込み、ダイヤモンドを横切って自分のベンチに向かった。この間、打者は、本塁に向かって進んでいたような場合、走者は、“次塁に進もうとする意思を放棄した。”という理由で、アウトを宣告され、打者走者は各塁を踏んで行って本塁打を生かすことが許される。もし、2アウト後ならば、本塁打は認められない(5.09d参照)。これはアピールプレイではない。 例 --- 走者が一塁または三塁で触球されてアウトを宣告されたと思い込んでダッグアウトに向かいだし、依然としてアウトだと思い込んでいる様子が明らかだと審判員が認めるのに適当な距離まで進んでいるときには、走者は進塁を放棄したという理由でアウトを宣告される。
343	規則	204	5.09b1【注1】	7.08a注1	走者アウト	通常走者の走路とみなされる場所は、塁間を結ぶ直線を中心として左右へ各3 <sup>2</sup> / <sub>4</sub> 、すなわち6 <sup>2</sup> / <sub>4</sub> の幅の地帯を指すが、走者が大きく膨らんで走っているときなど最初からこの走路外にいたときに触球プレイが生じた場合は、その走者と塁を結ぶ直線を中心として左右へ各3 <sup>2</sup> / <sub>4</sub> が、その走者の走路となる
344	規則	205	5.09b1【注2】	7.08a注2	走者アウト	本項の“ただし、以下は、野手が走者の走路内で打球を処理しているとき、これを妨げないために走者が走路外を走っても、アウトにならないことを規定しているものであって、打球処理後に触球プレイが生じたときには、本項前段の適用を受けることはもちろんである。
347	規則	208	5.09b2【注】	7.08a注3	走者アウト	フォースの状態におかれている走者に対しては、本項を適用しない。
348	規則	209	5.09b3	7.08b	走者アウト	走者が、送球を故意に妨げた場合、または打球を処理しようとしている野手の妨げになった場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
350	規則	211	5.09b3【注1】	7.08b注1	走者アウト	“野手が打球を処理する、とは、野手が打球に対して守備しはじめてから打球をつかんで送球し終わるまでの行為をいう。したがって、走者が、前記のどの守備行為でも妨害すれば、打球を処理しようとしている野手を妨げたことになる。
351	規則	212	5.09b3【注2】	7.08b注2	走者アウト	走者が5.09(a)(II)、5・09(b)(1)項規定の走路を走っていた場合でも、打球を処理しようとしている野手の妨げになったと審判員が判断したときには、本項の適用を受けて、走者はアウトになる。
509	規則	027	6.01a11【原注1】	7.08b原注1	打者または走者の妨害1	打球(フェアボールとファウルボールとの区別なく)を処理しようとしている野手の妨げになったと審判員によって認められた走者は、それが故意であったか故意でなかったかの区別なく、アウトになる。 しかし、正規に占有を許された塁にいた走者が、フェア地域とファウル地域との区別なく守備の妨げになった場合、審判員がその妨害を故意と判断したときを除いて、その走者はアウトにはならない。審判員が、その妨害を故意と宣告した場合には次のペナルティを科す。 0アウトまたは1アウトのときは、その走者と打者ともにアウトを、2アウト後のときは、打者にアウトを宣告する。
511	規則	029	6.01a11【原注1】【答】	7.08b原注1答	打者または走者の妨害	その走者が故意に守備を妨げたと審判員が認めればその走者と打者にアウトを宣告する。
510	規則	028	6.01a11【原注1】【問】	7.08b原注1問	打者または走者の妨害	1アウト走者三塁のとき、三塁に触れている走者が、三塁横に上がったファウルフライを捕らえようとする三塁手の守備の妨げになったので、三塁手は捕球できなかった。いかに処置すべきか
512	規則	030	6.01a11【原注2】	7.08b原注2	打者または走者の妨害	三塁本塁間で挟撃された走者が妨害によってアウトを宣告された場合には、後位の走者はその妨害行為発生以前に、たとえ三塁を占めることがあっても、その占有は許されず二塁に帰らなければならない。また、二塁三塁間で挟撃された走者が妨害によってアウトになった場合も同様、後位の走者は一塁に帰らなければならない。妨害が発生した場合にはいずれの走者も進塁できないこと、および走者は正規に次塁に進塁するまでは元の塁を占有しているものとみなされることがその理由である。
513	規則	031	6.01a11【注】	7.08b原注2注	打者または走者の妨害	走者一・三塁のとき三塁走者が三塁本塁間で挟撃され、妨害によってアウトを宣告された場合、一塁走者がその妨害行為発生以前に二塁を占めておれば、一塁走者には二塁の占有が許される。
352	規則	213	5.09b4	7.08c	走者アウト	ボールインプレイで走者が塁を離れているときに触球された場合。
356	規則	217	5.09b4【注1】	7.08c注1	走者アウト	四球を得た打者が一塁に進むに際しては、ただちに帰ることを条件としてなら、一塁に触れた後、走り越すことは許される。
357	規則	218	5.09b4【注2】	7.08c注2	走者アウト	野手が走者に触球しようとするときには、走者もアウトを免れようと、激しく触塁する機会が多く、野手と走者とが衝突した結果、野手がボールを落としたときは、触球後にボールを確実に保持していないことになるから、走者はアウトにはならない。また、野手が走者に触球した後も、これを確実に握っていなければならず、たとえボールを地上に落とさなくても、手の上でジャググルなどした場合には、走者はアウトにはならない。野手が触球した後、どのくらい確保すればよいかは、一に審判員の判定に待つべきである。(定義15参照)
353	規則	214	5.09b4【例外】	7.08c付記1	走者アウト	打者走者が一塁に走るときは、ただちに帰ることを条件としてならば、オーバーランまたはオーバースライドして一塁を離れているとき触球されても、アウトにはならない。
354	規則	215	5.09b4【規則説明A】	7.08c付記2	走者アウト	走者がいったん安全に塁に達した後、走者の衝撃で塁のバッグが定位置から離れたときは、その走者に対していかなるプレイもできない。
355	規則	216	5.09b4【規則説明B】	7.08c付記3	走者アウト	あるプレイ中に塁のバッグまたはホームプレートが定位置から離れたとき、引き続いて、次の走者が進塁してきて、元の塁が置かれていた地点に触れるか、またはその地点にとどまれば、その走者は正規に塁に触れたもの、または正規に塁を占有したものとみなされる。
358	規則	219	5.09b5	7.08d	走者アウト	フェア飛球、ファウル飛球が正規に捕らえられた後、走者が帰塁するまでに、野手に身体またはその塁に触球された場合。 ただし、投手が打者へ次の1球を投じてしまうか、または、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企ててしまえば、帰塁をしていないという理由によって走者がアウトにされることはない。この場合は、アピールプレイである。
359	規則	220	5.09b5【原注】	7.08d原注	走者アウト	走者は、ファウルチップの際はタッグアップする必要はないから、盗塁することもできる。しかし、チップしたボールを捕手が捕らえなかった場合は、ファウルボールとなるから、走者は元の塁へ戻らなければならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
360	規則	221	5.09b5【注】	7.08d注	走者アウト	飛球が捕らえられたとき、走者が帰塁しなければならない塁とは、進塁の起点となる塁、すなわち、投手の投球当時走者が占有していた塁を指す。
361	規則	222	5.09b6	7.08e	走者アウト	打者が走者となったために、進塁の義務が生じた走者が次の塁に触れる前に、野手はその走者またはその塁に触球した場合。(このアウトはフォースアウトである) ただし、後位の走者がフォースプレイで先にアウトになれば、フォースの状態でなくなり、前位の走者には進塁の義務がなくなるから、身体に触球されなければアウトにはならない。 また、走者が塁に触れた後、余勢でオーバースライドまたはオーバーランした場合には、塁に触れた瞬間に進塁の義務を果たしたことになるから、その走者は身体に触球されなければアウトにはならない。(このアウトはフォースアウトではなく、タッグアウトである) しかし、進塁の義務が生じた走者が次塁に触れた後、どのような理由にせよ、その塁を捨てて元の塁の方へ離れた場合は、再びフォースの状態におかれるから、野手にその身体または進塁すべき塁に触球されれば、その走者はアウトとなる。(このアウトはフォースアウトである)
362	規則	223	5.09b6【原注】	7.08e原注	走者アウト	オーバースライド、またはオーバーランは二塁および三塁で起こり、一塁ではこの状態は起こらない。 たとえば、0アウトまたは1アウトで走者一・二塁、もしくは一・二・三塁とする。 打球は内野手に飛び、その内野手はダブルプレイを試みた。一塁走者は二塁への送球より早く二塁に触れたが、オーバースライドした。ボールは一塁にリレーされ、打者はアウトになった。一塁手は、二塁走者が離塁しているのを見て二塁に送球して、その走者をアウトにしたが、その間に、他の走者は本塁に入った。 [問]これはフォースプレイヤーか。打者が一塁でアウトになったとき、フォースプレイでなくなったのか。このプレイ中に、二塁で走者がアウトにされて第3アウトになる前に、本塁に入っていた走者の得点は認められるか。 [答]フォースプレイではなく、タッグプレイであるから、得点は記録される。
363	規則	224	5.09b6【注1】	7.08e注1	走者アウト	本項は、フォースアウトの規定であり、打者が走者となったために、塁にいた走者に進塁の義務が生じたときに、野手が、 ① その走者が次の塁に触れる前に、その塁に触球した場合 ② その走者が次の塁に触れる前に、その走者に触球した場合 ③ その走者が次の塁へ進もうとしないで、元の塁にとどまっているとき、その走者に触球した場合 を指し、特に3の場合は、自己より後位の走者がアウトにならない限り、その塁の占有権はずでに失われているから、たとえその走者が塁に触れていても、野手はその走者に触球すればアウトになる。(5.06b2参照)
364	規則	225	5.09b6【注2】	7.08e注2	走者アウト	たとえば、一塁走者が打球とともに走り出して、いったん二塁に触れた後、その打球が飛球として捕らえられようとするのを見て、一塁へ戻ろうとしたとき、フライを落とした野手からの送球を受けた二塁手は、走者が再び二塁に達するまでに二塁に触球した。この場合、はじめに二塁を踏んだことは取り消され、フォースアウトと認められる。
365	規則	226	5.09b7	7.08f	走者アウト	走者が、内野手(投手を含む)に触れていないか、または内野手(投手を除く)を通過していないフェアボールに、フェア地域で触れた場合。 この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。(5.06c6、6.01a1参照) インフィールドフライと宣告された打球が、塁を離れている走者に触れたときは、打者、走者ともにアウトになる。
367	規則	228	5.09b7【原注】	7.08f原注	走者アウト	2人の走者が同一のフェアボールに触れたときは、最初に触れた1人だけがアウトになる。これは打球が走者に触れたとき、ただちにボールデッドとなるからである。
368	規則	229	5.09b7【注1】	7.08f注1	走者アウト	打者の打ったフェアボールが、野手に触れる前に走者に触れたときは、走者が守備を妨害しようとして故意に打球に触れた場合(併殺を行なわせまいとして故意に打球を妨害した場合を除く)と、走塁中やむなく触れた場合との区別なく、走者はアウトとなる。 また、いったん内野手に触れた打球に対して守備しようとする野手を走者が妨げたときには、5.09(b)(3)によってアウトにされる場合もある。
369	規則	230	5.09b7【注2】①	7.08f注2	走者アウト	① 内野手を通過する前に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がフェア地域で触れた場合、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。 ② 内野手を通過した直後に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がその内野手の直後のフェア地域で触れた場合、この打球に対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかった場合に限り、打球に触れたという理由でアウトにはならない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
370	規則	231	5.09b7【注3】	7.08f注3	走者アウト	一度塁に触れて反転したフェアボールが、ファウル地域で走者に触れた場合は、その走者はアウトにはならず、ボールインプレイである。
371	規則	232	5.09b7【注4】	7.08f注4	走者アウト	本項でいう“塁”とは、飛球が打たれたときの投手の投球当時に走者が占有していた塁をいう。
372	規則	233	5.09b7【注5】	7.08f注5	走者アウト	インフィールドフライと宣告された打球が走者に触れた場合は、その走者が塁についていなくても、ボールデッドとなる。
366	規則	227	5.09b7【例外】	7.08f例外	走者アウト	インフィールドフライと宣告された打球が、塁についている走者に触れた場合、その走者はアウトにならず、打者だけがアウトとなる。
373	規則	234	5.09b8	7.08g	走者アウト	0アウトまたは1アウトで、走者が得点しようとしたとき、打者が本塁における守備側のプレイを妨げた場合。2アウトであればインターフェアで打者がアウトとなり、得点は記録されない。(6.01a1・3、6.03a3参照)
374	規則	235	5.09b8【注1】	7.08g注1	走者アウト	ここにいう“本塁における守備側のプレイ”とは、野手(捕手も含む)が、得点しようとした走者に触球しようとするプレイ、その走者を追いかけて触球しようとするプレイ、および他の野手に送球してその走者をアウトにしようとするプレイを指す。
375	規則	236	5.09b8【注2】	7.08g注2	走者アウト	この規定は、0アウトまたは1アウトで、走者が得点しようとした際、本塁における野手のプレイを妨げたときの規定であって、走者が本塁に向かってスタートを切っただけの場合とか、一度本塁へは向かったが途中から引き返そうとしている場合には、打者が捕手を妨げることがあっても、本項は適用されない。 たとえば、捕手がボールを捕らえて走者に触球しようとするプレイを妨げたり、投手が投手板を正規に外して、走者をアウトにしようとして送ったボール(投球でないボール)を打者が打ったりして、本塁の守備を妨げた場合には、妨害行為を行なった打者をアウトにしないで、守備の対象である走者をアウトにする規定である。
376	規則	237	5.09b8【注3】	7.08g注3	走者アウト	本項は、本塁の守備を妨げたのが打者であった場合に限って適用されるのであって、打撃を完了して打者から走者になったばかりで、まだアウトにならない打者が妨害を行なったときには適用されない。たとえば、スクイズバントをした打者が、バントした打球に触れるか、または打球を処理しようとする野手の守備を妨げたために、三塁走者が本塁でのアウトを免れることになったような場合には、打者はすでに走者となっているから、5.09(a)(7)、5.09(b)(3)によって、その打者走者がアウトとなり、ボールデッドとなって、三塁走者を投手の投球当時すでに占有していた塁、すなわち三塁へ帰らせる。 打者が第3ストライクの宣告を受けただけで、まだアウトにならないとき、および四球の宣告を受けたときの妨害に関しては、6.01(a)(1)【注】に示されている。
377	規則	238	5.09b9	7.08h	走者アウト	後位の走者がアウトとなっていない前位の走者に先んじた場合。(後位の走者がアウトとなる)
378	規則	239	5.09b9【注1】	7.08h注1	走者アウト	ボールインプレイ中に起きた行為(たとえば、悪送球、ホームランまたは柵外に出たフェアヒットなど)の結果、走者に安全進塁権が認められた場合にも、本項は適用される。
379	規則	240	5.09b9【注2】	7.08h注2	走者アウト	本項は、走者の位置が入れ代わったときに、後位の走者をアウトにすることを意味し、たとえば、二塁の走者を甲、一塁の走者を乙とすれば、一塁走者乙が二塁走者甲を追い越したときはもちろん、逆走の際など、二塁走者甲が一塁走者乙を追い越す形をとって、本来本塁から遠くにあるべき乙と、近くにあるべき甲との位置が入れ代わった場合でも、常に後位の乙がアウトになることを規定している。
380	規則	241	5.09b10	7.08i	走者アウト	走者が正規に塁を占有した後に塁を逆走したときに、守備を混乱させる意図、あるいは試合を愚弄する意図が明らかであった場合。 この際、審判員はただちにタイムを宣告して、その走者にアウトを宣告する。
381	規則	242	5.09b10【原注】	7.08i原注	走者アウト	走者がまだ占有していない塁に到達した後、飛球が捕らえられたと思ったり、元の占有塁に帰るようにおびき出されて元の塁に帰ろうとした場合、途中で触球されればアウトになる。しかし、元の占有塁に降りついたら、その塁についている限り、触球されてもアウトにはならない。
382	規則	243	5.09b10【注】	7.08i注	走者アウト	たとえば、一ゴロを打った打者が一塁手の触球を避けようとして、側方に離れて走らない限り、逆走するようなことはさしつかえないが、本塁に達するとアウトになる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
383	規則	244	5.09b11	7.08j	走者アウト	走者が一塁をオーバーランまたはオーバースライドした後、ただちに一塁に帰塁しなかった場合。一塁をオーバーランまたはオーバースライドした走者が二塁へ進むとする行為を示せば、触球されればアウトとなる。また、一塁をオーバーランまたはオーバースライドした走者が、ただちに帰塁しないでダッグアウトまたは自己の守備位置に行こうとした場合も、野手が走者または塁に触球して、アピールすればアウトとなる。
384	規則	245	5.09b11【原注】	7.08j原注	走者アウト	2アウト後、一塁に触れてオーバーランしたが、審判員によって“セーフ”の宣告を受けた打者走者は、5.08(a)を適用する上では“一塁に達した”ことになり、“ただちに、一塁に帰塁しなかったために第3アウトになっても、このプレイ中にアウトよりも先に本塁に達していた走者は、得点として認められる。
385	規則	246	5.09b12	7.08k	走者アウト	走者が本塁に走り込むか、または滑り込んだ際に、本塁に触れないで、しかも本塁に触れ直そうとしないときに、野手がボールを持って本塁に触れて、審判員にアピールした場合。(5.09c4参照)
386	規則	247	5.09b12【原注】	7.08k原注	走者アウト	本項は、本塁に触れなかった走者がベンチに向かっており、アウトにするためには捕手はその走者を追いかけなければならないような場合に適用される。本塁を踏み損ねた走者が、触球される前に踏み直そうと努力しているような普通のプレイが行なわれているときには適用されない。この場合には、走者は触球されなければアウトにはならない。
387	規則	248	5.09b13	7.08l	走者アウト	走者を除く攻撃側チームのメンバーが、ある走者に対して行なわれた送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合。(6.0lb参照。走者による妨害については5.09b3参照)
485	規則	003	6.01a	7.09	打者または走者の妨害	打者または走者の妨害 次の場合は、打者または走者によるインターフェアとなる。
486	規則	004	6.01a1	7.09a	打者または走者の妨害	第3ストライクの後、打者走者が投球を処理しようとしている捕手を明らかに妨げた場合。打者走者はアウトになり、ボールデッドとなって、他の走者は投手の投球当時占有していた塁に戻る。
487	規則	005	6.01a1【原注】	7.09a原注	打者または走者の妨害	投球が、捕手または審判員に触れて進路が変わり、その後に打者走者に触れた場合は、打者走者が投球を処理しようとしている捕手を明らかに妨げたと審判員が判断しない限り、妨害とはみなされない。
488	規則	006	6.01a1【注】①	7.09a注①	打者または走者の妨害	第3ストライクの宣告を受けただけでまだアウトになっていないか、または四球の宣告を受けて一塁へ進むべき打者走者が、三塁からの走者に対する捕手の守備動作を明らかに妨害した場合は、その打者走者をアウトとし、三塁からの走者は、投手の投球当時占有していた三塁へ帰らせる。その他の各走者も、同様に帰塁させる。
489	規則	007	6.01a1【注】②	7.09a注②	打者または走者の妨害	第3ストライクの宣告を受けて5.09(a)(2)または同(3)でアウトになった打者が、三塁走者に対する捕手の守備動作を明らかに妨害したときは、6.01(a)(5)によって三塁から走ってきた走者もアウトにする。
490	規則	008	6.01a1【注】③	7.09a注③	打者または走者の妨害	②の場合で、重盗を防ごうとする捕手の守備動作を明らかに妨害したときは、その対象となった走者をアウトとして、他の走者は妨害発生の瞬間にすでに占有していた塁へ帰らせる。もしも、捕手の守備動作がどの走者に対してなされたかが明らかでない場合には、本塁に近い走者をアウトにする。(6.01a5【注】参照)
491	規則	009	6.01a2	7.09b	打者または走者の妨害	打者または走者が、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも、故意に狂わせた場合。(5.09a9参照)
492	規則	010	6.01a3	7.09c	打者または走者の妨害	0アウトまたは1アウトで、走者三塁のとき、打者が本塁における野手のプレイを妨げた場合。この場合、走者がアウトになるが、2アウト後の場合は打者がアウトになる。(5.09b8、6.03a3参照)
493	規則	011	6.01a3【注】	7.09c注	打者または走者の妨害	本項は、5.09(b)(8)と異なる文字を用いているにすぎないから、ただ離塁しているにすぎない三塁走者をアウトにしようとする捕手のプレイを打者が妨げた場合などには、適用されない。
494	規則	012	6.01a4	7.09d	打者または走者の妨害	1人または2人以上の攻撃側メンバーが、走者が達しようとする塁に接近して立つか、あるいは、その塁の付近に集合して守備側を妨げるか、惑乱させるか、ことさらに守備を困難にした場合、その走者は、味方のメンバーが相手の守備を妨害(インターフェア)したもとしてアウトを宣告される。
495	規則	013	6.01a5	7.09e	打者または走者の妨害	アウトになったばかりの打者または走者、あるいは得点したばかりの走者が、味方の走者に対する野手の次の行動を阻止するか、あるいは妨げた場合は、その走者は、味方のプレーヤーが相手の守備を妨害(インターフェア)したもとして、アウトを宣告される。(5.09a13参照)



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
496	規則	014	6.01a5【原注】	7.09e原注	打者または走者の妨害	打者または走者が、アウトになった後走り続けてもその行為だけでは、野手を惑乱したり、邪魔したり、またはさえぎったものとはみなされない。
497	規則	015	6.01a5【注】	7.09e注	打者または走者の妨害1	本項を適用するにあたって、2人または3人の走者がいる場合、妨げられた守備動作が直接1人の走者に対して行なわれようとしていたことが判明しているときは、その走者をアウトにし、どの走者に対して守備が行なわれようとしていたか判定しにくいときは、本塁に最も近い走者をアウトにする。前掲によって1人の走者に対してアウトを宣告したときは、ボールデッドとなり、他の走者は守備妨害の行なわれた瞬間すでに占有していた塁に帰らせる。 ただし、打球を直接処理した野手が打者走者に対して守備を行なわず、他の走者に対して行なおうとした守備が妨害された場合には、その走者をアウトにし、その他の走者は、投手の投球当時占有していた塁へ戻らせる。しかし打者走者だけは、再びバッタースボックスに帰せないから、一塁の占有を許す。 なお、打者が走者となって一塁へ進んだために、走者に一塁を明け渡す義務が生じたときは、その走者を二塁へ進ませるといえば、0アウト満塁のとき、打者が遊ゴロして、三塁からの走者がフォースアウトされ、その際、その走者が、捕手がさらに三塁にボールを送ってダブルプレイを企てようとするのを、突きとばして妨害したような場合、その走者と三塁に向かった走者とはアウトになるが、打者に一塁が与えられるので、一塁の走者は二塁に進むことが許されるような場合がそれである。
498	規則	016	6.01a6	7.09f	打者または走者の妨害	走者が、明らかに併殺を行なわせまいとして故意に打球を妨げるか、または打球を処理している野手を妨害したと審判員が判断したとき、審判員は、その妨害をした走者にアウトを宣告するとともに、味方のプレーヤーが相手の守備を妨害したのもとして打者走者に対してもアウトを宣告する。この場合、ボールデッドとなって他の走者は進塁することも得点することもできない。
499	規則	017	6.01a7	7.09g	打者または走者の妨害	打者走者が、明らかに併殺を行なわせまいとして故意に打球を妨げるか、または打球を処理している野手を妨害したと審判員が判断したとき、審判員は打者走者に妨害によるアウトを宣告するとともに、どこで併殺が行なわれようとしていたかには関係なく、本塁に最も近い走者に対してもアウトを宣告する。この場合、ボールデッドとなって他の走者は進塁することはできない。
500	規則	018	6.01a8	7.09h	打者または走者の妨害	三塁または一塁のベースコーチが、走者に触れるか、または支えるかして、走者の三塁または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁を、肉体的に援助したと審判員が認めた場合。
501	規則	019	6.01a9	7.09i	打者または走者の妨害	走者三塁のとき、ベースコーチが自己のボックスを離れて、なんらかの動作で野手の送球を誘発した場合。
502	規則	020	6.01a10	7.09j	打者または走者の妨害	走者が打球を処理しようとしている野手を避けなかったか、あるいは送球を故意に妨げた場合。 ただし、2人以上の野手が接近して、打球を処理しようとしており、走者がそのうち1人か2人以上の野手に接触したときには、審判員は、それらの野手のうちから、本項の適用を受けるのに最もふさわしい位置にあった野手を1人決定して、その野手に触れた場合に限ってアウトを宣告する。(5.09b3参照)
503	規則	021	6.01a10【原注】新	7.09j原注	打者または走者の妨害	捕手が打球を処理しようとしているときに、捕手と一塁へ向かう打者走者とが接触した場合は、守備妨害も走塁妨害もなかったものとみなされて、何も宣告されない。打球を処理しようとしている野手による走塁妨害は、非常に悪質で乱暴な場合にだけ宣告されるべきである。たとえば、打球を処理しようとしているからといって、走者を故意につまずかせるようなことをすれば、オブストラクションが宣告される。 捕手が打球を処理しようとしているのに、《他の野手(投手を含む)》が、一塁へ向かう打者走者を妨害したらオブストラクションが宣告されるべきで、打者走者には一塁が与えられる。
504	規則	022	6.01a11	7.09k	打者または走者の妨害	野手(投手を含む)に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合。 ただし、走者がフェアボールに触れても、 (A) いったん内野手(投手を含む)に触れたフェアボールに触れた場合 (B) 1人の内野手(投手を除く)に触れないでその股間または側方を通過したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がない場合には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。 しかし、内野手が守備する機会を失った打球(内野手に触れたかどうかを問わない)でも、走者が故意にその打球をけったと審判員が認めれば、その走者は、妨害(インターフェア)をしたという理由でアウトの宣告を受けなければならない。(5.06c6、5.09b7参照)
349	規則	210	5.09b3ペナルティ	7.09インターフェアに対するペナルティ	走者アウト	走者はアウトとなり、ボールデッドとなる。〔6.01a妨害に対するペナルティ〕参照。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
505	規則	023	6.01a11ペナルティ	7.09インターフェアに対するペナルティ	打者または走者の妨害	走者はアウトとなり、ボールデッドとなる。
388	規則	249	5.09c	7.10	アピールプレイ	次の場合、アピールがあれば、走者はアウトとなる。
389	規則	250	5.09c1	7.10a	アピールプレイ	飛球が捕らえられた後、走者が再度の触塁(リタッチ)を果たす前に、身体あるいはその塁に触球された場合。
390	規則	251	5.09c1【原注】	7.10a原注	アピールプレイ	ここでいう「リタッチ」とは、捕球後、塁に触れた状態から次塁へスタートすることをいう。したがって、塁の後方からスタートして、走りながら塁に触れて次塁へ進もうとするいわゆるフライングスタートは、正規なリタッチの方法ではない。
391	規則	252	5.09c2	7.10b	アピールプレイ	ボールインプレイのとき、走者が進塁または逆走に際して各塁に触れ損ねたとき、その塁を踏み直す前に、身体あるいは触れ損ねた塁に触球された場合。(5.06bl参照)
393	規則	254	5.09c2【原注】	7.10b原注	アピールプレイ	例 --- 打者が競技場の外へ本塁打を打つか、スタンドに入る二塁打を打って、一塁を空過した(ボールデッド)。打者は二塁に触れる前ならば、誤りを正すために一塁に帰ることはできる。しかし、二塁に触れてしまうと、一塁に戻ることはできない。守備側がアピールすれば、一塁でアウトが宣告される。 例 --- 打者が遊撃手にゴロを打ち、遊撃手はスタンドに飛び込む悪送球をした(ボールデッド)。打者は一塁を空過したが、悪送球によって二塁が与えられた。打者走者は、審判員によって二塁が与えられても、二塁に進む前に一塁に触れなければならない。いずれもアピールプレイである。
394	規則	255	5.09c2【注1】	7.10b注1	アピールプレイ	本項〔規則説明〕(A)は、ボールインプレイとボールデッドとを問わず適用される。
395	規則	256	5.09c2【注2】	7.10b注2	アピールプレイ	本項〔規則説明〕の場合、塁を空過した走者は、アピールがなければアウトにはならない。
396	規則	257	5.09c2【注3】	7.10b注3	アピールプレイ	本塁を空過した走者は、ボールデッドのもとでは、投手が新しいボールか、元のボールを持って正規に投手板に位置すれば、本塁を踏み直すことは許されない。
397	規則	258	5.09c2【注4】	7.10b注4	アピールプレイ	本項〔規則説明〕は、飛球が捕らえられたときのリタッチが早かった走者にも適用される。
392	規則	253	5.09c2【規則説明】	7.10b付記	アピールプレイ	塁を空過した走者は、 (A) 後位の走者が得点してしまえば、その空過した塁を踏み直すことは許されない。 (B) ボールデッドのもとでは、空過した塁の次の塁に達すれば、その空過した塁を踏み直すことは許されない。
398	規則	259	5.09c3	7.10c	アピールプレイ	走者が一塁をオーバーランまたはオーバースライドした後、ただちに帰塁しないとき、身体または塁に触球された場合。(5.09bll参照)
399	規則	260	5.09c4	7.10d	アピールプレイ	走者が本塁に触れず、しかも本塁に触れ直そうとしないとき、本塁に触球された場合。(5.09b12参照)
401	規則	262	【5.09c原注】	7.10原注	アピールプレイ	アピールするときに、投手がボークをした場合には、その消滅の基準となるプレイとみなされる。アピールは言葉で表現されるか、審判員にアピールとわかる動作によって、その意図が明らかにされなければならない。プレーヤーがボールを手にして塁に何げなく立っても、アピールをしたことにはならない。アピールが行なわれているときは、ボールデッドではない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
400	規則	261	5.09c	7.10後段	アピールプレイ	本項規定のアピールは、投手が打者へ次の1球を投じるまで、または、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てるまでに行なわなければならない。 イニングの表または裏が終わったときのアピールは、守備側チームのプレーヤーが競技場を去るまでに行なわなければならない。 アピールは、その消滅の基準となるプレイまたはプレイの企てとはみなさない。 投手がアピールのために塁に送球し、スタンドの中などボールデッドの個所にボールを投げ込んだ場合には、同一走者に対して、同一塁についてのアピールを再びすることは許されない。 第3アウトが成立した後、ほかにアピールがあり、審判員が、そのアピールを支持した場合には、そのアピールアウトが、そのイニングにおける第3アウトとなる。 また、第3アウトがアピールによって成立した後でも、守備側チームは、このアウトよりもほかに有利なアピールプレイがあれば、その有利となるアピールアウトを選んで、先の第3アウトと置きかえることができる。 “守備側チームのプレーヤーが競技場を去る、とあるのは、投手および内野手が、ベンチまたはクラブハウスに向かうために、フェア地域を離れたことを意味する。
406	規則	267	5.09c【答】	7.10答	アピールプレイ	ダブルプレイではない。その走者が一塁に帰るためには二塁を通る必要があるからといって、二塁に触球してもアウトにはできない。その走者に触球するか、または進塁の起点となる塁、すなわち一塁に触球しなければ、アウトにはできない。
408	規則	269	5.09c【答】	7.10答	アピールプレイ	走者に触球するか、二塁または一塁に触球してアピールすればよい。
410	規則	271	5.09c【答】	7.10答	アピールプレイ	得点は認められる。しかし守備側が最初から一塁でアピールしておれば、得点は認められない。また二塁から一塁に転送球して再びアピールすれば、一塁でのアピールアウトを、先の第3アウトと置きかえることができるから、得点とはならない。
412	規則	273	5.09c【答】	7.10答	アピールプレイ	守備側が二塁でアピールしない限り、二塁走者の得点は認められる。しかし、守備側は、アピールによる第3アウトの成立後であっても、このアウトよりも有利となるアピールアウトを先の第3アウトと置きかえることができるから、二塁でアピールすれば、リタッチを果たしていない二塁走者はアウトになり、得点とはならない。
402	規則	263	5.09c【注1】	7.10注1	アピールプレイ	アピール権消滅の基準となるプレイには、投手のプレイはもちろん、野手のプレイも含まれる。たとえば打者がワンバウンドで外野席に入る安打を放って二塁に達したが、途中一塁を空過していた。プレイ再開後、投手が一塁へアピールのために送球したところ、悪送球となって、プレイングフィールド内を転々とした。これを拾った一塁手が一塁でアピールをすることはできるが、二塁走者がその悪送球を利用して三塁へ走ったのを見て三塁へ送球してしまえば、一塁でのアピール権は消滅する。
403	規則	264	5.09c【注2】	7.10注2	アピールプレイ	攻守交代の場合と試合終了の場合との区別なく、いずれの場合でも投手および内野手が、フェア地域を離れたときに、アピール権が消滅することとする。 アマチュア野球では、試合終了の場合に限って、両チームが本塁に整列したとき、アピール権は消滅することとする
404	規則	265	5.09c【注3】	7.10注3	アピールプレイ	アピールするには、言葉と動作とで、はっきりとその旨を表示しなければならない。 なお、ある一つの塁を2人以上の走者が通過した際、その塁の空過を発見してアピールするには、どの走者に対するアピールであるかを明示しなければならない。たとえば、甲、乙、丙の3人の走者が、三塁を通過し、乙が三塁を踏まなかったときは、乙に対するアピールである旨を明示しなければならないが、もしこのとき甲が空過したと誤って申し出て、審判員に認められなかった場合でも、その塁を通過した走者の数までは、アピールを繰り返して行なうことができる。
405	規則	266	5.09c【問】	7.10問	アピールプレイ	1アウト走者一・三塁のとき、打者は外野に大飛球を打ったので、2人の走者はともに進塁しはじめたが、外野手はこの飛球を好捕した離塁の少なかつた三塁走者は三塁へ帰って捕球後あらためて本塁へ入った。一塁走者は二塁に触れた後に三塁近くまで行ったが、一塁に帰ろうと逆走しはじめたので、外野手は二塁に送球、二塁手は一塁走者が二塁に触れる前に、塁上でボールを持ってアピールした。ダブルプレイか
407	規則	268	5.09c【問】	7.10問	アピールプレイ	1アウト走者一塁のとき、打者が外野へ大飛球を打ち、走者が二塁を回って三塁近くまで行ったとき、飛球が捕らえられたので、二塁に触れないで一塁へ帰ろうとした。どんな方法でアピールすれば走者をアウトにできるか。
409	規則	270	5.09c【問】	7.10問	アピールプレイ	2アウト走者二塁のとき、打者が三塁打を打ち、走者を得点させたが、打者は一塁も二塁も踏まなかった。守備側は二塁に触球してアピールし、アウトが宣告された。得点となるか。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
411	規則	272	5.09c【問】	7.10問	アピールプレイ	1アウト走者一・二塁、打者が右翼へ大飛球を打ったとき、安打になると思った2人の走者は、フライが飛んでいる間進塁し続け、右翼手がこれを捕らえたにもかかわらず、二塁走者はそのまま本塁を踏んだ。しかし一塁走者は捕球されたのを見て一塁に引き返そうとした。右翼手は一塁へ送球、一塁手は一塁走者が帰塁するより先に、塁に触球して、アウトにした。二塁走者は、一塁走者が一塁でアウトになるより先に、本塁を踏んでいるが、その得点は認められるか。
514	規則	032	6.01b	7.11	守備側の権利優先	守備側の権利優先
515	規則	033	6.01b	7.11	守備側の権利優先	攻撃側チームのプレーヤー、ベースコーチまたはその他のメンバーは、打球あるいは送球を処理しようとしている野手の守備を妨げないように、必要に応じて自己の占めている場所(ダッグアウト内またはブルペンを含む)を譲らなければならない。 走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、打者はアウトとなり、すべての走者は投球時に占有していた塁に戻る。 走者を除く攻撃側チームのメンバーが、送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、そのプレイの対象であった走者はアウトとなり、他のすべての走者は妨害発生の瞬間に占有していた塁に戻る。
517	規則	035	6.01b【注1】	7.11注1	守備側の権利優先	たとえば、プレーヤーが2本のバットを持って次打者席に入っていたとき、打者がファウル飛球を打ち、これを捕手が追ってきたので、そのプレーヤーは1本のバットを持って場所を譲ったが、捕手は取り残されたバットにつまずいたために、容易に捕らえることができたはずのファウル飛球を捕らえることができなかったような場合、プレーヤーの取り残したバットが、明らかに捕手の捕球を妨げたと審判員が判断すれば、打者はアウトになる。
518	規則	036	6.01b【注2】	7.11注2	守備側の権利優先	例――打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。 一塁ベースコーチは送球に当たるのを避けようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁にまで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。
413	規則	274	5.09d	7.12	前位走者の触塁失敗	0アウトまたは1アウトのとき、前位の走者が、ある塁に触れ損ねるか、リタッチを果たさなかったとしても、正しく各塁に触れて進んだ後位の走者は、前位の走者の責を負ってその正しい走塁を取り消されることはない。 ただし、2アウト後、前位の走者がアピールによって3人目のアウトとなったときには、復位の走者が正規に本塁に触れていても、その走者の得点は認められない。また、その第3アウトがフォースアウトの形をとったときには、他のすべての走者が正規に本塁に触れていても、その得点は認められない。
268	規則	129	5.07	8.00	投手	
269	規則	130	5.07a	8.01	正規の投球姿勢	投球姿勢にはwindアップポジションと、セットポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも随時用いることができる。 投手は、投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。
271	規則	132	5.07a1	8.01a	windアップポジション	投手は、打者に面して立ち、その軸足は投手板に触れて置き、他の足の置き場所には制限がない。 この姿勢から、投手は、 ① 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。 ② 実際に投球するときを除いて、どちらの足も地面から上げてはならない。ただし、実際に投球するときは、自由な足(軸足でない足)を1歩後方に引き、さらに1歩前方に踏み出すこともできる。 投手が軸足を投手板に触れて置き(他の足はフリー)、ボールを両手で身体の前方に保持すれば、windアップポジションをとったものとみなされる。
272	規則	133	5.07a1【原注1】	8.01a原注1	windアップポジション	windアップポジションにおいては、投手は軸足でない足(自由な足)を投手板の上か、前方か、後方かまたは側方に置くことが許される。
273	規則	134	5.07a1【原注2】	8.01a原注2	windアップポジション	(1)項の姿勢から、投手は、 ① 打者に投球してもよい。 ② 走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球してもよい。 ③ 投手板を外してもよい(ボールを両手で保持した投手は、投手板を外したら必ず両手を身体の内側に下ろさなければならない)。投手板を外すときには、最初に軸足から外さなければならない。 また前記の姿勢から、セットポジションに移ったり、ストレッチをすることは許されない。―― 違反すればボークとなる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
274	規則	135	5.07a1【注1】	8.01a注1	windアップポジション	アマチュア野球では、投手の軸足および自由な足に関し、次のとおりとする。① 投手は、打者に面して立ち、その軸足は投手板に触れて置き、他の足の置き場所には制限がない。ただし、他の足を投手板から離して置くときは、足全体を投手板の前縁の延長線より前に置くことはできない。② 投手が①のように足を置いてボールを両手で身体の前方に保持すれば、windアップポジションをとったものとみなされる。
275	規則	136	5.07a1【注2】	8.01a注2	windアップポジション	投手が投球に関連する動作をして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板を外すこともできない。違反すればボークとなる。
276	規則	137	5.07a2	8.01b	セットポジション	投手は、打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方に保持して、完全に動作を静止したとき、セットポジションをとったとみなされる。 この姿勢から、投手は、 ① 打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方(後方に限る)に外してもよい。 ② 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。  セットポジションをとるに際して「ストレッチ」として知られている準備動作(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)を行なうことができる。しかし、ひとたびストレッチを行なったならば、打者に投球する前に、必ずセットポジションをとらなければならない。 投手は、セットポジションをとるに先立って、片方の手を下に下ろして身体の横につけていなければならない。この姿勢から、中断することなく、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。 投手は、ストレッチに続いて投球する前には(a)ボールを両手で身体の前方に保持し、(b)完全に静止しなければならない。審判員は、これを厳重に監視しなければならない。投手は、しばしば走者を塁に釘づけにしようとして規則破りを企てる。投手が「完全な静止」を怠った場合には、審判員は、ただちにボークを宣告しなければならない。
277	規則	138	5.07a2【原注】	8.01b原注	セットポジション	走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。6.02(a)(5)[原注]参照。
285	規則	146	5.07a2【答】	8.01b答	セットポジション	たとえ顔の前で両手を接触させても、そのままの連続したモーションで、胸の前に下ろして静止すれば、ボークにはならない。しかし、いったん顔の前で停止すれば、そこでボールを保持したことになるから、その姿勢から両手を下に下ろせばボークとなる。
278	規則	139	5.07a2【注1】	8.01b注1	セットポジション	我が国では、本項[原注]の前段は適用しない。
279	規則	140	5.07a2【注2】	8.01b注2	セットポジション	(1)(2)項でいう「途中で止めたり、変更したり」とはwindアップポジションおよびセットポジションにおいて、投手が投球動作中に、故意に一時停止したり、投球動作をスムーズに行わずに、ことさらに段階をつけるモーションをしたり、手足をぶらぶらさせて投球することである。
280	規則	141	5.07a2【注3】	8.01b注3	セットポジション	投手がセットポジションをとるにあたっては、投手板を踏んだ後投球するまでに、必ずボールを両手で保持したことを明らかにしなければならない。その保持に際しては、身体の前部ならどこで保持してもよいが、いったん両手でボールを保持して止めたならば、その保持した個所を移動させてはならず、完全に身体の動作を停止して、首以外はどこも動かしてはならない。
281	規則	142	5.07a2【注4】	8.01b注4	セットポジション	セットポジションからの投球に際して、自由な足は、 ① 投手板の真横に踏み出さない限り、前方ならどの方向に踏み出しても自由である。 ② windアップポジションの場合のように、1歩後方に引き、そして更に1歩踏み出すことは許されない。
282	規則	143	5.07a2【注5】	8.01b注5	セットポジション	投手は走者が塁にいるとき、セットポジションをとってからも、プレイの目的のためなら、自由に投手板を外すことができる。この場合、軸足は必ず投手板の後方に外さなければならない、側方または前方に外すことは許されない。投手が投手板を外せば、打者への投球はできないが、走者のいる塁には、ステップをせずにスナップだけで送球することも、また送球のまねをすることも許される。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
283	規則	144	5.07a2【注6】	8.01b注6	セットポジション	ワインドアップポジションとセットポジションとの区別なく、軸足を投手板に触れてボールを両手で保持した投手が、投手板から軸足を外すにあたっては、必ずボールを両手で保持したまま外さねばならない。また、軸足を投手板から外した後は、必ず両手を離して身体の両側に下ろし、あらためて軸足を投手板に触れなければならない。
284	規則	145	5.07a2【問】	8.01b問	セットポジション	投手がストレッチを行ってから、セットポジションをとるまでに、両手を顔の前で接触させ、そのまま下ろし、胸の前でボールを保持した。ボークになるか。
288	規則	149	5.07d	8.01c	塁に送球	投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への投球に関連する動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。
289	規則	150	5.07d【原注】	8.01c原注	塁に送球	投手は送球の前には、必ず足を踏み出さなければならない。スナップスロー(手首だけで送球すること)の後で、塁に向かって踏み出すようなことをすればボークとなる。
290	規則	151	5.07d【注】	8.01c注	塁に送球	投手が投手板を外さずに一塁へ送球する場合、投手板上で軸足が踏みかわっても、その動作が一挙動であればさしつかえない。しかし、送球前に軸足を投手板の上でいったん踏みかえた後に送球すれば、軸足の投手板上の移行としてボークとなる。
584	規則	102	6.02b	8.01d	反則投球	塁に走者がいないときに、投手が反則投球をした場合には、その投球には、ボールが宣告される。ただし、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達した場合は除く。
585	規則	103	6.02b【原注】	8.01d原注	反則投球	投球動作中に、投手の手からとび出したボールがファウルラインを越えたときだけボールと宣告されるが、その他の場合は、投球とみなされない。塁に走者がいれば、ボールが投手の手から落ちたときただちにボークとなる。
586	規則	104	6.02b【注】	8.01d注	反則投球	球審は、反則投球に対してボールを宣告したならば、それが反則投球によるものであることを投手に指摘する なお、6.02(c)(6)に違反した場合には、6.02(d)を適用する。
291	規則	152	5.07e	8.01e	軸足を外したとき	投手がその軸足を投手板の後方に外したときは、内野手とみなされる。したがって、その後、塁に送球したボールが悪送球となった場合には、他の内野手による悪送球と同様に扱われる。
292	規則	153	5.07e【原注】	8.01e原注	軸足を外したとき	投手は、投手板を離れているときならば、意のままに走者のいる塁ならどの塁に送球してもよいが、もしその送球が悪送球となれば、その送球は内野手の送球とみなされ、その後の処置は、野手の送球に関する規則が適用される。(5.06b4G)
293	規則	154	5.07f	8.01f	両手投げ投手	投手は、球審、打者および走者に、投手板に触れる際、どちらかの手にグラブをはめることで、投球する手を明らかにしなければならない。 投手は、打者がアウトになるか走者になるか、攻守交代になるか、打者に代打者が出るか、あるいは投手が負傷するまでは、投球する手を変えることはできない。投手が負傷したために、同一打者の打撃中に投球する手を変えれば、その投手は以降再び投球する手を変えることはできない。 投手が投球する手を変えたときには、準備投球は認められない。 投球する手の変更は、球審にはっきりと示さなければならない。
270	規則	131	5.07a【原注】	8.01原注	正規の投球姿勢	投手がサインを見終わってから、投手板を外すことはさしつかえないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は、審判員によってクイックピッチと判断される。投手は、投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。 投手が、サインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。
587	規則	105	6.02c	8.02	投手の禁止事項	投手は次のことを禁じられる。
588	規則	106	6.02c1	8.02a1	投手の禁止事項	投手が投手板を囲む18 <sup>2</sup> / <sub>1</sub> の円い場所の中で、投球する手を口または唇につけた後にボールに触れるか、投手板に触れているときに投球する手を口または唇につけること。 投手は、ボールまたは投手板に触れる前に、投球する手の指をきれいに拭かなければならない。
589	規則	107	6.02c1【例外】	8.02a1例外	投手の禁止事項	天候が寒い日の試合開始前に、両チーム監督の同意があれば、審判員は、投手が手に息を吹きかけることを認めることができる。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
590	規則	108	6.02c1【例外】ペナルティ	8.02a1例外ペナルティ	投手の禁止事項	投手が本項に違反した場合には、球審はただちにボールを交換させ、投手に警告を発する。投手がさらに違反した場合には、ボールを宣告する。その宣告にもかかわらず、投手が投球して、打者が安打、失策、死球、その他で一塁に達し、かつ走者が次塁に達するか、または元の塁にとどまっていた(次塁に達するまでにアウトにならなかった)ときには、本項の違反とは関係なくプレイは続けられる。なお、違反を繰り返した投手は、リーグ会長から罰金が科せられる。
591	規則	109	6.02c2	8.02a2	投手の禁止事項	ボール、投球する手またはグラブに唾液をつけること。
592	規則	110	6.02c3	8.02a3	投手の禁止事項	ボールをグラブ、身体、着衣で摩擦すること。
593	規則	111	6.02c4	8.02a4	投手の禁止事項	ボールに異物をつけること。
594	規則	112	6.02c5	8.02a5	投手の禁止事項	どんな方法であっても、ボールに傷をつけること。
595	規則	113	6.02c6	8.02a6	投手の禁止事項	(2)～(5)項で規定されている方法で傷つけたボール、いわゆるシャインボール、スピットボール、マッドボール、あるいはエメリーボールを投球すること。 ただし、投手は素手でボールを摩擦することは許される。
607	規則	125	【6.02d原注1】	8.02a原注1	投手の禁止事項	投手が(c)項(2)または(3)に違反しても、その投球を変化させる意図はなかったと球審が判断した場合は、本項のペナルティを適用せずに警告を発することができる。しかし、投手が違反を繰り返せば、球審はその投手にペナルティを科さなければならない。
608	規則	126	【6.02d原注2】	8.02a原注2	投手の禁止事項	ロジンバッグにボールが触れたときは、どんなときでも、ボールインプレイである。 雨天の場合または競技場が湿っている場合には、審判員は投手にロジンバッグを腰のポケットに入れるよう指示する。(1個のロジンバッグを交互に使用させる) 投手はこのロジンバッグを用いて、素手にロジンをつけることを許されるが、投手、野手を問わず、プレーヤーは、ロジンバッグで、ボールまたはグラブにロジンをふりかけたり、またはユニフォームのどの部分にも、これをふりかけることは許されない。
596	規則	114	6.02c6【注】	8.02a注1	投手の禁止事項	シャインボール --- ボールを摩擦してすべすべにしたもの。 スピットボール --- ボールに唾液を塗ったもの。 マッドボール --- ボールに泥をなすりつけたもの。 エメリーボール --- ボールをサンドペーパーでザラザラにしたもの。 なお、ボールに息を吹きかけることも禁じられている。
609	規則	127	【6.02d注】	8.02a注2	投手の禁止事項	アマチュア野球では、本項のペナルティを適用せず、1度警告を発した後、なおこのような行為が継続されたときには、その投手を試合から除く。
606	規則	124	6.02dペナルティ	8.02aペナルティ	投手の禁止事項	投手が(c)項(2)～(7)に違反した場合、球審は次のような処置をしなければならない。 (1) 投手はただちに試合から除かれ、自動的に出場停止となる。マイナーリーグでは、自動的に10試合の出場停止となる。 (2) 球審が違反を宣告したにもかかわらずプレイが続けられたときには、攻撃側の監督は、そのプレイが終わってからただちにそのプレイを生かす旨、球審に通告することができる。ただし、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が次塁に達するか、元の塁にとどまっていた(次塁に達するまでにアウトにならなかった)ときには、反則とは関係なくプレイは続けられる。 (3) (2)項の場合でも、投手の反則行為は消滅せず、(1)項のペナルティは適用される。 (4) 攻撃側の監督がそのプレイを生かすことを選択しなかった場合は、球審は走者がいなければボールを宣告し、走者がいればボークとなる。 (5) 投手が各項に違反したかどうかについては、審判員が唯一の決定者である。
597	規則	115	6.02c7	8.02b	投手の禁止事項	投手がいかなる異物でも、身体につけたり、所持すること。
598	規則	116	6.02c7【原注】	8.02b原注	投手の禁止事項	投手は、いずれの手、指または手首に何もつけてはならない(たとえば救急ばんそうこう、テープ、瞬間接着剤、ブレスレットなど)。審判員が異物と判断するかしないか、いずれの場合も、手、指または手首に何かをつけて投球することを許してはならない。
599	規則	117	6.02c7【注】	8.02b注	投手の禁止事項	我が国では、本項【原注】については、所属する団体の規定に従う。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
600	規則	118	6.02c8	8.02c	投手の禁止事項	打者がバッタースボックスにいるときに、捕手以外の野手に送球して、故意に試合を遅延させること。ただし、走者をアウトにしようと企てる場合は除く。
602	規則	120	6.02c8【注1】	8.02c注1	投手の禁止事項	投手が捕手のサインを投手板から離れて受けるので、しばしば試合を遅延させている。これは悪い習慣であるから、監督およびコーチはこれを是正するように努めなければならない。
603	規則	121	6.02c8【注2】	8.02c注2	投手の禁止事項	アマチュア野球では、本項ペナルティの後段を適用せず、このような遅延行為が繰り返されたときは、ボールを宣告する。
601	規則	119	6.02c8ペナルティ	8.02cペナルティ	投手の禁止事項	審判員は1度警告を発し、しかもなお、このような遅延行為が繰り返されたときには、その投手を試合から除く。
604	規則	122	6.02c9	8.02d	投手の禁止事項	打者を狙って投球すること。このような反則行為が起きたと審判員が判断したときには、審判員は次のうちのいずれかを選ぶことができる。 (A) その投手またはその投手とそのチームの監督とを試合から除く。 (B) その投手と両チームの監督に、再びこのような投球が行われたら、その投手(またはその投手の後に出場した投手)と監督を退場させる旨の警告を発する。 審判員は、反則行為が起きそうな状況であると判断したときには、試合開始前、あるいは試合中を問わず、いつでも両チームに警告を発することができる。 リーグ会長は、8.04に規定された権限によって、制裁を加えることができる。
605	規則	123	6.02c9【原注】	8.02d	投手の禁止事項	打者を狙って投球することは、非スポーツマン的である。特に頭を狙って投球することは、非常に危険であり、この行為は許されるべきではない。審判員はちゅうちょなく、本項を厳格に適用しなければならない。
286	規則	147	5.07b	8.03	準備投球	投手は各回のはじめに登板する際、あるいは他の投手を救援する際には、捕手を相手に8球を超えない準備投球をすることは許される。この間プレイは停止される。 各リーグは、その独自の判断で、準備投球の数を8球以下に制限してもさしつかえない。このような準備投球は、いずれの場合も1分間を超えてはならない。 突然の事故のために、ウォームアップをする機会を得ないで登板した投手には、球審は必要と思われる数の投球を許してもよい。
287	規則	148	5.07c	8.04	投手の遅延行為	塁に走者がいないとき、投手はボールを受けた後12秒以内に打者に投球しなければならない。投手がこの規則に違反して試合を長引かせた場合には、球審はボールを宣告する。 12秒の計測は、投手がボールを所持し、打者がバッタースボックスに入り、投手に面したときから始まり、ボールが投手の手から離れたときに終わる。 この規則は、無用な試合引き延ばし行為をやめさせ、試合をスピードアップするために定められたものである。したがって、審判員は次のことを強調し、それにもかかわらず、投手の明らかな引き延ばし行為があったときには、遅滞なく球審はボールを宣告する。 (1) 投球を受けた捕手は、速やかに投手に返球すること。 (2) また、これを受けた投手は、ただちに投手板を踏んで、投球位置につくこと。
554	規則	072	6.02a	8.05	ボーク	塁に走者がいるときは、次の場合ボークとなる。
555	規則	073	6.02a1	8.05a	ボーク	投手板に触れている投手が、投球に関連する動作を起こしながら、投球を中止した場合。
556	規則	074	6.02a1【原注】	8.05a原注	ボーク	左投げ、右投げ、いずれの投手でも、自由な足を振って投手板の後縁を越えたら、打者へ投球しなければならない。ただし、二塁走者のピックオフプレイのために二塁へ送球することは許される。
557	規則	075	6.02a2	8.05b	ボーク	投手板に触れている投手が、一塁または三塁に送球するまねだけして、実際に送球しなかった場合。
558	規則	076	6.02a2【注】	8.05b注	ボーク	投手が投手板に触れているとき、走者のいる二塁へは、その塁の方向に直接ステップすれば偽投してもよいが、一塁または三塁と打者への偽投は許されない。投手が軸足を投手板の後方へ外せば、走者のいるどの塁へもステップしないで偽投してもよいが、打者にだけは許されない。
559	規則	077	6.02a3	8.05c	ボーク	投手板に触れている投手が、塁に送球する前に、足を直接その塁の方向に踏み出さなかった場合。



公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
560	規則	078	6.02a3【原注】	8.05c原注	ボーク	投手板に触れている投手は、塁に送球する前には直接その塁の方向に自由な足を踏み出すことが要求されている。投手が実際に踏み出さずに、自由な足の向きを変えたり、ちょっと上にあげて回したり、または踏み出す前に身体の向きを変えて送球した場合、ボークである。投手は、塁に送球する前に塁の方向へ直接踏み出さなければならない、踏み出したら送球しなければならない(二塁については例外)走者一・三塁のとき、投手が走者を三塁に戻すために三塁へ踏み出したが実際に送球しなかったら(軸足は投手板に触れたまま)、ボークとなる。
561	規則	079	6.02a4	8.05d	ボーク	投手板に触れている投手が、走者のいない塁へ送球したり、送球するまねをした場合。 ただし、プレイの必要があればさしつかえない。
562	規則	080	6.02a4【原注】	8.05d原注	ボーク	投手が走者のいない塁へ送球したり、送球するまねをした場合、審判員は、それが必要なプレイかどうかを、走者がその塁に進もうとしたか、あるいはその意図が見られたかで判断する。
564	規則	082	6.02a4【原注】【答】	8.05d原注・答	ボーク	ボークである。しかし一塁走者が二塁に盗塁しようとしたのを防ぐ目的で、第1動作で二塁の方向に正しく自由な足を踏み出せば、ボークにならない。なお投手が投手板を正規に外せば、ステップをしないで送球してもかまわない。
563	規則	081	6.02a4【原注】【問】	8.05d原注・問	ボーク	走者一塁のとき、走者のいない二塁に送球したり、または送球するまねをしたらボークか。
565	規則	083	6.02a5	8.05e	ボーク	投手が反則投球をした場合。
566	規則	084	6.02a5【原注】	8.05e原注	ボーク	クイックピッチは反則投球である。打者が打者席内でまだ十分な構えをしていないときに投球された場合には、審判員は、その投球をクイックピッチと判定する。塁に走者がいればボークとなり、いなければボールである。クイックピッチは危険なので許してはならない。
567	規則	085	6.02a6	8.05f	ボーク	投手が打者に正対しないうちに投球した場合。
568	規則	086	6.02a7	8.05g	ボーク	投手が投手板に触れないで、投球に関連する動作をした場合。
570	規則	088	6.02a7【答】	8.05g答	ボーク	投手が投手板に触れないで、投球に関連する動作を起こしているからボークとなる。
569	規則	087	6.02a7【問】	8.05g問	ボーク	走者一塁のとき、投手が投手板をまたいだままストレッチを始めたがボールを落とした。ボークとなるか。
571	規則	089	6.02a8	8.05h	ボーク	投手が不必要に試合を遅延させた場合。
572	規則	090	6.02a8【原注】	8.05h原注	ボーク	本項は、6.02(c)(8)により警告が発せられたときは、適用されない。投手が遅延行為を繰り返して6.02(c)(8)により試合から除かれた場合には、あわせて本項のボークも課せられる。5.07(c)は、塁に走者がいないときだけ適用される。
573	規則	091	6.02a9	8.05i	ボーク	投手がボールを持たないで、投手板に立つか、これをまたいで立つか、あるいは投手板を離れていて投球するまねをした場合。
574	規則	092	6.02a10	8.05j	ボーク	投手が正規の投球姿勢をとった後、実際に投球するか、塁に送球する場合を除いて、ボールから一方の手を離れた場合。
575	規則	093	6.02a11	8.05k	ボーク	投手板に触れている投手が、故意であろうと偶然であろうと、ボールを落とした場合。
576	規則	094	6.02a12	8.05l	ボーク	故意四球が企図されたときに、投手がキャッチャースボックスの外にいる捕手に投球した場合。
577	規則	095	6.02a12【注】	8.05l注	ボーク	“キャッチャースボックスの外にいる捕手、とは、捕手がキャッチャースボックス内に両足を入れていないことをいう。したがって、故意四球が企図されたときに限って、ボールが投手の手を離れないうちに捕手が片足でもボックスの外に出しておれば、本項が適用される。
578	規則	096	6.02a13	8.05m	ボーク	投手がセットポジションから投球するに際して、完全に静止しないで投球した場合。
583	規則	101	【6.02a原注】	8.05原注	ボーク	ボークルールの目的は、投手が走者を意図的に騙そうとするのを防ぐためであることを、審判員は心に銘記しなくてはならない。もし、審判員の判断で投手の“意図、に疑いを抱いたら、審判員は厳重に規則を適用すべきである。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
582	規則	100	6.02a【規則説明1】【注】	8.05注	ボーク	前掲〔規則説明1〕の「悪送球」には、投手の悪送球だけではなく、投手からの送球を止め損じた野手のミスプレイも含まれる。走者が、投手の悪送球または野手のミスプレイによって余塁が奪えそうな状態となり、ボークによって与えられる塁を越えて余分に進もうとしたときには、ボークと関係なくプレイは続けられる。
580	規則	098	6.02a【規則説明1】	8.05付記1	ボーク	投手がボークをして、しかも塁または本塁に悪送球(投球を含む)した場合、塁上の走者はボークによって与えられる塁よりもさらに余分の塁へアウトを賭して進塁してもよい。
581	規則	099	6.02a【規則説明2】	8.05付記2	ボーク	(a)項ペナルティを適用するに際して、走者が進塁しようとする最初の塁を空過し、アピールによってアウトを宣告されても、1個の塁を進んだものと解する。
579	規則	097	6.02aペナルティ	8.05ペナルティ	ボーク	(a)項各規定によってボークが宣告されたときは、ボールデッドとなり、各走者は、アウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、ボークにもかかわらず、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、かつ、他のすべての走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、このペナルティの前段を適用しないで、プレイはボークと関係なく続けられる。
436	規則	297	5.10I	8.06	マウンドに行く回数	マウンドに行く回数 プロフェッショナルリーグは、監督またはコーチが投手のもとへ行くことに関して、次の規則を適用しなければならない。 (1) この項は、監督またはコーチが、1イニングに同一投手のもとへ行ける回数を制限する規則である。 (2) 監督またはコーチが、1イニングに同一投手のもとへ2度目に行けば、その投手は自動的に試合から退かなければならない。 (3) 監督またはコーチは、そのときの打者が打撃を続けている限り、再びその投手のもとへ行くことはできない。 (4) 攻撃側がその打者に代打者を出した場合には、監督またはコーチは再びその投手のもとへ行ってもよいが、その投手は試合から退かなければならない。 監督またはコーチが投手のもとへ行った後、投手板を囲んでいる182ㄢの円い場所を離れたら、1度行ったことになる。
437	規則	298	【5.10I原注】	8.06原注	マウンドに行く回数	監督(またはコーチ)が、捕手または内野手のところへ行き、その野手があるままマウンドに行ったり、投手が、守備位置にいるその野手のところへ行ったりしたときは、監督(またはコーチ)がマウンドに行ったものと同様に扱われる。ただし、1球が投じられた後、またはプレイが行なわれた後は、この限りではない。 監督(またはコーチ)が、捕手または内野手のところへ行き、その野手が投手と相談するためにマウンドに行き、規則の適用をのがれようとしたり、規則を出し抜こうとするいかなる企ても、すべてマウンドへ行った回数に数えられる。 コーチがマウンドに行き投手を退け、新しく出てきた投手に指示を与えるために監督がマウンドに行ったときは、そのイニングで新しい投手のもとへ1度行ったことになる。 監督がすでに1度投手のもとへ行っているため、同一イニングで同一投手へ、同一打者のときには、もう1度行くことはできないと審判員が警告したにもかかわらず、監督が行った場合、その監督は試合から除かれ、投手はただちに退かないでその打者がアウトになるか、走者になるまで投球し、その義務を果たした後に試合から退かなければならない。この場合、監督は、その投手は1人の打者に投球したら交代しなければならないのだから、リリーフ投手にウォームアップさせておかねばならない。リリーフ投手は、審判員の適宜な判断において、8球またはそれ以上の準備投球が許される。 投手が負傷を受けたとき、監督がその投手のもとへ行きたいときには、審判員にその許可を要請することができる。許可があれば、マウンドに行く回数には数えられない。
438	規則	299	【5.10I注1】	8.06注1	マウンドに行く回数	我が国では本項にある「投手板を囲んでいる182ㄢの円い場所」を「ファウルライン」と置きかえて適用する。
439	規則	300	【5.10I注2】	8.06注2	マウンドに行く回数	監督(またはコーチ)が投手のもとへ行った後、ファウルラインを越えて引き上げたら、その投手は、そのときの打者がアウトになるか、走者になるか、または攻守交代になるまで投球した後でなければ退くことはできない。ただし、その打者に代打者が出た場合は、この限りではない。
440	規則	301	【5.10I注3】	8.06注3	マウンドに行く回数	監督(またはコーチ)が投手のもとへ行った回数を数えるにあたって、イニングの途中で投手交代の通告が行なわれた後、プレイが再開されるまでに新しく出てきた投手のもとへ監督(またはコーチ)が行った場合、監督(またはコーチ)がマウンドに行き投手を退け、そのままどまって新しく出てきた投手に指示を与えて引き上げた場合、いずれも1度とは数えないが、次の場合は、いずれも監督(またはコーチ)が投手のもとへ行った回数として数える。 ① 監督(またはコーチ)がファウルライン近くまで来て投手に指示を与えた場合。ただし、ファウルライン近くまで来たが、投手に指示を与えることもなくそのまま思い直して引き返した場合を除く。 ② 投手の方からファウルラインを越えて、監督(またはコーチ)の指示を受けた場合。 ③ コーチがマウンドに行き投手を退け、ファウル地域まで戻ってきて監督と打ち合わせてから、新しく出てきた投手のもとへ行った場合。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
441	規則	302	【5.10I注4】	8.06注4	マウンドに行く回数	コーチ(または監督)が、マウンドに行き投手を退け、新しく出てきた救援投手に指示を与えるために監督(またはコーチ)がマウンドに行った後、そのときの打者に代打者が出されたとき、監督(またはコーチ)が再びその投手のもとへ行くことは許されるが、その投手はただちに試合から退くことはできず、その代打者がアウトになるか、走者になるか、攻守交代になるまで投球した後に、退かなければならない。
442	規則	303	【5.10I注5】	8.06注5	マウンドに行く回数	アマチュア野球では、本項については、各連盟の規定を適用する。
729	規則	002	8.01	9.01	審判員の資格と権限	
730	規則	003	8.01a	9.01a	審判員の資格と権限	リーグ会長は、1名以上の審判員を指名して、各リーグの選手権試合を主宰させる。 審判員は、本公認規則に基づいて、試合を主宰するとともに、試合中、競技場における規律と秩序とを維持する責にも任ずる。
731	規則	004	8.01b	9.01b	審判員の資格と権限	各審判員は、リーグおよびプロフェッショナルベースボールの代表者であり、本規則を厳格に適用する権限を持つとともに、その責にも任ずる。審判員は、プレーヤー、コーチ、監督のみならず、クラブ役員、従業員でも、本規則の施行上、必要があるときには、その所定の任務を行なわせ、支障のあるときには、その行動を差し控えさせることを命じる権限と、規則違反があれば、規定のペナルティを科す権限とを持つ。
732	規則	005	8.01c	9.01c	審判員の資格と権限	審判員は、本規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている。
733	規則	006	8.01d	9.01d	審判員の資格と権限	審判員は、プレーヤー、コーチ、監督または控えのプレーヤーが裁定に異議を唱えたり、スポーツマンらしくない言動をとった場合には、その出場資格を奪って、試合から除く権限を持つ。審判員がボールインプレイのとき、プレーヤーの出場資格を奪った場合には、そのプレイが終了して、初めてその効力が発生する。
734	規則	007	8.01e	9.01e	審判員の資格と権限	審判員は、その判断において、必要とあれば、次の人々を競技場から退場させる権限を持つ。すなわち、 (1) グラウンド整備員、案内人、写真班、新聞記者、放送局員などのように、仕事の性質上、競技場に入ることを許されている人々。 (2) 競技場に入ることを許されていない観衆またはその他の人々。
735	規則	008	8.02	9.02	審判員の裁定	
736	規則	009	8.02a	9.02a	審判員の裁定	打球がフェアかファウルか、投球がストライクかボールか、あるいは走者がアウトかセーフかという裁定に限らず、審判員の判断に基づく裁定は最終のものであるから、プレーヤー、監督、コーチ、または控えのプレーヤーが、その裁定に対して、異議を唱えることは許されない。
737	規則	010	8.02a【原注】	9.02a原注	審判員の裁定	ボール、ストライクの判定について異議を唱えるためにプレーヤーが守備位置または塁を離れたり、監督またはコーチがベンチまたはコーチボックスを離れることは許されない。もし、宣告に異議を唱えるために本塁に向かってスタートすれば、警告が発せられる。警告にもかかわらず本塁に近づけば、試合から除かれる。
738	規則	011	8.02b	9.02b	審判員の裁定	審判員の裁定が規則の適用を誤って下された疑いがあるときには、監督だけがその裁定を規則に基づく正しい裁定に訂正するように要請することができる。 しかし、監督はこのような裁定を下した審判員に対してだけアピールする(規則適用の訂正を申し出る)ことが許される。
739	規則	012	8.02b【注1】	9.02b注1	審判員の裁定	イニングの表または裏が終わったときは、投手および内野手がフェア地域を去るまでにアピールしなければならない。
740	規則	013	8.02b【注2】	9.02b注2	審判員の裁定	審判員が、規則に反した裁定を下したにもかかわらず、アピールもなく、定められた期間が過ぎてしまったあとでは、たとえ審判員が、その誤りに気づいても、その裁定を訂正することはできない。
741	規則	014	8.02c	9.02c	審判員の裁定	審判員が、その裁定に対してアピールを受けた場合は、最終の裁定を下すにあたって、他の審判員の意見を求めることはできる。裁定を下した審判員から相談を受けた場合を除いて、審判員は、他の審判員の裁定に対して、批評を加えたり、変更を求めたり、異議を唱えたりすることは許されない。 審判員が協議して先に下した裁定を変更する場合、審判員は、走者をどこまで進めるかを含め、すべての処置をする権限を有する。この審判員の裁定に、プレーヤー、監督またはコーチは異議を唱えることはできない。異議を唱えれば、試合から除かれる。
742	規則	015	8.02c【原注1】	9.02c原注1	審判員の裁定	監督は、審判員にプレイおよび裁定を変更した理由について説明を求めることはできる。しかし、いったん審判員の説明を受ければ、審判員に異議を唱えることは許されない。

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
743	規則	016	8.02c【原注2】	9.02c原注2	審判員の裁定	<p>ハーフスイングの際、球審がストライクと宣告しなかったときだけ、監督または捕手は、振ったか否かについて、塁審のアドバイスを求めるよう球審に要請することができる。球審は、このような要請があれば、塁審にその裁定を一任しなければならない。</p> <p>塁審は、球審からの要請があれば、ただちに裁定を下す。このようにして下された塁審の裁定は最終のものである。</p> <p>監督または捕手からの要請は、投手が打者へ次の1球を投じるまで、または、たとえ投球しなくてもその前にプレイをしたりプレイを企てるまでに行なわなければならない。イニングの表または裏が終わったときの要請は、守備側チームのすべての内野手がフェア地域を去るまでに行なわなければならない。</p> <p>ハーフスイングについて、監督または捕手が前記の要請を行なってもボールインプレイであり、塁審がストライクの裁定に変更する可能性があるから、打者、走者、野手を問わず、状況の変化に対応できるよう常に注意していなければならない。</p> <p>監督が、ハーフスイングに異議を唱えるためにダッグアウトから出て一塁または三塁に向かってスタートすれば警告が発せられる。警告にもかかわらず一塁または三塁に近づけば試合から除かれる。監督はハーフスイングに関して異議を唱えるためにダッグアウトを離れたつもりでも、ボール、ストライクの宣告について異議を唱えるためにダッグアウトを離れたことになるからである。</p>
744	規則	017	8.02d	9.02d・9.03a	審判員の裁定	<p>試合中、審判員の変更は認められない。ただし、病気または負傷のため、変更の必要が生じた場合はこの限りではない。</p> <p>1人の審判員だけで試合を担当する場合には、その義務と権限は、競技場のあらゆる点、本規則のあらゆる条項に及び、その任務の遂行上、競技場内の最適と思われる場所に位置をとらなければならない。(通常は捕手の後方に、走者がいる場合は、ときとして投手の後方に位置をとる)</p>
745	規則	018	8.02e	9.03b	審判員の裁定	<p>2人以上の審判員が試合を担当する場合は、1人はアンパイヤーインチーフ(球審)に、他はフィールドアンパイヤー(塁審)に指定されなければならない。</p>
746	規則	019	8.03	9.04	球審および塁審の任務	
747	規則	020	8.03a	9.04a	球審および塁審の任務	<p>アンパイヤーインチーフ(通常球審と呼ばれている)は、捕手の後方に位置し、その任務は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 試合の適正な運行に関するすべての権限と義務を持つ。</li> <li>(2) 捕手の後方に位置し、ボールとストライクを宣告し、かつそれをカウントする。</li> <li>(3) 通常塁審によって宣告される場合を除いて、フェアボールとファウルボールを宣告する。</li> <li>(4) 打者に関するすべての裁定を下す。</li> <li>(5) 通常塁審が行なうものとされているものを除いたすべての裁定を下す。</li> <li>(6) フォーフイテッドゲームの裁定を下す。</li> <li>(7) 特定の時刻に競技を打ち切ることが決められている場合には、試合開始前にその事実と終了時刻を公表する。</li> <li>(8) 公式記録員に打撃順を知らせる。また出場プレーヤーに変更があれば、その変更を知らせる。</li> <li>(9) 球審の判断で特別グラウンドルールを発表する。</li> </ol>
748	規則	021	8.03b	9.04b	球審および塁審の任務	<p>フィールドアンパイヤーは、塁におけるとっさの裁定を下すのに最適と思われる位置を占め、その任務は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 特に球審が行なう場合を除く塁におけるすべての裁定を下す。</li> <li>(2) タイム、ボーク、反則投球またはプレーヤーによるボールの損傷・汚色の宣告について、球審と同等の権限を持つ。</li> <li>(3) この規則を施行するにあたって、あらゆる方法で球審を援助し、規則の施行と規律の維持については、球審と同等の権限を持つ。ただし、フォーフイテッドゲームの宣告はできない。</li> </ol>
749	規則	022	8.03c	9.04c	球審および塁審の任務	<p>一つのプレイに対して、2人以上の審判員が裁定を下し、しかもその裁定が食い違っていた場合には、球審は審判員を集めて協議し(監督、プレーヤーをまじえず、審判員だけで)、その結果、通常球審(または、このような場合には球審に代わって解決にあたるようにリーグ会長から選任された審判員)が、最適の位置から見たのはどの審判員であったか、またどの審判員の裁定が正しかったかなどを参酌して、どの裁定をとるかを決める。このようにして、決定された裁定は最終のものであり、初めから一つの裁定が下された場合と同様に、試合は続行されなければならない。</p>
750	規則	023	8.04	9.05	審判員の報告義務	
751	規則	024	8.04a	9.05a	審判員の報告義務	<p>審判員は、すべての規則違反またはその他の報告しなければならない出来事を、試合終了後、12時間以内にリーグ会長まで報告する義務がある。ただし、監督またはプレーヤーを退場させた試合には、その理由を付記することを必要とする。</p>

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
752	規則	025	8.04b	9.05b	審判員の報告義務	審判員がトレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーを次の理由で退場させた場合には、審判員はその詳細を4時間以内にリーグ会長に報告する義務がある。 すなわち、これらの人々が、審判員、トレーナー、監督、コーチまたはプレーヤーに、野卑不作法な言を用いて黙過できない侮辱を加えたためか、暴力を働いたことが退場理由となった場合がそれである。
753	規則	026	8.04c	9.05c	審判員の報告義務	リーグ会長は、審判員から、監督、コーチ、トレーナー、プレーヤーを退場させた旨の報告を受けたならば、ただちに自己の判断で適当と思われる制裁を科し、その旨を当事者ならびにその所属クラブの代表者に通告しなければならない。 制裁金を科せられた当事者が、通告後5日以内に、リーグ事務局長にその総額を支払わなかった場合には、支払いが完了するまで、試合に出場することもベンチに座ることも禁止される。
711	規則	055	補則 I	A	投球当時	投手の投球当時に占有していた塁に帰らせる場合。
712	規則	056	補則 I a	Aa	投球当時	ファウルボールが捕球されなかった場合。(5.06c5)
713	規則	057	補則 I b	Ab	投球当時	打者が反則打球した場合。(5.06c4、6.03a1)
714	規則	058	補則 I c	Ac	投球当時	投球が正規に位置している打者の身体または着衣に触れた場合。(5.06c1、5.09a6)
715	規則	059	補則 I d	Ad	投球当時	0アウトまたは1アウトで、走者一塁、一・二塁、一・三塁または一・二・三塁のとき、内野手がフェアの飛球またはライナーを故意に落とした場合。(5.09a12)
716	規則	060	補則 I e	Ae	投球当時	打球を守備しようとする野手を妨げた場合。 (1) フェアボールが、内野手(投手を含む)に触れる前に打者走者に触れた場合。(5.09a7) (2) フェアボールが、内野手(投手を含む)に触れる前、または内野手(投手を除く)を通過する前に、フェア地域で走者または審判員に触れた場合。(5.05b4、5.06c6、5.09b7、6.01a11) (3) 打者が打つかバントしたフェアの打球に、フェア地域内でバットが再び当たった場合。(5.09a8) (4) 打者または走者が打球を処理しようとしている野手の守備を妨げた場合。(5.09b3、6.01a6・7・10) (5) 打者または走者が、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも、故意に狂わせた場合。(5.09a9、6.01a2) (6) 攻撃側プレーヤーまたはベースコーチが、必要に応じて自己の占めている場所を譲らないで、打球を処理しようとしている野手を妨げて、守備妨害を宣告された場合。(5.09a15、6.01b)
717	規則	061	補則 I f	Af	投球当時	打者走者が、本塁から一塁へ走る際に、一塁への送球を受けようとしている野手の動作を妨げた場合。(5.09a11、定義44) --- 特に規定した場合を除く。
718	規則	062	補則 I g	Ag	投球当時	第3ストライクの宣告を受けただけでまだアウトになっていない打者走者、または四球の宣告を受けた打者走者が、捕手の守備を明らかに妨げた場合。(6.01a1)
719	規則	063	補則 II	B	妨害発生の瞬間	妨害発生の瞬間すでに占有していた塁に帰らせる場合。
720	規則	064	補則 II a	Ba	妨害発生の瞬間	投手の打者への投球に始まった守備を妨げた場合。 (1) 球審が捕手の送球動作を妨げた場合。(5.06c2) (2) 打者が捕手の送球動作を妨げた場合。(6.03a3) (3) 0アウトまたは1アウトで、走者が得点しようとしたとき、打者が本塁における守備側のプレイを妨げた場合。(5.09b8、6.01a3) (4) 打者が空振りした後、スイングの余勢で、その所持するバットが捕手または投球に当たり、審判員が故意ではないと判断した場合。(6.03a3原注)
721	規則	065	補則 II b	Bb	妨害発生の瞬間	捕手またはその他の野手が、打者の打撃を妨害した場合。(5.05b3、6.01c)
722	規則	066	補則 II c	Bc	妨害発生の瞬間	走者が故意に送球を妨げた場合。(5.09b3)
723	規則	067	補則 II d	Bd	妨害発生の瞬間	攻撃側チームのプレーヤーまたはベースコーチが、必要に応じて自己の占めている場所を譲らないで、送球を処理しようとしている野手を妨げたために、守備妨害でアウトを宣告された場合。(5.09a15、6.01b)

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
724	規則	068	補則Ⅱe	Be	妨害発生の瞬間	内野手が守備する機会を失った打球(内野手に触れたかどうかを問わない)を走者が故意にけつたと審判員が認めた場合。(6.01a11B) --- ボールをけつたときを基準とする
725	規則	069	補則Ⅱf	Bf	妨害発生の瞬間	アウトを宣告されたばかりの打者または走者、あるいは得点したばかりの走者が、野手の次の行為を妨げた場合。(6.01a5) --- 次の行為に移ろうとしたときを基準とする。
726	規則	070	補則Ⅱg	Bg	妨害発生の瞬間	1人または2人以上の攻撃側メンバーが、走者が達しようとする塁に接近して立つか、あるいはその塁の付近に集合して守備を妨害するか、惑乱させるか、ことさらに守備を困難にした場合。(6.01a4) --- その守備が起ころうとしたときを基準とする。
727	規則	071	補則Ⅲ	C	妨害発生の瞬間	走者三塁のとき、ベースコーチが自己のボックスを離れてなんらかの動作で野手の送球を誘発した場合、またはベースコーチが意識的に送球を妨げた場合(6.01a9、6.01f)には、その送球がなされたときにすでに占有していた塁に帰らせる。
754	規則	027	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示1	審判員は、競技場においては、プレーヤーと私語を交わすことなく、またコーチスボックスの中に入ったり、任務中のコーチに話しかけるようなことをしてはならない。 制服は常に清潔を保ち、しかも正しく着用し、競技場においては、積極的に機敏な動作をとらなければならない。 クラブ役職員に対しては常に礼儀を重んずる必要はあるが、クラブ事務所を訪ねたり、特にあるクラブの役職員と親しくするようなことは避けなければならない。 審判員が競技場に入れば、ただその試合の代表者として試合を審判することだけに専念しなければならない。 提訴試合にもなりかねないほどの悪い事態が起こった場合、その事態の解決を回避したという非難を受けるようなことがあってはならない。常に規則書を携行し、紛糾した問題を解決するにあたっては、たとえ10分間試合を停止することがあっても、よく規則書を調べ、その解決に万全を期して、その試合を提訴試合あるいは再試合にしないように努めなければならない。 試合を停滞させてはならない。試合は、しばしば審判員の活気ある真剣な運びによって、より以上の効果をもたらすものである。
755	規則	028	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示2	審判員は、競技場における唯一の代表者であって、強い忍耐と、よりよい判断とを必要とするようなつらい立場におかれることがしばしば起こるが、悪い事態に対処するにあたっては、感情を棄てて自制することが、いちばん大切なことである。 審判員は自己の決定について、誤りを犯しているのではないかと疑うようなことがあってはならないし、また、たとえ誤りを犯したとしても、埋め合わせをしようとはならない。すべて見たままに基づいて判定を下し、ホームチームとビジティングチームとに差別をつけるようなことがあってはならない。 試合進行中はボールから目を離してはならない。走者が塁を踏んだかどうかを知ることも大切ではあるが、飛球の落ちた地点を見定めたり、送球の行方を最後まで見きわめることがより重要なことである。プレイの判定を下すにあたっては、早まることなく、正確を期さなければならず、野手がダブルプレイをなしとげるために送球する場合にも、あまり早く向きを変えてはいけない。アウトを宣告した後、一応落球の有無を確かめる必要がある。走りながら“セーフ”、“アウト”の宣告の動作をすることなく、そのプレイが終わるのを待って、宣告を下さなければならない。
756	規則	029	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示	審判員に対する一般指示3	各審判員は簡単な1組のサインを用意しておく必要がある。これによって、自己のエラーを悟れば、その明らかに間違った決定を正すことができる。 “プレイを正しく見た”という確信があれば、“他の審判員に聞け”というプレーヤーの要求に従う必要はない。確信がなければ、同僚の1人に聞くこともよいが、これもあまり度を越すようなことなく、機敏にプレイを十分に把握して審判しなければならない。しかしながら、正しい判定を下すことが第1の要諦であることを忘れてはならない。疑念のあるときは、ちゅうちょせず同僚と協議しなければならない。審判員が威厳を保つことはもちろん大切であるが、“正確である”ということがより重要なことである。 審判員にとって最も大切な掟は、“あらゆるプレイについて最もよい位置をとれ”ということである。 たとえ判定が完璧であっても、審判員の位置が、そのプレイをはっきりと明確に見ることができる地点でなかったとプレーヤーが感じたときは、しばしば、その判定に異議を唱えるものである。 最後に、審判員は礼儀を重んじ、しかも公平にして厳格でなければならない。そうすれば、すべての人々から尊敬される。
174	規則	35	5.04b4A【注】新		バッタースボックスルール	《新》我が国では、所属する団体の規定に従う。
547	規則	065	6.01i新		本塁での衝突プレイ	

公認野球規則 新(2016年)旧(2015年以前)条文項目対比表【2015年昇順】

ID	種別	規則番号	2016規則通番	2015規則通番	規則項目名	規則内容
548	規則	066	6.01i1		本塁での衝突プレイ	得点しようとしている走者は、最初から捕手または本塁のカバーにきた野手(投手を含む、以下「野手」という)に接触しようとして、または避けられたにもかかわらず最初から接触をもくろんで走路から外れることはできない。もし得点しようとした走者が最初から捕手または野手に接触しようとしたと審判員が判断すれば、捕手または野手がボールを保持していたかどうかに関係なく、審判員はその走者にアウトを宣告する。その場合、ボールデッドとなって、すべての他の走者は接触が起きたときに占有していた塁(最後に触れていた塁)に戻らなければならない。走者が正しく本塁に滑り込んでいた場合には、本項に違反したとはみなされない。
549	規則	067	6.01i1【原注】		本塁での衝突プレイ	走者が触塁の努力を怠って、肩を下げたり、手、肘または腕を使って押ししたりする行為は、本項に違反して最初から捕手または野手と接触するために、または避けられたにもかかわらず最初から接触をもくろんで走路を外れたとみなされる。走者が塁に滑り込んだ場合、足からのスライディングであれば、走者の尻および脚が捕手または野手に触れる前に先に地面に落ちたとき、またヘッドスライディングであれば、捕手または野手と接触する前に走者の身体が先に地面に落ちたときは、正しいスライディングとみなされる捕手または野手が走者の走路をブロックした場合は、本項に違反して走者が避けられたにもかかわらず接触をもくろんだということを考える必要はない。
550	規則	068	6.01i2		本塁での衝突プレイ	捕手がボールを持たずに得点しようとしている走者の走路をブロックすることはできない。もし捕手がボールを持たずに走者の走路をブロックしたと審判員が判断した場合、審判員はその走者にセーフを宣告する。前記にかかわらず、捕手が送球を実際に守備しようとして走者の走路をふさぐ結果になった場合(たとえば、送球の方向、軌道、バウンドに反応して動いたような場合)には、本項に違反したとはみなされない。また、走者がスライディングすることで捕手との接触を避けられたならば、ボールを持たない捕手が本項に違反したとはみなされない。本塁でのフォースプレイには、本項を適用しない。
551	規則	069	6.01i2【原注】		本塁での衝突プレイ	捕手が、ボールを持たずに本塁をブロックするか(または実際に送球を守備しようとしていないとき)、および得点しようとしている走者の走塁を邪魔するか、障害した場合を除いて、捕手は本項に違反したとはみなされない。審判員が、捕手が本塁をブロックしたかどうかに関係なく、走者はアウトを宣告されていたであろうと判断すれば、捕手が走者の走塁を邪魔または障害したとはみなされない。また、捕手は、滑り込んでくる走者に触球するときには不必要かつ激しい接触を避けるために最大限の努力をしなければならない。滑り込んでくる走者と日常的に不必要かつ激しい接触(たとえば膝、レガース、肘または前腕を使って接触をもくろむ)をする捕手はリーグ会長の制裁の対象となる。
552	規則	070	6.01i2【注】		本塁での衝突プレイ	我が国では、本項の(1)(2)ともに、所属する団体の規定に従う。